日本ルワンダ学生会議
第 6 回本会議　活動報告書

2011 年 8 月 4 日～8 月 23 日

はじめに

本報告書をお手にとっていただき、ありがとうございます。

1994 年のジェノサイドから 17 年。首都のすさまじい建設ラッシュや友人のルワンダ人のちょっとした一言からも、ルワンダは「次へ進もう」としているのを感じることができました。もはや、ジェノサイドのことばかりに焦点を当てていては、今彼らが抱えている課題や取り組んでいる解決策を理解することはできない、私たちが訪問した現地の視察先はそういったことを教えてくれました。

この難しい過渡期を生きるルワンダ学生との本気の意見のぶつかり合いこそが、私たちの活動の醍醐味だと思っています。そして、第三者の日本人として彼らと何を議論するべきなのか、母国日本について何を伝えたいのか、考えるのに切磋琢磨しました。

また、私が重要だと考えるのは、日本人・ルワンダ人というくくりを超えてメンバー一人一人が持つ問題意識に従って自由に「伝え」「感じ」「考える」ことが活動のベースだということです。

よって本報告書は、単なる現地視察や会議の結論の報告だけにとどまらず、私たちメンバーの感想も記載するように心がけました。是非、私たちが感じ取ったものを理解していただきたいと思います。

最後に、出発前の準備から現地視察の受け入れまで、お世話になった方々の協力なしには本会議の開催はできませんでした。ここで今一度お礼を申し上げます。

2011 年 11 月

日本ルワンダ学生会議　メンバー一同

日本ルワンダ学生会議　第６回本会議報告書

＜目次＞

【序章】

団体紹介……8
ルワンダ共和国基礎情報……10

【第１章】第６回本会議　事業概要

活動概要……16
活動日程……17

【第２章】学生会議　活動報告

概要・議題……20
日本側からのプレゼンテーション
1. 文化交流……21
2. 歴史認識について考える……22
3. 東日本大震災……26
4. 原子力発電所……30
5. 日本の司法制度改革……32
6. 戦後和解……33
7. 平和の定義……35
ルワンダ側からのプレゼンテーション.
1. 女性の権利……41
2. ルワンダでの農業の役割……42
3. VISION2020……43
4. ルワンダにおける地方分権……45
5. ルワンダにおけるテクノロジー……49
6. ルワンダの周辺諸国……51
7. ガチャチャ法廷……54
8. ジェノサイド教育……55
9. 日本の歴史……57

【第 3 章】ルワンダ現地 活動報告

1. ジェノサイド・メモリアル……63
2. 在ルワンダ日本大使館……65
3. ラジオ局(Radio Salus)……67
4. Kings'Palace……70
5. キヨンベ地区……73
6. トゥワ村……77
7. イントワーリ小学校……82
8. 廃棄物処理場……87
9. JICA……94

【第 4 章】参加メンバー感想

1. 海原早紀 早稲田大学文化構想学部 4 年……104
2. 山崎暢子 関西学院大学法学部 3 年……106
3. 乾 敏恵 同志社大学大学院 1 年……108
4. 秦 七愛 多摩美術大学美術学部工芸科 3 年……110
5. 久保唯香 早稲田大学文化構想学部 2 年……112
6. 品川正之介 早稲田大学教育学部 2 年……114
7. 嶋田康平 早稲田大学法学部 2 年……120
8. 滝田知子 慶應義塾大学法学部 2 年……122
9. 永井陽右 早稲田大学教育学部 1 年……124

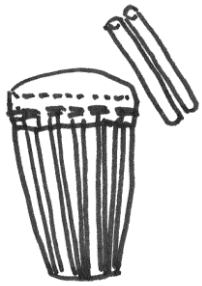
【付録】

コラム

1. とらぶルワンダ……29
2. ルワンダの食べ物事情……40
3. Battle バルトス！！……48
4. タクシーパニック……53
5. 結婚式 in ルワンダ……59
6. 出会い in ルワンダ……72
7. 感電コンサート……86
8. 消えるペン……93
9. おいしいパッションフルーツの作り方……101
10. 会計報告……128
11. 写真館……130

【序章】

団体紹介……...8
ルワンダ共和国基礎情報……10



日本ルワンダ学生会議　団体紹介

＜略歴＞

2005 年　10 月	早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター(WAVOC)が主催するスタディーツアーの形でルワンダ・プロジェクトがスタート
2008 年　9 月	ルワンダにて第 1 回本会議を開催
2009 年　3 月	団体名をルワンダプロジェクトから日本ルワンダ学生会議へ改称
9 月	ルワンダにて第 2 回本会議を開催
12 月	日本にて第 3 回本会議を開催
2010 年　1 月	日本ルワンダ学生会議関西支部が発足
8 月	ルワンダにて第 4 回本会議を開催
12 月	日本にて第 5 回本会議を開催
2011 年　8 月	ルワンダにて第 6 回本会議を開催

＜主な活動内容＞

・ルワンダへの渡航

・日本への招致

・週一回のミーティング

・勉強会

・各種イベントの参加・開催

＜構成人数＞（2011 年 10 月現在）

日本側メンバー29 名（関東 19 名　関西 10 名）

ルワンダ側メンバー30 名

＜活動理念＞

虐殺が行われた教会の壁にかけられている一枚の布には次のような言葉が書かれています。

「あなたが私を知っていたら、あなたがあなた自身を知っていたら、こんなことは起きなかっただろう」

ルワンダにおいて、情報の主体的入手と、偏見を捨てた相互理解は非常に大きな意味を持ちます。我々にとって、それは人類の悲劇から目をそむけたという自責の念に対し、相手を理解し自分を伝えるという地道な活動からアプローチしようとするものです。そしてそれは紛争・貧困などの社会問題にのみ目を向けていくことを意味するものではないでしょう。国際協力において、問題ありきで先進国として支援することばかりを考えていては、依存関係をつくり返って発展を阻害してしまうことすらあり得ます。途上国が真に自律し主体的に自らの豊かさを築いていくには、ともに社会問題を考え取り組む「仲間」が必要なのです。我々

は実際に生活している人々と交流し、彼らの現状・価値観・人生を知り、相互理解・尊重に基づき信頼関係を築く中で、ルワンダの‘Never again'に対し当事者意識を養うばかりでなく、「自由・平等・尊厳・持続可能性・寛容」の視座から真に豊かで平和な社会を考察し行動していく主体となるはずです。

近年世界で頻発する紛争における共通課題として宗教・民族対立があります。ルワンダにおいても植民地分離政策と虐殺におけるプロパガンダは人々の間に「憎しみ」と「偏見」を作ってしまいました。ルワンダの惨劇に対峙しようとする私たちは、「『偏見』を取り除き寛容な『人間同士』の関係づくりがひいては平和な社会を構築する」という信念から、学生会議という形で「相互理解」を理念に交流しています。会議では日本・ルワンダ両国の歴史や社会問題を広く議論し双方をより深く理解することで、両国のみならず人類の共通課題に向き合っていきます。

＜団体理念の継承＞

当団体は以下のような方法で学生会議としての継続性、発展を確保する。ユネスコ憲章には以下のような文言がある。

「相互の風習と生活を知らないことは、人類の歴史を通じて世界の諸人民の間に疑惑と不信をおこした共通の原因であり、この疑惑と不信のために、諸人民の不一致があまりにもしばしば戦争となった。

ここに終りを告げた恐るべき大戦争は、人間の尊厳・平等・相互の尊重という民主主義の原理を否認し、これらの原理の代わりに、無知と偏見を通じて人間と人種の不平等という教義をひろめることによって可能にされた戦争であった。

文化の広い普及と正義・自由・平和のための人類の教育とは、人間の尊厳に欠くことのできないものであり、且つすべての国民が相互の援助及び相互の関心の精神をもって果さなければならない神聖な義務である。」

ルワンダにおいては、民族対立による偏見や不寛容の心が虐殺という悲惨な結果に表れてしまった。我々の活動は「日本」や「ルワンダ」に対する偏見を取り除き、寛容な人間関係を築くことが恒久的な平和を築く、という視点から学生会議という形で相互理解を理念に交流している。

実際にルワンダや日本で両国の学生が互いの文化や生活を知り、両国や世界各地で起こる諸問題に対する認識を共有することで遠く離れた国の人々との信頼関係を築くことができると考えている。

この理念は常に継承されるものであり、新たにメンバーを加える際にはこれに同意していただくものとする。

＜公認＞

・駐日本ルワンダ共和国大使館
・アフリカ平和再建委員会（ARC）　小峯茂嗣
・早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター（WAVOC）

＜連絡先＞

メールアドレス：japan.rwanda@gmail.com

ホームページ：http://jp-rw.jimdo.com/

ルワンダ共和国基礎情報

（外務省ホームページより引用　2011 年 10 月現在）

正式名称：ルワンダ共和国（Republic of Rwanda）

一般事情

＜「千の丘の国」と呼ばれる自然豊かな内陸国＞

1.面積

2.63 万平方キロメートル

2.人口

1,030 万人（2010 年、UNFPA）

3.首都

キガリ

4.言語

キニアルワンダ語、英語、仏語

5.宗教

カトリック 57%、プロテスタント 26%、アドヴェンティスト 11%、イスラム教 4.6%等

6.略史

年月	略史
17 世紀	ルワンダ王国建国
1889 年	ドイツ保護領（第一次大戦後はベルギーの信託統治領）
1961 年	王政に関する国民投票（共和制樹立を承認） 議会がカイバンダを大統領に選出
1962 年	ベルギーより独立
1973 年	クーデター（ハビヤリマナ少将が大統領就任）
1990 年 10 月	ルワンダ愛国戦線（RPF）による北部侵攻
1993 年 8 月	アルーシャ和平合意
1994 年 4 月	ハビヤリマナ大統領暗殺事件発生をきっかけに 「ルワンダ大虐殺」発生（～1994 年 6 月）
1994 年 7 月	ルワンダ愛国戦線（RPF）が全土を完全制圧、新政権樹立 （ビジムング大統領、カガメ副大統領就任）
2000 年 3 月	ビジムング大統領辞任
2000 年 4 月	カガメ副大統領が大統領に就任
2003 年 8 月	複数候補者による初の大統領選挙でカガメ大統領当選
2003 年 9-10 月	上院・下院議員選挙（与党 RPF の勝利）
2008 年 9 月	下院議員選挙（与党 RPF の勝利）
2010 年 8 月	カガメ大統領再選

政治体制・内政

1.政体

共和制

2.元首

ポール・カガメ大統領

3.議会

上院（26 議席）、下院（80 議席）

4.政府

（1）首相　ピエール・ダミアン・ハバムレミ

（2）外相　ルイーズ・ムシキワボ

5.内政

1962 年の独立以前より、フツ族（全人口の 85%）とツチ族（同 14%）の抗争が繰り返されていたが、独立後多数派のフツ族が政権を掌握し、少数派のツチ族を迫害する事件が度々発生していた。1990 年に独立前後からウガンダに避難していたツチ族が主体のルワンダ愛国戦線がルワンダに武力侵攻し、フツ族政権との間で内戦が勃発した。1993 年 8 月にアルーシャ和平合意が成立し、右合意を受け、国連は停戦監視を任務とする「国連ルワンダ支援団（UNAMIR）」を派遣したが、1994 年 4 月のハビヤリマナ大統領暗殺を契機に、フツ族過激派によるツチ族及びフツ族穏健派の大虐殺が始まり、同年 6 月までの 3 ヶ月間に犠牲者は 80～100 万人に達した。

1994 年 7 月、ルワンダ愛国戦線がフツ族過激派を武力で打倒すると、ビジムング大統領（フツ族）、カガメ副大統領による新政権が成立。同政権は大虐殺の爪痕を乗り越えようと、出身部族を示す身分証明書の廃止（1994 年）、遺産相続制度改革（女性の遺産相続を許可）（1999 年）、国民和解委員会及び国民事件委員会の設置（1999 年）等、国民融和・和解のための努力を行っている。

1999 年 3 月には、1994 年の虐殺以降初めての選挙となる地区レベル選挙（市町村レベルより下位）を実施、2001 年 3 月には市町村レベル選挙を実施、2003 年 8 月には大統領選挙が実施されカガメ大統領が当選。政治の民主化が進展している。同年 9、10 月の上院・下院議員選挙及び 2008 年 9 月の下院議員選挙では与党 RPF が勝利した。

カガメ大統領は汚職対策に力を入れており、他のアフリカ諸国に比して、汚職の少なさ、治安の良さは特筆される。

外交・国防

1.外交基本方針

従来非同盟中立主義が基本路線。冷戦時代は東西両陣営と友好関係を維持、現在は、経済開発のため先進諸国との協力に重点を置く。東アフリカ共同体（EAC）及び東南部アフリカ共同市場（COMESA）メンバー。コモンウェルス加盟（2009 年 11 月）。

2.軍事力

（1）予算　7,600 万ドル（2009 年）

（2）兵役　志願制

（3）兵力　3 万 3,000 人（2009 年）

経済

1.主要産業

農業（コーヒー、茶等）

2.GDP

56.3 億ドル（2010 年）

3.一人当たり GNI

520 ドル（2010 年）

4.経済成長率

7.5%（2010 年）

5.物価上昇率

2.1%（2010 年）

6.総貿易額

（1）輸出　193 百万ドル（2009 年）

（2）輸入　961 百万ドル（2009 年）

7.主要貿易品目

（1）輸出　コーヒー、茶、錫

（2）輸入　資本材、半加工品、エネルギー財、消費財

8.主要貿易相手国

（1）輸出　ケニア、コンゴ民主共和国、タイ、中国（2009 年）

（2）輸入　ケニア、ウガンダ、中国、アラブ首長国連邦

9.通貨

ルワンダ・フラン

10.為替レート

1 ドル＝598 ルワンダ・フラン

11.経済概況

（1）農林漁業が GDP の 40%以上、労働人口の 90%を占め、多くの農民が小規模農地を所有。主要作物はコーヒー及び茶（輸出収入の 60%）であり、高品質化により国際競争力を強化する政策をとっている。一方で、内陸国のために輸送費が高いという問題も抱える。

（2）1980 年代は、構造調整計画を実施し経済の再建に努めたが、内戦勃発以降はマイナス成長、特に 1994 年の大虐殺で更に壊滅的打撃を受けた。その後、農業生産の堅実な回復（1998 年には内戦前の水準を回復）、ドナー国からの援助、健全な経済政策により 1999 年までに GDP は内戦前の水準に回復した。

（3）ルワンダ政府は、1996 年に「公共投資計画」を、2000 年に 20 年後の経済達成目標を定める「VISION2020」を、2002 年には「貧困削減戦略文書完全版（F-PRSP）」を、また、2007 年には、第 2 次世代 PRSP となる経済開発貧困削減戦略（EDPRS）を策定し、これら戦略等を基軸とした経済政策を実施している。2000 年 12 月には、拡大 HIPC イニシアティブの決定時点に達し、2005 年 4 月に完了時点に到達している。

（4）カガメ大統領は、汚職対策にも力を入れており、グッドガバナンスの模範国として世銀等からの評価も高い。

経済協力

＜二国間援助の本格再開＞

1.日本の援助実績

（1）有償資金協力（2009 年度まで、EN ベース）　46.49 億円

（2）無償資金協力（2009 年度まで、EN ベース）　342.45 億円

（3）技術協力実績（2009 年度まで、JICA ベース）　58.44 億円

2.主要援助国（2008 年）

（1）米　（2）英　（3）ベルギー　（4）オランダ　（5）スペイン

二国間関係

＜極めて親日的＞

1.政治関係

（1）日本は、ルワンダが独立した 1962 年 7 月に国家承認。2009 年末まで在ケニア日本大使館がルワンダを兼轄していたが、2010 年 1 月に在ルワンダ日本大使館開館。ルワンダは 1979 年 5 月に在京大使館を開設。2000 年 9 月に閉鎖したが、2005 年 1 月に再開。

（2）1994 年 4～6 月のルワンダ大虐殺により国外に避難したルワンダ難民を救援するため、日本は、同年 9～12 月の間、国際平和協力法に基づき、ザイール共和国（当時、現コンゴ民主共和国）のゴマ 等に約 400 名の難民救援隊・空輸隊等を派遣した。

2.経済関係（対日貿易）

（1）貿易額

輸出　4,700 万円（2010 年）

輸入　5.8 億円（2010 年）

（2）主要品目

輸出　コーヒー、バッグ類

輸入　自動車、二輪、機械

3.文化関係

国営テレビ局に対し番組ソフトを供与。

4.在留邦人数

40 人（2009 年 10 月現在）

5.在日当該国人数

21 人（2009 年）

【第 1 章】
第 6 回本会議事業概要

活動概要……16
活動日程……17

第 6 回本会議　概要

【活動期間】
2011 年 8 月 5 日（金）～2011 年 8 月 23 日（火）

【開催場所】
ルワンダ共和国（キガリ、ブタレ、ギコンゴロ、ニャンザ、カバロンドなど）

【活動目的】
1. 学生が主体となった、市民レベルでの友好交流により二国間関係を強化する。
2. 学生会議や見学・フィールドワークを通じ、両国学生がお互いの国の歴史や社会的・政治的・経済的状況を知り、両国について多面的な理解を促進させる。
3. お互いの国の社会問題に対して理解を深め共に考えることで、主体的に行動できる人材を育むきっかけを作る。
4. 事業終了後の報告書・ドキュメンタリー映像の作成、報告会の開催を通して日本における市民レベルでのルワンダへの理解を促す。

【協力】
早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター（WAVOC）
ルワンダ国立大学（National University of Rwanda, NUR）
在ルワンダ日本大使館
在日本ルワンダ共和国大使館

第 6 回本会議　活動日程

実施日	実施内容	実施場所
8 月 5 日（土）	日本出発	成田空港
8 月 6 日（日）	ルワンダ到着	キガリ国際空港
8 月 7 日（月）	EXPO(ルワンダ国際貿易祭)見学 キガリ虐殺記念館見学	キガリ
8 月 8 日（火）	在ルワンダ日本大使館表敬訪問 ブタレへ移動	キガリ ブタレ
8 月 9 日（水）	学生会議	ルワンダ国立大学（ブタレ）
8 月 10 日（木）	ラジオサルース見学 ムランビ虐殺記念館見学	ブタレ ギコンゴロ
8 月 11 日（金）	学生会議 キングスパレス見学	ルワンダ国立大学（ブタレ） ニャンザ
8 月 12 日（土）	学生会議	ルワンダ国立大学（ブタレ）
8 月 13 日（日）	コンサートリハーサル コンサート（※停電のため中止）	ルワンダ国立大学（ブタレ）
8 月 14 日（月）	キガリへ移動 キガリ散策	キガリ
8 月 15 日（火）	キヨンベ村訪問	キヨンベ
8 月 16 日（水）	ブタレへ移動	ブタレ
8 月 17 日（木）	学生会議	ルワンダ国立大学（ブタレ）
8 月 18 日（金）	学生会議	ルワンダ国立大学（ブタレ）
8 月 19 日（土）	学生会議 インダンガムチョ主催パーティ	ルワンダ国立大学（ブタレ）
8 月 20 日（日）	キガリへ移動 イントワーレ小学校訪問	キガリ カバロンド
8 月 21 日（月）	廃棄物処理場見学 JICA 活動見学／結婚式訪問	ニャンザ
8 月 22 日（火）	ルワンダ出発	キガリ国際空港
8 月 23 日（水）	日本到着	成田空港

【第 2 章】
学生会議　活動報告

概要・議題……20
日本側からのプレゼンテーション
1. 文化交流……21
2. 歴史認識について考える……22
3. 東日本大震災……26
4. 原子力発電所……30
5. 日本の司法制度改革……32
6. 戦後和解……33
7. 平和の定義……35
ルワンダ側からのプレゼンテーション
1. 女性の権利……41
2. ルワンダでの農業の役割……42
3. VISION2020……43
4. ルワンダにおける地方分権……46
5. ルワンダにおけるテクノロジー……49
6. ルワンダの周辺諸国……51
7. ガチャチャ法廷……54
8. ジェノサイド教育……55
9. 日本の歴史……57

第 6 回本会議　学生会議概要

＜実施日時＞

8 月 9,11,17,18,19 日

＜活動内容＞

日本・ルワンダ両国の学生が、それぞれの専攻や興味、自国の社会問題についてなど、様々なトピックから自由にプレゼンテーションを行い、質疑応答、ディスカッションを行う。

＜活動目的＞

団体の活動理念である相互理解を念頭に、同じ学生という対等な立場から様々なトピックについて深く考え、互いの意見を尊重しつつディスカッションをすることで、互いの国について理解を深める。

＜成果＞

・互いの国に対するより深い理解。

・異なるバックグラウンドを持つ学生同士の、異なる価値観・考え方との出会い。

・団体の将来について、日本側・ルワンダ側双方の真剣な議論。

＜反省＞

・会議の開始時間の遅れ。

・大学のテスト期間であったため、学生会議に十分な人数が集まらないことがあった。

＜学生会議トピック＞

9 日

1. 文化交流（秦）
2. 女性の権利（Annet）
3. ルワンダの農業（Valence）
4. VISION2020（Allain）

11 日

1. 歴史認識について考える（海原・永井）

17 日

1. 地方分権（Eugine）
2. 東日本大震災（品川）
3. 原子力発電所（乾）
4. テクノロジー（Nadine）
5. 日本の法律（山崎）

18 日

1. 戦後和解（滝田）
2. ルワンダの周辺諸国（Gabriel）

19 日

1. 平和（久保・嶋田）
2. ガチャチャ裁判（Francis）
3. ジェノサイド教育（Ephrem）
4. 日本の歴史（Alfred）

日本側からのプレゼンテーション

文化交流

担当者：秦 七愛

1. 日時

8 月 9 日(火) 10:30～11:30

2. プレゼン要旨

ルワンダと日本。文化を通してお互いどのように交流できるのか。そもそも、私達はどうして文化交流をするのだろうか。文化交流の意義を考えることで、その必要性や、JRYC の活動の意義を感じられるのではと考えた。

3. プレゼン詳細

テーマを選んだ理由

私がルワンダに興味をもったのは音楽を通してだった。私は INDANGAMUCO のメンバーが踊ることで平和構築を成そうとしているという事にとても感銘を受けた。同時に、遠く離れたアフリカの地で育まれた音楽に私たちが触れていることに対して不思議に思い、今回「文化」について焦点を当てた。

プレゼンの展開

はじめに、私が「文化」について考えるきっかけとなったのは、ルワンダ学生の日本招致の際にみたルワンダンダンスであることを話した。そして、文化をお互いに対立しない、親和的なものだと定義づけた上で、ルワンダ人と日本人が文化（ここでは踊りを例としてあげた。）を通して、どのような文化交流が可能か話し合ってもらった。その後、日本とルワンダが異文化交流をする意義を考えてもらった。

ディスカッション

〇テーマ

日本とルワンダが文化交流する意義とは？

〇結論

ルワンダは１つの文化、１つの言語を持つ。しかし、日本は地域によって異なる文化を持つ。

異文化交流は、相手の文化への単純な好奇心だけでなく、文化を知ることでビジネスに繋がる。例えば、『ルワンダでは紫色のシャツを着る』ということはジェノサイドの追悼の意味がこもっている。もし、日本人がルワンダでシャツを売るとしたら、ピンクより紫色のシャツにしようということになる。

また、社会の発展にも繋がる。日本の技術も文化だとルワンダ学生は捉えているから、日本文化を学ぶことはその技術が生まれたプロセスや、技術を学ぶことだと考える。そして、相手の国のこと、文化をもっと良く知ることで互いに尊重しあえる。

4. 感想

ルワンダで中国人と間違えられることが多かった。外見でほとんど違いがわからない時、日本人と他の東洋人とのちがいは持っている文化ということになるのだろう。

ルワンダン達は男女問わず仲が良いと手をつなぐ、日本人は挨拶をするときお辞儀をする。ルワンダン学生と一緒に過ごす中で、そうした些細だけれど、お互いの文化に触れたとき、とても楽しかった。ルワンダン学生が日本語を覚え、日本語で話しかけてくれると、私たちに歩み寄ってくれているという嬉しさがあった。

ディスカッションを通して、日本人とルワンダ人の価値観の差を感じると同時に、文化交流の可能性を感じた。（秦）

文化交流することは、とても良くて興味深い。だから、日本人にとってもルワンダ人にとっても好ましい。お互いに団結し続けよう。この世界で私達はみんな友達で、もし私たちがこのプログラムを続けるならば、これからも一緒になって考えていこう。お互いに文化交流することで、私達はお互いにとても親しくなるよ。（Albert）

歴史認識について考える

担当者：永井陽右、海原早紀

1. 日時

日時：8 月 11 日(月)

2. プレゼン要旨

現在 2011 年、1994 年のジェノサイドから 17 年が経った。当時、子どもだった人々が子どもを持つ年齢になっている。単なる戦争とは違ったルワンダのジェノサイドをどのように後世に伝えていくのか。歴史認識、歴史継承という難しさを日本やカンボジアの例をとりながら、一緒に考えるきっかけを提案することを目的とした。

3. プレゼン詳細

プレゼンの展開

最初に、歴史認識の重要性を説明。歴史認識はメリットにもデメリットにもなりえる。その後、日本と中国の歴史認識のギャップを例にとり、具体化した。次にカンボジアのポルポト政権に関する認識を取り上げた。このように歴史認識は難しいことを踏まえた上で、最後は歴史継承について、「誰が、いつ、教えるのか」ということを一緒に考えるようにした。

質疑応答

コメント：ルワンダでも、リーダーが自分の都合の良いように歴史をつくってきた。そしてリーダーが交代すると、歴史は変えられた。

Q. なぜカンボジアと取り上げたか？

A. 日米間の戦争とは違って、国内で権力闘争

が起こった場合でも歴史が変えられてしまう例を示したかったから。

Q. 今日、日本とアメリカの関係は良好なのか？関係が良いならば、歴史をありのまま伝えればいいのでは？
A. 今は日本とアメリカの関係は基本的に良い。だから、どちらか一方に都合の良い様な歴史を教えることはほとんどない。

Q. 日米が戦後に関係改善をできたのはなぜなのか？
A. 対等な立場で貿易をして、経済関係を充実させたことがひとつの理由だろう。また、GHQ が日本にいた時代にも色々な技術を教えてくれたおかげで日本の発展に貢献したとも言える。
日本人は純粋にアメリカの文化も好きだ。

Q. 日米の関係は良好だと言っても、沖縄基地の問題は解決したのか？
A. 基地の問題は未解決なままだ。沖縄の人は基地の騒音、アメリカ兵士の犯罪、環境汚染問題などに苦しんでいる。

Q. なぜ基地を作って、アメリカに守ってもらわなければいけないのか？
A. 日本には自衛隊はあるが、軍隊がないのでアメリカ軍に安全保障の面で協力してもらっている。同時に、アメリカの太平洋での権力保持のために日本が重要な基地であることも確かだ。

Q. 日本の天皇について教えてください。
A. 現在、日本の天皇はあくまで象徴的な存在だ。実はこれにもアメリカが関わっていて、第二次世界大戦までは神として崇められていた天皇を人間であると宣言してしまったのだ。

ディスカッション

1a　ジェノサイドの時の自分の経験を、子供たちに話すか？
1b　話すタイミングはいつが最適か？

1a　に関しては、全員が一致して自分の体験を話すと言っていた。またルワンダ文化では辛い経験は皆でわかち合った方が良いと考えられているそうだ。

1b は、答えにバラつきがあった。以下、意見をリストする
・自分自身もジェノサイドをこの目でみたのは確かだが、その本当の意味を理解するには若すぎたので、後で親に教えてもらった。ちゃんと背景を理解できる年齢になってから教えることが大切だ。
・市場に出回っている本を読んでしまう前に、自分の言葉で伝えて、しっかり良いこと/悪いことを教えたい。
・私の叔父は、従姉弟が自分から質問をしてきたら教えてあげている。子どもの方から質問をしてくる時が来るから、その時に答えてあげればいい。
・人から人への伝承が繰り返されるほど、その内容は変わってしまう。私の子供には、自分が体験していないジェノサイドの話を無理して孫に伝えようとしないでほしい。孫にはちゃんとした書物を読んで欲しい。
・記録として本に残しておくのはいい方法だが、例えば日本ではたくさんの本があってどの情報が本当なのかわからなくなっている状

態だ。（日本人学生）
・口頭で伝わったものや、書物から正しい情報を判断するのは難しいが、歴史の現場をみて、自分で判断すればいい。（ジェノサイドの場合は遺体や遺品がまだ残っている）
・日本で文献を使ってルワンダについて勉強する前に、実際ルワンダに来て人々の話を聞いたほうが良かったと今後悔している。やっぱり経験した本人達から聞くと、違う。（日本人学生）
・ルワンダでは小学校でもジェノサイドについて教える。私は、学校で学ぶ前に親から話を聞いたほうがいいと思う。
・子供に教えることには、ジェノサイドの話だけでは足りない。ルワンダの長い歴史、世界史の中のルワンダを学んでほしい

2a 時が経てば、戦争/ジェノサイドを実際に経験した人は亡くなってしまう。これは問題だろうか？なぜ？
2b 歴史を後世に伝えるにはどのような方法があるか？ルワンダで効果的だと思われる方法を三つ提案せよ。

グループ１

2a　記録さえ残っていれば、当事者がいなくなってもしっかり歴史は伝えられる。
2b　ドキュメンタリー、本、学校、

グループ２

2a　当事者がいなくなることは、問題だ
2b　本、家族で語り継ぐこと、INGADO/INTORERO　（政府が主催する地域コミュニティベースのセミナーやワークショップのこと）

グループ３

2a　記録があれば歴史は伝わる。当事者から聞く話ほどのインパクトは残らないがしょうがない
2b　話して語り継ぐこと、新聞/ラジオなどのメディア、映画/ドキュメンタリー

４．感想

この学生会議は、特に何か結論を出したいと思って準備したものではない。時と共に「歴史」は変わっていくものであるということを明確にし、戦後６６年目の日本の現状を伝えることで、ジェノサイドを経験した世代のみんなこそがルワンダの「歴史」をつくっていくのだ、と伝えたかったのだ。

しかし、実際ディスカッションを始めてみると私からわざわざ伝えなくてもルワンダの友人たちはこのことを十分に自覚していることがすぐわかった。「自分の体験をどう伝えるか」という質問に対してあまりにすらすら答えるのでびっくりした。政府が ITORERO を開き、また互いに辛い経験をシェアするという文化がもともとあったせいか、私が想像していたよりもオープンにジェノサイドについて語れる社会になっているように感じた。

メンバーによって意見が食い違っているので気になった点を一つ指摘したい。学校教育や出版物に基づいた情報（政府のチェックが入っている情報）を是非子どもに提供したいというメンバーと、その様なものに触れるまえに自分の体験を直接語りたいというメンバーがいたことだ。また、別の学生会議で「教科書の内容を全て信じるか？」という質問をしたら答えが半々くらいに別れた。政府が認定する情報をそのまま鵜呑みにするかどうかは、ルワンダ人の間でわかれているようだ。

（海原）

歴史はそのままの形で伝えていかなければ

ならない、ということは当然のように思われているかもしれない。しかし、私は市民同士の殺し合いであったルワンダのジェノサイドを経験した世代の人々にとって、それは当然かどうか疑問だった。

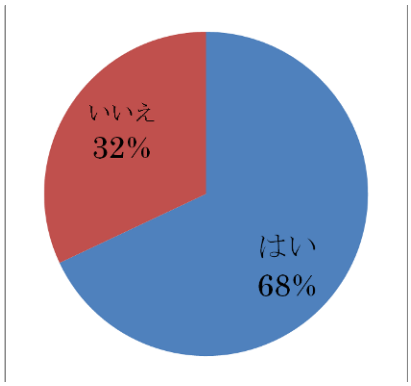
話し合ってみると、私は彼らのとにかく「(後世に)伝える」という意思の強さを感じた。彼らは過去にジェノサイドがあったから平和に暮らしているのかもしれない。過去に辛い出来事があったから、優しくできる。この気持ちを広めることこそ意味があるのだと感じた。(永井)

付録

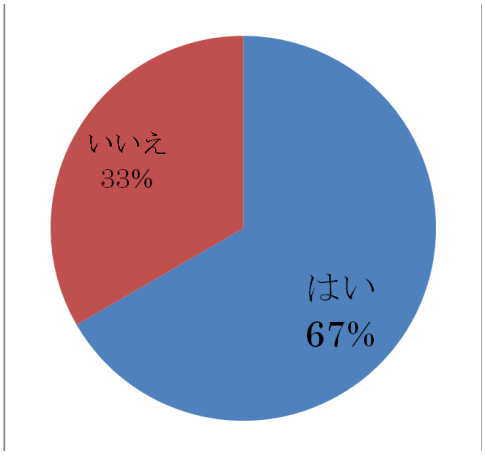
日本の若者が過去の戦争や歴史の伝承についてどう感じているかを調べるため、事前に早稲田大学でアンケートを実施した。学生会議のディスカッションの後で本アンケートの結果をルワンダ学生に見せた。

実施日：2011 年 7 月 14 日
場所：早稲田大学「国際開発援助-理論と実践-」授業内
回答者：大学生 141 人

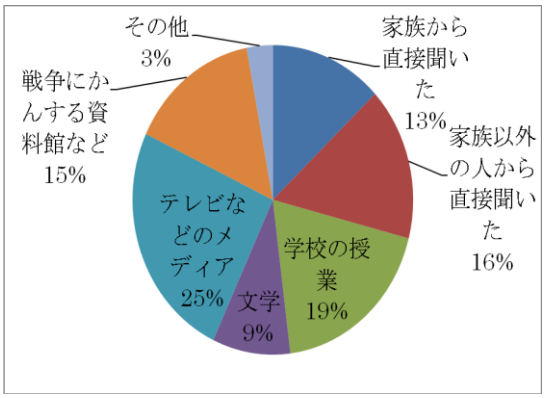
①家族から、その人の戦争体験について話してもらったことがありますか？



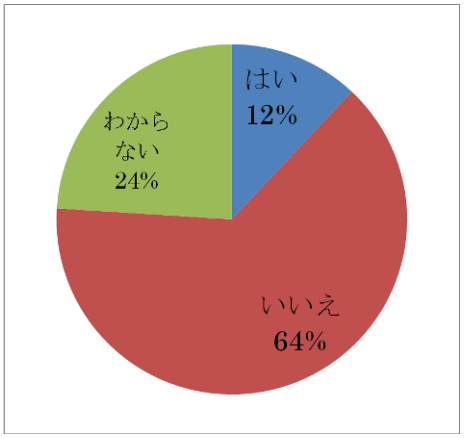
②家族以外の人から、戦争体験について話してもらったことがありますか？



③戦争について理解するのに一番有効だったものはどれですか？（選択方式）

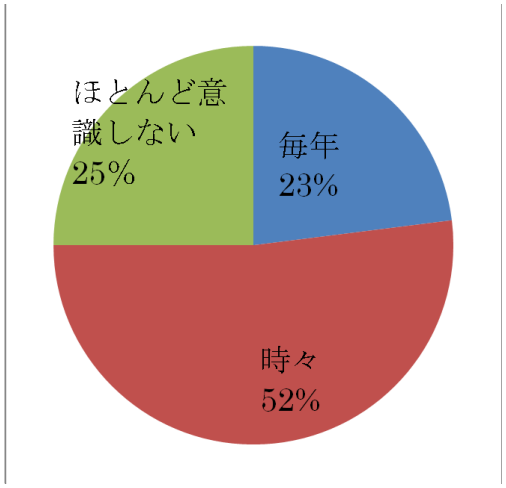


④戦争について、義務教育を受けていれば十分に理解できると思いますか？

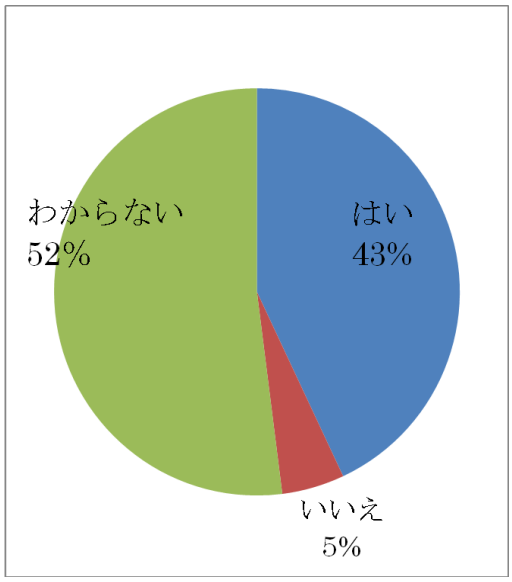


⑤戦争に関する記念日には、その出来事につ

いて考えますか？



⑥あなたは将来、自分の子供と戦争について話し合う機会を設けると思いますか？



東日本大震災

担当者：品川正之介

1. 日時

8 月 17 日（月）　12:00～13:00

2. プレゼン要旨

地震大国日本について、過去の歴史を振り返りつつ今回の大震災について説明した。

3. プレゼン詳細

テーマを選んだ理由

正直、初めは震災関係のプレゼンをするつもりはなかった。というのも、自分は震災ボランティアに行ったわけでもなく、今回の大震災についても熟知しているわけではなかったからだ。しかし最終的にこのテーマをやろうと決断するに至ったのは、この機会で、自分自身が、自国で起きた大震災についてよく知り、考えようと思ったからである。

プレゼンの展開

東日本大震災をプレゼンするにあたり、まず、関東大震災や阪神淡路大震災などの過去の大震災について写真などを用いて紹介しながら、「地震大国」日本について説明した。ニュース映像などの動画やタイムラインを使用することで震災当日の様子を伝え、その他に震災後の短期的、長期的な被害、今後日本が抱える問題（電力不足、経済問題、放射能汚染など）についても説明した。最後には日本から持参した震災の写真集をルワンダ人メンバーに渡して、見てもらった。

質疑応答

Q. プレゼン中に紹介された緊急地震速報以外に日本政府はどのような地震対策をしているのか。

A. 面白い例としては、私たちは小学校などで避難訓練と言って地震などの災害時に備えた訓練を行っている。子供たちは、訓練中は机の下に隠れる、防災頭巾を頭にかぶって頭を守るなどをデモンストレーションして訓練をする。他には地域ごとに緊急時の避難場所を指定されたりしている。あとは建物の強度などを規定したりしている。

Q. 東北地方はいつもこんなに大きい地震に悩まされているのか？沿岸部の方が地震は起きやすいのか。

A. 沿岸部だけじゃなく日本各地、内陸部でも地震は多く起こる。

Q. どうして東北のような地震が多い危険なところに住み続けられるのか。

A. 事実、今回の震災で被害を受けた人で東北を離れていく人もいる。しかし中にはこれから復興にむけて頑張っていこうと前向きに生きている人もいる。災害があっても、そこからまた立ち上がろうとするポジティブな考え方を持つ人がいるからではないか。

Q. NGO などの国際機関は来ているのか。

A. もちろん外国から多くの国際機関や NGO がきたし、外国からたくさんの支援を頂いた。

Q. なぜいまだ多くの人が避難所にとどまっているのか。

A. 震災で家を失った人の数は非常に多く、政府やその他支援団体がいっきにそれらの人々を支援することはできないからで、仮設住宅などの対策はすこしずつ進んでいる。

Q. 日本人自身はどんな支援活動をしているのか。

A. もちろん海外の機関だけじゃなくて日本人の支援機関はたくさんある。大学生でも夏休みなど長期休みを利用してボランティア活動をしたりする。

Q. ルワンダ人はどうやって東北の人々を支援することができるか。

A. もしルワンダ人メンバーが東北に来て、ダンスなどのエンターテインメントを披露するなどできたら良いと思う。また、日本に来ることができなくても、日本に対して、偏見を持たないでほしい。たとえば、日本の食材は放射能に汚染されているからよくないと思い込むなど。

Q. なぜ日本人はもう今は日本が安全な状態に戻りつつあると言えるのか。

A. もちろんいまだに東北はまだ厳しい状態にあるところも多い。しかしほかの地域、例えば東京は地震直後に停電や交通機関のマヒなど混乱が起きたけれども、今はそれらも復旧して、ほぼ震災前と同じような生活に戻ってきていると感じている人が多い。

Q.（上の質問に続いて）余震が続いているのでは？

A. もちろん余震はいまだにおこることはあるけど、震度が小さいし、津波が来るわけでもないので、被害はほとんどない。

Q. ほかの自然災害に対してどんな対策をとっているのか。

A. ほかの自然災害、台風や雪害などがあげられるけど、自然災害全般に言えるのは家の強度が高い点だと思う。あとは津波なら堤防の強化など個々に対策をとっている。

4. 感想

テーマを選んだ理由にも書いた通り、自分は被災地にボランティアに行ったわけでもないし、震災について熟知しているわけではなかったのに、いわば日本人を代表してルワンダ人に東日本大震災についてプレゼンするというのは責任重大であり、なかなかプレッシャーがのしかかるものであった。

正直に言うと、震災が起きた後、もちろん大変なことが起きてしまったという気持ちはあったし、そして相次ぐ余震で緊急地震速報が鳴るたびに恐ろしく感じた。多くの犠牲者が出てしまったことは非常に悲しく、残念である。被災して家族、親族を失った人たちのことを考えると、胸が痛くなる。しかし、時間がたつにつれ自分の住む周りの環境は平穏を取り戻してゆき、なんだか震災の実感というのが薄れつつあった。このプレゼンはそんな自分にとっても、震災について改めて考えるチャンスになったと思う。

プレゼンを終えた後、震災の写真集をよく見てくれたり、ルワンダ人メンバーから、「僕たちで東北の人たちのために何ができるか」と質問がでたり、実際に Takeaction の議論の中でルワンダでの社会貢献活動だけでなく、東北の人たちのために何か行動しよう、ダンスコンサートを開こうなどの案がでたりして、ルワンダ人に震災について以前よりも関心を持ってもらえ、うれしく思うし、自分自身についても、今後、日本ルワンダ学生会議としてか、自分個人としてかはわからないが、何か被災地のためになるような活動に取り組んで、もっと震災や被災地のことを知り、活動ができればと考えている。

コラム　とらぶルワンダ

旅にトラブルはつきもの。今思えば、災難の前兆は２つあったのだ。
一つはおみくじ。７月某日、東京にて関東・関西事前合同ミーティングを行った際、本会議の成功を願っておみくじをやった。
ど～れ、旅行運はと・・・「凶、十分に気を付けましょう。」
もう一つは、赤ワイン。ナイロビ空港を歩いているとパリーンという音ともに床一面が赤ワインに染まる。さらに、ルワンダのキガリ国際空港の入国審査をしているとパリーンと乗客の持っていた赤ワインが割れる。したたる血のように床を濡らす赤ワインは、何か悪い出来事の始まりを予感させた。

キガリ国際空港に到着し、日本人６名はスーツケースを待っていた。30 分経過。誰一人として自分のスーツケースを持っている者はいない。日本人のスーツケースは、全員分きれいさっぱりケニアのナイロビ空港に放置され、翌朝ルワンダに送られてくるのだとか。その晩、丸２日間洗っていない髪と身体、異臭を放つ衣服、蚊取り線香も蚊帳もない部屋。一生忘れない長いなが～い夜であった。（写真は蚊帳なしで寝た完全防備Ｓさんの写真）
日本ではいつ何時であれ、蛇口をひねればきれいな水が出る。ルワンダではそうはいかない。野外活動やダンスでたっぷり汗をかき宿に戻り、さあシャワーでも浴びるかと意気揚々と蛇口をひねる。静かな時が流れる・・・。これが、「断水」だ。シャワー・洗面・トイレなどあらゆる水回りの完全停止を意味する言葉だ。今年の渡航においては、運が良ければ水が出る、さらに強運を持ち合わせた選ばれし者のみが温水を与えられた。
渡航した８月のシーズン、ルワンダは乾季である。毎日ギラギラと照りつけるアフリカの太陽を誰もが想像していた。だが、渡航期間の三分の一は曇り時々大雨であった。森に散歩に行った日、大量に洗濯した日、タクシーで遠出をした日、そんな日に限って日本の台風並みの大雨が降ったのであった。

他のコラムにもあるように、今年は多種多様なトラブルを取りそろえた渡航であったと思う。読者の方やこれからルワンダに行こうとしている方のトラブルシューティングにしていただけたら幸いである。（嶋田）

原子力発電所

担当者：乾 敏恵

1. 日時

8 月 17 日(水)　13:00～14:00

2. プレゼン要旨

2011 年 3 月 11 日マグニチュード 9.0 という日本観測史上最大の地震が東北地方を中心に発生した。地震により、大津波、液状化現象、地盤沈下などが発生し、甚大な被害をもたらされた。それにより、福島第一原子力発電所での原子力事故が発生。その事故について紹介すると共に、ルワンダの電力不足について考える機会を与えた。

3. プレゼン詳細

テーマを選んだ理由

東日本大震災により原子力事故が発生した。その結果、原子力発電所の存在の意義が問われるようになった。核兵器もなければ、原子力発電所もないルワンダの国民がどのようにこの原子力事故を捉えているのかまた、この事故を伝えたいと思ったため。

プレゼンの展開

まず、火力発電と原子力発電の違いと、どのような構造で原子力により発電しているのかを示した。そして、震災当日、どのようなことが起き、現在、どのような問題が原子力発電所にあるのかを示した。さらに、ディスカッションテーマとして、ルワンダでの電力供給率向上のために、原子力発電所は必要か否か、またどのようにこの大震災後の日本を捉えているか、という 2 点を挙げた。

このディスカッションを通して、原子力発電所を保有していないルワンダ国民がどのように、日本でのこの原子力事故を捉えているのかを諮った。

質疑応答

Q. 原子力発電所からの廃棄物を地層に埋めることは本当に安全なのか。他の方法で処理したらどうか。地下水への汚染などはないのか。

A. 外に漏れ出さないように何重にも保護されている特殊なコンテナに廃棄物をいれて、深い穴を掘り、地層に埋めるので汚染などの心配はないと言われている。しかし、実際に安全であるかどうかは、政府の情報操作などがあるかもしれないので、分からない。私たちは、それを安全であると信じるしかない。

この質問者に対してのコメントしてくれた人がいたのでその内容について紹介したい。私は、廃棄物による汚染の心配はないと信じているが、その廃棄物が日本の地下深くに何千年、何万年と埋まり続けていくことに対して心配している。廃棄物が出ないよう、資源をリサイクルして使用できるようにならないかということを考えている。

ディスカッション

4 つのグループに分かれてディスカッションを行った。一部グループを除き、全グループ原子力発電所は必要ないという結果であった。

〇テーマ

①ルワンダにおいて原子力発電所は必要か

②大震災後の日本をどのようにみているか

①について

現在の電力不足を解決するには必要かもしれ

ないが、原子力発電所は必要ない。ルワンダには、バイオガス、メタンガス、太陽光、水力といった発電方法があり、それを発達させることで補える。また、原子力発電をルワンダに受け入れる能力はないし、コストもかかり、さらに科学者などの専門家も必要になるので、ルワンダに必要ない。

②について
日本は地震に対して備えが以前から知識や経験があり、地震に対する対応は良い方だと考える。さらに、世界各国政府やＮＧＯなどのサポートもあり、日本自身で復興の能力もあるので、日本は再建していくことが出来ると考える。

4. 感想

原子力に縁も所縁もないようなルワンダでルワンダ人がどのように考えるのか大変興味があった。いざ、プレゼンテーションを始めると、皆の顔は原子力発電に対して興味がありそうだった。そして、ディスカッションが始まると、私がいたグループでは、全員が原子力発電に反対であった。私は、皆が反対であることを聞いて少し安心した半面、驚いたことがあった。私、個人が感じたことであるが、原子力発電反対の理由が、どうやら「危険だから」というのでは、ないようであった。ルワンダでは人口の約 10 パーセントしか現在、電力を享受していない。また、電力不足であるので計画停電のようなものがよく起こる。それを解決するために原子力発電は必要であると主張してくると思いきや、メタンガス・バイオガス・水力・太陽光などさまざまな天然資源により発電できるから、ルワンダには必要ないという主張であった。このように原子力発電を反対されるとは考えていなかったので、非常に興味深いと感じるとともに、原子力発電のデメリットのひとつである放射能の問題について自身が説明出来ていなかったことを反省したい。次回、このような機会があれば改善していきたい。

私は、この東日本大震災を通して、安全だと信じてきた原子力発電の弱さやその危険性を目の当たりにした。私はもともと、原子力発電に対して賛成派ではない。しかし、反対派でもない。原子力発電がなければ、日本の電力をまかなうことは出来ないと考えていたし、日本からなくならないだろうと諦めもあった。しかし、大震災を契機に、日本の世論は原子力発電反対といった雰囲気に変わってきたと私は個人的に思っている。また震災後には、定期点検などで原子力発電は停止しており、さらに、今後も稼働停止が進むようである。原子力発電がなくてはならないと信じられていたが、今夏はなんとか、乗り切ることができた。もちろん、今夏を乗り越えることが出来たのも、各企業や家庭、学校などさまざまなところが節電対策を行ったためである。そのために、いろいろ不自由があったかもしれない。日本経済が少し衰退してしまったかもしれない。しかし、目先の利益ではなく、今後の私たちの将来、そして、私たちより下の世代のために、少しでも不安要素のある原子力発電を無くし、太陽光や風力を活かし、ルワンダのような自然エネルギーによる発電が、日本中に広まっていくことを期待したいと、このプレゼンテーションを通して、私が強く感じたことである。

注）原子力発電に対する見解は、日本ルワンダ学生会議の見解ではなく、私、個人の見解である。（乾）

日本の司法制度改革

担当者：山崎 暢子

1. 日時

8 月 17 日(水)17:00～18:00

2. プレゼン要旨

日本での三権分立における裁判所の役割を説明し、司法制度改革、とりわけ近年大きな動きがあった刑事司法に関する例を出して発表した。プレゼンを行った動機は、司法判断が下されたとしてもなお当事者にとって折り合いをつけることの難しい状況が生じる場合、国家や市民団体、個人などそれぞれの規模でどのような取り組みが可能かについて意見を求めたいと考えたことである。様々な「制度」が時代によって変化していくなかで、社会状況の変遷に伴い改正されうる法律も日常生活から決して縁遠いものではないという思いから、いまある制度の長所や短所を、ディスカッションを通して考えたいということも発表の動機であった。

3. プレゼン詳細

プレゼンの展開

司法権、立法権、行政権の三権の相互関係、裁判所の権限、日本の各裁判所の位置づけ、一般的な裁判の進め方を説明した。近年の司法制度改革を、裁判員制度の導入・実施と、犯罪被害者等の裁判参加を例に紹介した後、改革の背景にあった従来の制度の問題点を列挙。改変されたり新しく導入された制度の評価と課題についても紹介したあと、司法判断と当事者の要求とのギャップに関したディスカッションを行った。

ディスカッション

〇テーマ

裁判制度や裁判後の取り組みを改善する方法を考える

〇結論

回答 1：オンブズマン制度のようなものを設ける

回答 2：賠償制度を充実させる

回答 3：裁判記録の徹底と情報開示

回答 4：被害者を支援する市民団体の創設

4. 感想

正直にいって、プレゼンのメッセージを発表者が十分に伝えられなかったために議論が分散してしまったと感じている。ルワンダの現行法(例えば日本の刑法に当たる法など)の実情に関して踏み込んだ内容も引き出すことができなかった。さらにいえば、ジェノサイドに関連した事案を扱うガチャチャという特殊な裁判や、ルワンダ国際裁判所(ICTR)に対するルワンダ人学生の評価について発表者としては興味があったが、それらがディスカッション中に言及されることはなかった。一方、ディスカッション後、個別に経験談を話してくれた学生がいたことや、ルワンダの婚姻適齢が、(日本に比べると)高く設定されている理由、死刑制度(ルワンダは 2000 年代に死刑制度が廃止されている)への率直な意見をルワンダ人学生から聴けたことは、発表してよかったと思えたことである。

軍事裁判所をもつルワンダにおける刑事司法の位置づけのほか、2017 年の憲法改正の可能性など、今後の動きにも注目したい。

戦後和解

担当者：滝田 知子

1. 日時

8 月 18 日（月）10:00～11:00

2. プレゼン要旨

ジェノサイド後のルワンダが和解の問題を抱えているのと同様に戦後 60 年たつ日本もいまだ和解をめぐる問題を特にアジア諸国との間に抱えている。今回のプレゼンでは日中問題を取り上げた。

日本に現存する問題の一つとして、国民の被害者意識とこれを形成する歴史教育がある。日本人の太平洋戦争に関するイメージは、原爆や、アメリカに負けた戦争、というものが強く、アジア諸国を侵略したという考えはすぐには思いつかない。また、ドイツと比較して考えても、日本が歴史教育・近代史に割く時間は短く、内容も浅い。

日中間の戦後和解が成立していない一方で、捕虜処遇問題を抱えていた日英間の和解は成功例といえる。この和解は民間レベルから始まり、政府間での和解に繋がった。

これに対して日中間には南京大虐殺や教科書問題など問題が多く残されている。

3. プレゼン詳細

テーマを選んだ理由

終戦から 60 年以上たったにも関わらず、日本とアジア諸国との間の太平洋戦争をめぐる和解は成立したといえない。歴史教育が担う役割、国民の歴史認識という切り口から政府レベルの和解と並行して社会、民間レベルでの和解の重要性を考えたいと思ったため。

質疑応答

Q. 日本がアジアの国々に侵略した目的はなにか。

A. アメリカが日本に対する石油輸出を全面禁止した。日本では石油がほとんど確保できないため、戦争に必要な石油、天然資源確保のため侵略に出た。

さらに、日本は欧米列強の仲間入りを果たしたいという考えを持っていた。

Q. 日本とイギリスの和解のプロセスにおいて懲罰のようなものはあったか。

A. 日本の在イギリス大使館は躊躇したし、イギリスの新聞の批判はあった。

Q. 日本は戦争の罪を問われたか。いまだに元兵士は罪を問われるか。

A. 戦後直後に東京裁判が開かれ、戦争の首謀者とされた軍幹部、政府主導者が死刑になった。全ての兵士が罪に問われたわけではない。また、この裁判ではアジア侵略に関することは触れられていない。

A. 戦後の裁判で当時のリーダーは罪に問われた。だが、戦争だったから全ての兵士を裁くことはできない。だから日英和解の例に出た元戦闘兵の日本人は和解の際、裁判で罪に問われるようなことはなかった。

Q. 日本人が侵略、捕虜に関する歴史認識に欠けていると諸外国から言われることに対してどう感じるか。なにが基準・原因となっているのか。

A. 正確な調査が済んでいないこと、歴史教育に偏りがあることが問題だと思っている。

A. たくさんある。プレゼンでは触れられていないが、日本の首相が、太平洋戦争で戦死し

た軍人を祀る靖国問題を参拝したと知ったら中国人はどう感じるか。歴史教科書問題もある。

A. 台湾の例を付け加えたい。台湾は半世紀ほど日本の植民地化にあった。だが植民地支配の間に日本がインフラを整えたからか台湾人は日本人を嫌っていないようだ。

ディスカッション

○テーマ

① 戦争を経験したことがない世代はどのように次の世代に戦争のことを語り継ぐことが出来るか。

② 民間レベルの和解はどのように成立できるか。

○結論

グループ 1

① 何よりもまず、戦争を経験したことのない世代がクリティカルシンキングを持つことが重要である。歴史を教える前に、多くの情報を得て、加害者、被害者のバランスをとって客観的に、なぜこのようなことが起きたか、なぜ受け入れられないかを異なる互いの対場・角度から、クリティカルに歴史を捉え、分析するべきである。歴史図書館、本、ドキュメンタリーの果たす役割も大きい。

アフリカの多くの国は歴史を文字でなく口承するが、これは問題。

教科書は政府のみならず知識人が関わるので正しいが、主観的な意見も含まれている。本は出版された時点で正しいというお墨付きがある。

② 社会は個人の集まりであるから、自分が何をしたかを個々人が認識し、和解をしようと意識することが大事。

グループ 2

① 文献やメモリアルサイトで歴史を学ぶ。和解の方法として、サッカーワールドカップ日韓共同開催のようなスポーツ、文化交流、貿易のようなビジネス面、そしてルワンダの例ではガチャチャがある。

② 歴史を学べる材料を様々な形で未来に残す。次世代の人々はクリティカルマインドを持ち、何が過去に起きたかを学ぶ。

グループ 3

① 嘘を伝えるくらいなら何も言わないほうがマシである。教科書や文書、ドキュメンタリーで過去を学ぶ。歴史に対して興味関心を抱き、情報を自分の知性を用いて取捨選択する必要がある。

② 聖書では、謝罪と赦しの大切さを説き、punishing は本当の和解ではないとする。実際に顔を合わせ、謝罪をするまで話し合い、赦しをする。そして和解が成立した後も、協力関係を築くことが必要。例えば日本で 3 月に東日本大震災が起きた時に、中国や韓国は支援を行った。このような支援が互いの国の良いイメージを作り上げることに繋がる。

グループ 4

① 歴史に興味を持ち、まずは本を通して学ぶ。そして例えば広島の原爆資料館のような博物館を訪れ、詳細を学ぶ。そして教科書以外にも歴史を学ぶ方法が多くあることを次世代にも伝える。また、学校で戦争や平和に関して学ぶ時間が少ないので、教育を変える必要がある。

② 過ちを認め、赦しを乞えば、被害者も赦すだろう。

4. 感想

日本が抱える和解の問題とルワンダが抱える和解の問題は多少異なるが、いまだ解決を見ない日本と中国との間の問題のヒントが得られるのではないかという思いもあってこのプレゼンテーマを取り上げることにした。ディスカッションテーマは難しい問題ではあったが、私たちが現に直面している問題であり、かつ、ルワンダも今後直面する問題といえる。今私たちが交流しているルワンダ人学生はジェノサイドを経験した世代だが、例えば10年後にこの活動に参加しているであろうルワンダ人学生は、ジェノサイド経験世代では無いのだ。

ルワンダではキリスト教が広く信仰されていることもあり、赦し、という意見が多く聞かれた。そしてキリスト教の観点から意見を述べない日本人にもルワンダ人に共通して、歴史に対して興味を持ち、分析し、過ちを認めた上での被害者と加害者の対話が和解において重要という意見が聞かれたことが印象的であった。

一方で日本の和解問題を考えると、どの世代まで過去の世代の過ちの責任を取るのであろう、そしてその責任とはどのように果たすものなのだろう、という疑問が私につきまとうのであった。

平和の定義

担当者：嶋田康平、久保唯香

1. 日時

8月19日（金）13:00~14:30

2. プレゼン要旨

このプレゼンテーションは、2つのセクションに分かれている。

前半は、人口、平均寿命、軍事費といった客観的な指標から「平和」の定義を考えた。「平和」を実現するためには、「平和」とはどのような状態なのか、どのような性質なのかの定義づけが必要がある。それぞれの社会の問題を認識し、「平和」を定義し、「平和」を実現する具体的な手段を模索するのが最終的な目標である。

後半は事前に行った中学生へのアンケート結果と東日本大震災に関する意識調査を用いて社会環境と平和認識の相関性を説明したあと、ルワンダ・日本での平和認識の違いを話し合った。さらに、私たちはそれぞれに違う平和をどのように構築していけばよいか、考えた。

3. プレゼン詳細

【平和の定義】(嶋田)

●日本とルワンダの比較

まず、人口・平均寿命・軍事費・死刑制度・多様性・飢餓について数値を用いながら比較した。ここで言う多様性とは、自国民以外の数を指し、日本の外国人の数、ルワンダの難民の数を比較した。

●日本固有の現状

次に、日本社会が持つ特殊な問題を提示し

た。具体的には、年 3 万人を超える自殺者数、失業者やホームレス(それが見えない飢餓であると言及)、地震大国、平和憲法の四点について述べた。

●ルワンダ固有の現状

同様に、ルワンダ社会の特殊な現状についても提示した。具体的には、女性議員率の高さ、ジェノサイドからの市民の和解、ジェノサイド時性的暴行によって生まれた子どもたちの境遇の三点を挙げた。

【平和の認識】(久保)

後半のプレゼンテーションは、特に渡航以前からプレゼンターがもっていた問題意識から行った。

●問題意識

・日本における平和教育及びルワンダにおける平和教育（ジェノサイド教育）は①どのように進められ、②人々の感覚、認識、行動にどのように反映されているのか。

・日本、ルワンダ両国の学生が平和に対して持つ感覚、認識、行動に違いはあるのか。あるとすれば、それはどのような歴史的、社会的な原因（歴史的、社会的、教育の関する違いなど多面的な原因）によるものか。また、国際レベルで解決すべき問題に対してそのような相違をどう受け止めていくべきか。

・国際協力による教育はどうあるべきか。

このプレゼンテーションを行うにあたり、以下のような手段を用いた。

●手段

① ルワンダの社会的背景はもちろん、日本・ルワンダ両国の学校における平和教育の歴史、一般的家庭と地域の役割を文献によって把握しておく。

② 日本・ルワンダの初等・中等教育機関を訪問し、ワークショップから平和感覚に関する調査をする。

③ 学生にインタビューを行い、平和認識、行動に関する調査をする。

④ 教育機関でインタビューをする。

(以下、プレゼンの内容)

●中学生に対する調査

担当者が、2011 年 6 月 30 日、鎌倉市立大船中学校にて第 3 学年 121 名を対象にアンケート調査を行った。設問と回答結果は以下。

①「今日本は平和だと思いますか。それはどうしてですか。」

———はい 62%、いいえ 37%。

②「今世界は平和だと思いますか。それはどうしてですか。」

———はい 3%、いいえ 97%。

③「今あなたの社会は平和だと思いますか。それはどうしてですか。」

———はい 88%、いいえ 12%。

②の設問で、世界は平和でないと考えている生徒は 97%であるのに対し、①で日本は平和でないと考えている生徒は 37%だった。理由に、「地震」を上げている生徒は 80%と多数だった。自らの生活については「なにも心配いらないから自分の生活は平和である」という意見が 60%と多数だった。中学生にとって、周辺社会と世界の認識には距離があるようである。この距離感は「平和」「平和ではない」という単純な答えにもある程度反映されている。

●世論調査から…環境と平和認識

しかし、これだけでは周辺環境と平和認識

の関係にまで言及することはできない。そこで、都市部では東日本大震災に関する意識がどう変化したのか、世論調査から調べた。日経の調査によれば、4 月の時点で首都圏に住む人の約 60%の人が復興に時間がかかると考えているにも関わらず、同様に 60%の人が元通りの生活を営んでいると答えた。首都圏の人間は被災地とは別環境にあり、彼らはそれを自覚しているといえる。ただし、この環境の違いが平和認識にどれほど影響を与えるのかは調査からは読み取れなかった。しかし、少なからず、テレビなどを通してあふれんばかりの報道が行われる情報環境が、社会認識に強い影響を与えていると想像できる。被災直後は 78.9%の人がテレビから情報を得ているという統計がでている。当時と 7 カ月経った現在を比べると、その情報内容は確実に異なっている。

●異なる平和認識から「平和」へ

環境に影響されているのか否かは別として、日本の中でも平和認識に大きな差があることが明らかになった。それでは、アジアとアフリカ、日本とルワンダにはどのくらい意識に差があるだろうか。また、それは何によるものなのだろうか。

また、認識が異なる「平和」へ、私たちはどのようにアプローチしたらよいだろうか。

4. ディスカッション

①客観的な基準から、平和を定義せよ。

ルワンダ人学生では、社会の安全・安定が平和の基礎であるという声が多かった。健康という意味での平和もあった。健康・治安・インフラ等の物理的な平和と社会保障・心の平穏という意味での精神的な平和に分類する学生もいた。

対して日本人は、人権の尊重や人々が希望を持てる社会といった形で表せないような定義づけを行っていた。先ほどの分類でいえば、精神的・心理的な平和である。

定義づけを行った平和をどのように達成するかについては、ほとんど議論されることがなかった。

②各々の平和認識の違いは、何に基づいているのか。

平和には、3 つの要素がある。1)Inner factor (内的要因),2)Environmental factor(環境的要因), 3)Intestinal factor(意図的要因)。1)は暑い寒いなどの感覚や、好き嫌いなどの感情。これは個人ベースの平和感覚である。2)は環境によって変わる平和認識であり、文化からの影響も考えられる。3)は法律や教育、教師、両親、さらには政府や機関から与えられる考えや価値観。

平和認識はこういった要素が複合的にかみあってできあがっている。

5. アンケート回答

日本人・ルワンダ人のメンバーに対し、ワークシートを配布した。三つの問いに対して学生会議の内容踏まえながら回答してもらった。

①あなたの国は今平和だと思いますか。それはどうしてですか。

———はい 7 人(うち 5 人ルワンダ人)、
いいえ 8 人(3)、未回答 1 人(0)

・(はい)この国は貧困が存在しながらも、安全で、調和が保たれており、そして和解も進んでいる。ルワンダの経済も、上り調子である。(RWD, M, 22)

・(はい)私の周りの人々(家族、友達)は幸せに

生きているから。(JPN, F, 22)

・(いいえ)1)まだなかには人権が保障されていない人がいて、2)たくさんの人が貧困に苦しんでいるから。

②世界は今平和だと思いますか。それはどうしてですか。

———いいえ 16 人(8)

・(いいえ)安全が保たれていない状態で、世界は平和とは言えない。これは人類の課題だと思う。(RWD, 匿名)

・(いいえ)たくさんの人びとが夜も昼も殺されていて、たくさんの難民がいて、たくさんの人が災害や紛争で苦しんでいる。(RWD, M, 22)

③あなたの社会は今平和だと思いますか。それはどうしてですか。

———はい 9 人(4)、いいえ 6 人(5)、
未回答 1 人(0)

・(いいえ)私は人生で一度も安定を感じたことはない。(RWD, M, 25)

・(いいえ)私は、雇用問題や病気などのたくさんの困難のために、将来に不安を感じている。(RWD, M, 21)

6. 感想

時代・地域・年代・価値観を超えた絶対的な平和など存在しない。平和は、幸福や正義と並んで、非常に抽象的・多義的な言葉である。

一方で、平和という言葉が持つパワーは絶大だ。世界平和、平和構築、恒久的平和、ノーベル平和賞。平和と聞けば、反射的にポジティブな明るいイメージに引っ張られる。

平和な社会とは何か。核のない社会、戦争のない社会、飢餓のない社会。数えきれない平和がある中で、具体的・相対的な概念に限定する。それが、平和の定義づけである。定義されない平和は、吹けば飛ぶようなお飾りだ。実現などできない。平和とは定義して初めて、現実的な意味を持つ。

この学生会議では、主観に任せない客観的な、形に見える平和を模索してほしかった。平均寿命が何歳以上であるとか、失業率が何%以下であるとか。しかし、残念なことに、そこまで具体的な議論にいたらなかった。指標や視点を提示しすぎたため、議論が散漫になった。

目新しい発見はない、議論も思ったほど深まらない。自分の能力不足に起因するが、実にやりきれない気持ちだ。ただ、人間と人間の「相互理解」を深めるためのテーマとして最適だという確信を得られた。平和という超難関のテーマについて深い議論ができる関係が、「相互理解」の関係でもあるのだろう。(嶋田)

プレゼンテーションの中で、平和認識には社会環境が影響していると述べた。しかし、環境が異なれば平和感覚が全く異なるかと言えば、そうではないことも確かめられた。実際にどういう方法で実現するべきかは別として、雇用や安全保障、福祉に対する態度、平和認識は共通していた。

また、実際にアンケートを取ってみると、特に身近な社会の平和認識が概してルワンダ人と日本人では違うことが分かった。「あなたの社会は平和ですか」(Is your society at peace?) という質問に対する答え方は違いが明らかだった。日本人は、生活への満足度が高い一方で、差別や不幸に悩む少数派もいる

という状態。他方ルワンダ人は、生活の先が見えない不安との葛藤が多く垣間見られた。

さて、私たちはたとえ違う平和認識を持っていても、「平和」に向かって協力する必要がある。実際協力によっていくつもの問題が解決できるであろう。このとき、私たちはゴールである「平和」をどのように定義すればよいのだろうか。このプレゼンテーションの始めの問いに戻ることになる。いくらディスカッションを繰り返しても、これには正しい答えはない。むしろ、すべてが正しい結論である。私たちはこの多様な「平和」のあり様を知り、そして必要な場合に共通見解としての平和認識を持つべきなのかもしれない。（久保）

※※※はなちゃんの４コマケニアルワンダ語講座※※※

コラム　ルワンダの食べ物事情

ルワンダ人はとにかく良く食べる。たくさん食べると喜んでくれる習性がある。そんなわけで、大食いと早食いに関して自信がある僕は毎食大量に食べ、ルワンダ人の度肝を抜かしてきたわけである。
加えて、異国ではとにかく様々な物を食べようと決心していたので実際にいろいろ食べた。と、いうわけでルワンダの食べ物事情を書いていく。

基本的な食事については、細いお米と豆、穀物バナナ（イモ）、様々なイモ、フライドポテト、キャベツの煮たもの、ホウレンソウ（？）の煮たものなどで構成されていて、正直日本でも食べることができる。つまり、野菜が少なく炭水化物が多い。
ごちそうはプロシェット。ヤギの串焼きだ。実に美味である。あまり調味料などが多くないので、総じて大味であり、塩は必須。マヨネーズでビジネスできそうですよ☆

日本で食べないであろうと思われるものはウガリである。ウガリとは、コーンミールやキャッサバの粉を湯で練って作る団子のようなものであり、アフリカで常食されているものだ。味は…普通。ボリューム感がすごい健康食です。
お店などの飲み物は、コカコーラ社の独占。ファンタ、コーラ、スプライトなどソーダ系はすべてコカコーラ社。どれを選んでも多量の糖分摂取は避けられない。お酒（ビール）に関してはルワンダ製の PRIMUS が人気。他には、世界中で飲むことができ、最近アフリカのビール市場で支配的なシェアを確立しつつある Guinness も人気であった。

いつの日か、ルワンダでも寿司が食べられる日が来るかもしれませんね。（永井）

ルワンダ側からのプレゼンテーション

女性の権利

担当者：Munganyinka Annet
報告者：海原早紀

1. 日時

8 月 9 日（月） 13:00～14:00

2. プレゼン要旨

ルワンダ社会のなかで文化的、社会的な女性の地位について考える。

3. プレゼン詳細

プレゼンの展開

歴史的にルワンダでは女性は男性と同じ地位が与えられていなかった。例えば、教育の機会はなく、公の場で発言することも禁じられていた。

ルワンダ政府は「男性にできることで女性にできないことはない」という理念の下、女性の権利向上を図っている。

教育の面では従来男性に限られていた理系の教育を実施する女子校を作ったり、高等教育機関の女子を増やすために奨学金を交付したりしている。

また女性の自負心を育てるためにワークショップを開催したり、起業家を育てるトレーニングを提供したりしている。

ディスカッション

〇テーマ

日本とルワンダにおける女性の権利をどのように比較できるか。

グループ 1

・日本で今問題になっているのは、女性の仕事と家庭の両立だが、ルワンダでは親族や家政婦が面倒を見ることが可能で、特にこの点において問題はない。むしろ、教育と女性の自負心を育てることに焦点が置かれている。

・日本では少子化を改善するために仕事と家庭の両立を推進しているが、ルワンダでは今人口抑制をしようとしている。

グループ 2

・ルワンダでは女性議員をある一定数確保する法律があるが、日本にはこれといった取り組みがない。

グループ 3

・日本とルワンダで共通なのは、やはり大学に通う女子が男子に比べて少ないことだ。

・ルワンダのミスコンでは、容姿だけでなく知識なども問われるが、日本のミスコンでは容姿だけが評価対象だ。

グループ 4

・いくら平等といっても力仕事は男性の方が向いている。都市部ではオフィスワークがほとんどだから女性の社会進出が進んでいるが、郊外の問題に目を向ける必要がある。

・女性は母親になれるという特権があり、全員が社会進出して働きたいとうわけではないことも、念頭に置くべき。

4. 感想

ルワンダ国立大学の学生と喋っていれば、男女の不平等など感じることはほとんどない。しかし、ルワンダの女の子はディスカッションの場で大きな声で強く発言するのが少ないのはいつも感じていたことなので、「昔、女性は公の場で発言することが禁じられていた」

のを聞いて納得してしまった。

もう一つ気になるのは、ルワンダ学生がよく「maternal instinct」という言葉を口にすることだ。子育ては女性にしかできない、という意見を持っている人が多い。今回のプレゼンで「男性にできることで女性にできないことはない」という言葉が出てきたが、逆に「女性にできることで男性にできることはない」という命題にはきっとルワンダ学生は賛成してくれない、と思った。個人的に、男女が完全に平等になることはできないと感じるのだが、子育てが女性に限定される社会では女性の社会進出は難しいのではないかと思う。（海原）

ルワンダでの農業の役割

担当者：MUVARA VALEMCE

報告者：秦七愛

1. 日時

日時：8 月 9 日（月）　14:00～15:00

2. プレゼン要旨

ルワンダの地方に住む多くの人々にとって農業は最も利益のある活動だ。農業の発展は、ルワンダの成長にとって重要な中心的存在であると考えられる。また、この国の貧困をはっきりと減らしている。ルワンダの土地の特色、ルワンダにとっての農業の役割に焦点を当てた。

3. プレゼン詳細

プレゼンの展開

●ルワンダの農業事情

・ルワンダの土地は、耕地、湿地、森、水源をもたらす土地の 4 タイプに分かれる。耕地は国土の 46%にあたる、それゆえルワンダの産業は農業中心。森は 8%にあたり、主に自然保護地区に位置する。

・アフリカの中でルワンダは最も人口密度が高い国である。（300 人／k ㎡）ルワンダには雨季があり、土地の高度が高い、東には 1200 メートル級の山々が連なり、北西には平原と 3000 メートルの火山がだんだんとそびえたつ。

・ルワンダの輸出のほとんどは農作物である。農業は経済効果や、食べ物の確保、国民の栄養補給といった面からルワンダにとって重要で、国は食の安全性の確保や供給量をふやすための政策をはじめた。

・コーヒーや紅茶など、輸出によって得る経

済効果もあるが、ルワンダの人々が雇用を得る機会にも農業は繋がる。
・他の国と貿易してルワンダにはない違う作物と交換する。
・農業によって、産業に使うための原料の製造や、多くの作物が育つための肥料を得ることが出来る。
・ルワンダの農業では環境保護を助けるために造林している。
・農業を営むことでルワンダの土地は潤うことができる。
●農業が鍵を握る
・VISION2020 を達成させるためには農業が重要。農業は雇用促進・食物供給の面から貧困問題解決に繋がる。

質疑応答

Q. 莫大な資金の調達はどこからするのか？
A. 一生懸命働く。World Bank を通して海外から。
Q. ルワンダを盛り上げているビジネスは何か？
A. 国の発展のために、農業はもちろん、観光などの外国人に向けたサービス業など。

4. 感想

農業がルワンダの産業の中心であることが理解できた。農業は、今のルワンダにおいて、貧困や雇用問題を解決できる有効な手段だと思った。日本は発展し技術があっても、食料自給率はとても低いので農業の分野を見直していく必要があると感じた。（秦）

Vision 2020

発表者：MWISENEZA Allain
担当者：品川 正之介

1. 日時

8 月 8 日（月） 15:00～16:00

2. プレゼン要旨

2020 年までのルワンダの経済成長の指針である VISION2020 について。

3. プレゼン詳細

展開

●Vision2020 とは

Vision2020 は 1998 年に Urugwiro 村で行われた、国家の基本方針を決める協議の過程において成立された。Vision2020 は、ルワンダの経済発展、またそれにまつわるその他様々な分野の今後の目標を示すものである。2020 年までにルワンダの人口は 1600 万人になると予想され、現在の経済構造では国家運営は困難を極めるため、経済構造の展開が急務の課題であった。

●地方経済の構造転換

農業収入を増やし、また農業以外での収入を生み出すために、農業は近代化、資本化する必要がある。これは、今までの地方農業の伝統的な強みと、新しい技術の導入の両方を持ってなされるべきである。

●人材開発

ルワンダは優秀な人材を外から招いているが、自国での人材育成が必要である。すべての分野において、教育や訓練の機会の充実が必要である。また、病気や HIV/AIDS などの

拡大を防ぐ対策をとる必要がある。

●民間セクターの発展

経済成長には民間セクターの成長が欠かせず、政府は民間が事業起こしやすいようにリスクの軽減や法整備によって民間セクターの成長を促進させる。

●外国との経済連携

ルワンダは東西アフリカの共同市場であるCOMESAに加盟している。また東アフリカ共同体にも加盟しており、海外との経済連携を強めている。

●貧困削減

貧困削減は、他と切り離された課題ではなく、他の分野とも密接にかかわるものである。すべての分野の発展に貧困の削減は欠かせず、年齢、性別により生じる貧困問題の解決も課題である。

●5つの柱、3つの土台

Vision2020には、それを構成する5つの基本的な方針とそれら指針に横断的にかかわる4つの土台がある。

◆5つの柱

・良い政府、安定した国家
・人材開発と知識集約型経済
・インフラ整備
・民間セクターの成長
・生産性があり輸出志向型農業

◆4つの土台

・男女平等
・環境保護と持続可能な資源活用
・文化、科学、技術（ICT）の保護発展
・地域的・国際的経済統合

●Vision2020の最終目標

ルワンダの人口は2020年までには約1600万人程度に増加するとの予測があったが、国民生活を支えるためには、ルワンダ経済を発展させ、中所得国家になる必要がある。Vision2020はこのルワンダの中所得国家への引き上げを最終目標としている。

（一人当たり一年間900USD※ちなみにVision制定時は290USD、達成には一年あたり最低7％の経済成長が必要）

●結論

Vision2020はルワンダ政府によって示された、発展への良い道筋を私たちに示している。「痛み無くして得るものはない」ということわざがあるが、私たちはこのVision達成のために一人ひとり一生懸命働いていくべきである。

質疑応答

Q. このVision2020の後の政策はすでに何か示されているのか。

A. まだこのVision2020が達成していない状況なので、まだそういうものはない。

Q. このVisionは達成すると思うか。

A. するかしないかは置いておいて、私たちはこのVision達成に向けてただ努力するほかない。

ディスカッション

○テーマ

①Vision2020の達成を阻害する要因は何か。

②この Vision2020 を達成するために、日本から学べることは何か。
③似たような Vision は日本にもあるのか。

（ディスカッションの経過　グループ 2 より、議題②）
「貧困削減がやはり一番大事なテーマだと思うし、日本から見習えるところも多いと思う。」(Gabriel)
「貧困を改善するには何が良い策だと思う？」（久保）
「やはり Vision2020 を実行するしかないね。Vision2020 の個々の目標を達成するために、政府は農業、産業、教育などいくつもの面で政策を示しているし、昔は教育行けない人もいたけど今は改善している。学校に行って知識を得て、職を得られるようになっている。農業に関しては、農地をまとめて効率化したりして生産性を上げているよ。」
(Gabriel)
「政府からの貧困削減の方針が出て、成功しているのは分かるけど、なにか民間とか市民組織が貧困解決のファクターとして存在しないのか。日本には社会的企業といって、利益を求めつつも、社会問題を解決すること目標とするものがあるけれど。」（久保）
「それはどのように利益を得ているのか。」
(Gabriel)
「個々の企業によって違うけど、例えば BIGISSUE という社会的企業は、ホームレスの人に雑誌を販売してもらって、その利益をホームレスの人に分けつつも、その企業も雑誌の売り上げ、広告費や寄付などで運営されているよ。」（久保）
「社会的企業のほかに何か学べることはないだろうか。」(Gabriel)
「あと、CSR といって、企業が社会問題に取り組んだりして、社会的責任を果たしているよ。それは企業のイメージアップにもつながるしね。」（久保）
「政府は教育についてどうサポートしているのか。」(Gabriel)
「小学校中学校は義務教育になっていて学費は無料になっているけど、高校からは違う。公立や私立などによってかかる費用などは違う。」(久保)
「経済発展を阻害する自然災害にどうやって対策しているのか」(Alex)
「地震の例を挙げると、1995 年に大地震が起きて大変な被害がでたのだけど、それ以降 NPO や NGO が増えたり、地域ごとの組織や機関ができた。政府に頼りっぱなしだけでなく、市民や民間で動く体制が整っている。」

結論

①について（グループ 1）
Vision2020 達成を阻害する要因はたくさん存在している。これは Vision2020 でも述べられていることでもあるけど、資源や技術、インフラの不足、また地理的な要因による貿易コストなど様々だ。もし何か大きな自然災害が起きたりしたら、それに対応できる体制も万全ではない。そして、今は政府がリーダーシップをとって経済成長を進めているけれど、この政府のあと、良い政治が続いてゆくのかなど不安要因がある。

②について（グループ 2）
日本から見習う例として、まず産業化を進めたり、教育などの整備をしっかりすることが大切だ。社会的企業や、CSR などの考え方も参考になる。また、何か自然災害などが起

きた場合でも、政府に頼りきりではなくて、民間や市民同士の助け合いのシステムが構築されれば良い。

③について（グループ 3）

現在、震災復興の計画が議論されている最中であって、今後示されていくと思う。また、日本は政府が明確なヴィジョンを打ち出す前に、市民や民間は自発的に個々のヴィジョンを持って行動することが多い。

4. 感想

自分はこのプレゼンのディスカッションに③のグループとして参加したのだが、自国の経済成長の指針と言えば、昔小泉政権下の「骨太の方針」だとか「聖域なき構造改革」などの単語を耳にしたことがある程度で、現在日本はどんなヴィジョンをもって成長しようとしているのかなど全然知っていないのにかかわらず、一方ルワンダの学生たちは、自国で実施されている政策について良く知っているし、自分たちが Vision 達成のために動くんだという意識や主体性さえも感じさせられることがあった。

ディスカッションの終わりには、ヴィジョン達成後の 2020 年のキガリの予想図を映したムービーを見たが、正直あと 10 年程度で達成するのは難しいであろうものであった。今後の数年間で Vision の見直しや修正、また今後の Vision が出てくると思うが、それに対して注意深く見ていきたいと思っている。（品川）

地方分権

担当者：Eugine

報告者：久保唯香

1. 日時

8 月 17 日(火) 10:00~11:00

2. プレゼン要旨

地方分権によって、決定権は草の根レベルまで落とされ、より多くの人々が政治に参加できる社会、民主化を進めることができる。発展途上の社会で、この政策は非常に重要である。ルワンダはこの地方分権政策の成功例として東アフリカ地域のモデルとなっている。ルワンダの地方分権をより促進していくには。そして、ルワンダとの比較の中で、日本の地方分権とは。

3. プレゼン詳細

プレゼンの展開

地方分権は、権力を中央から地方行政に分散させ、一般人が行政の意思決定と発展に直接参加するための政策である。ルワンダにおける都市社会の成長に合わせて進められている。

Common Wealth Local Government Forum (CLGF)は、地方分権政策のゴールを、地域住民によるリーダー選出と意思決定参加としており、ルワンダの包括的地方分権プログラムを見習うべきと説いている。

人口爆発や都市化といったルワンダの経験は東アフリカに共通するものがある。2000 年以降の地方分権政策は、まさに東アフリカ地域における地方分権政策の筋道となっている。

しかし一方で、第 2 タームを迎えたルワンダの地方分権政策は転換期に突入しており、

中央集権の色を見せている。

【追加情報】
ルワンダ政府は2000年VISION2020制定当初からミレニアム開発目標の達成のためにも地方分権の重要性を強調していた。そこでRDSF(The Rwanda Decentralization Strategy Framework)を設定した。RDSFは5年間の計画政策で、2006年に幕を下ろしている。地方分権が進んだ結果、地方議員は女性議員が30%上昇するなど(Elizabeth Powley 2008, *Engendering Rwanda's Decentralization: Supporting Women Candidates for Local Office*)の成果が見られた。

しかし、2006年以降の正確な変化について調査報告は少なく、中央集権化に向かっていると断言する根拠はないが、2010年の大統領選挙以降のカガメ大統領の政策に注目である。

ディスカッション

○テーマ

同じような制度や政策が日本にもあるか。

○結論

日本も地方分権を進めている。しかし日本の状況はルワンダとは違うという印象を受けた。私たちは地域住民の政治参加はもちろんだが、権力の分散や財政立て直しのために地方分権化を行っている。都市化はすでに十分と言っていいほど発展してしまっており、地方分権政策はその影響も大いに関係している。同じ地方分権でも少し異質であることがわかる。

また、日本と他のアジアの国々は多少歴史や国家性も異なるので、他が日本から、日本が他から学ぶことはできてもそのままそっくり政策を模倣することはない。島国を多く含むアジアの特徴かもしれない。

4. 感想

日本における地方分権は、1990年代に始まったとはいえ現在も継続中の課題である。ルワンダの地方分権が5年計画であり、そうであっても一定の成果がでていることを感がると、ルワンダの急成長と政策推進力に驚かされる。

今春日本で起こった東日本大震災の大きな波紋も、権力がうまく分散しておらず、情報の錯綜があったことが少なからず影響している。ルワンダでの人口増加や国際社会への参入の過程で、今後は特に、可視的な事実と情報や事件・事故・災害への迅速な対応が求められるであろう。「東アフリカのモデル」、ルワンダの地方分権がいかに進められてきたか、分かるときである。(久保)

コラム　Battle バルトス！！

ルワンダ国立大学があるブタレでは、毎年バルトスホテルという立派なホテルの裏にある安い部屋に泊まっています。

今年もルワンダメンバーがその部屋を予約してくれていました。しかし到着してみるとレセプションのお姉さんが私たちの予約を無視して、別の客をその部屋に入れていたことが発覚！しかもこのお姉さん感じが悪い。都合の悪い時だけ英語がわからないふりをするので、私は予約を入れた本人であるユジーンを呼び出しました。「よし、Negotiation 次第だね。話してみる。」しかしユジーンの言う Negotiation とは、ひたすら高速ルワンダ語で怒鳴り合うことでした！裏から支配人のおじさんが出てきて「表のホテルの高い部屋なら空いてるから」としきりに勧めます。しかしユジーンは私に説明してくれます。「彼らは君たちを高いホテルに泊まらせて稼ぎたいんだ。ビジネスをしようとしている。」そんなのビジネスじゃないよー！と呆れてしまいましたが、二時間以上ユジーンが怒鳴り続けてくれて、その日だけ高いホテルの部屋に少々の割引で泊まり、それ以降は裏の部屋を空けてくれると約束してくれました。

案内されたホテルの部屋にびっくり！バスタブ・テレビ付きのリッチなお部屋！ルワンダでこんな贅沢ができるとは。。。

次の日、夕方になって裏の部屋の鍵をレセプションに取りに行くと、受付のお姉さんに「ホテルの部屋に残ればいいじゃなーい」と告げられました。

そろそろイライラしてきた私はユジーンに一報。これまた支配人を呼び出して再び‘Negotiation’（＝ケンカ）が始まります。

今度は私も参戦します。「日本だったら、ホテルの部屋を裏の部屋と同じ値段で泊めてくれる！」

ユジーンも強気です。「この人たちは被害者だ。訴えるぞ！」

これまた一時間くらい頑張った結果、私が言ったように裏の部屋の値段で、ホテルのリッチな部屋に泊めてくれることになりました。ラッキー☆笑

（海原）

‘Negotiation’に勝ち誇ったユジーンと私。

テクノロジー

担当者：KANEZA Alice Nadine

報告者：滝田 知子

1. 日時

8 月 17 日（水） 16:00～17:00

2. プレゼン要旨

ルワンダのテクノロジーは向上しつつあり、メディア、教育などさまざまな方面に良い影響を与えている。ルワンダの現在のテクノロジーとその展望について。

3. プレゼン詳細

プレゼンの展開

①背景

ルワンダは内陸国で、90%の人々は農業で生計を立てているが土地は限られている。
技術としての電話は軍といくつかの事務所にのみ設置されている状況だった。しかし近年、技術発達において変化が見られ、生活用品の流通や生活レベルが向上している。

② テクノロジーとコミュニケーション

現在では 65%以上の国民が携帯電話を使用している。また、1-Tele Center が各ディストリクトに設けられていて、IT 学習、インターネットアクセスポイント、プロジェクトの進行の場として人々に利用されている。

③ テクノロジーとメディア

ルワンダには、国営ラジオ局 Radio Rwanda と、37 の民間ラジオ局がある。
オンラインメディアの他、月刊・週刊・日刊の活字メディアも利用されている。

④ テクノロジーと教育

One laptop per child は primary school の全生徒にラップトップコンピューターを支給するという政府の政策である。
また、secondary school には Computer α internet room という教室が設けられている。

⑤ テクノロジーとグッドガバナンス

Informatic identity card は 16 歳以上の全てのルワンダ人が所持する身分証明書である。土地問題の解決のため、土地所有の証明書も配布される。技術を生かし地図を作り、証明書を土地所有者に与える。

⑥ テクノロジーと土地利用管理

耕地整理や土地所有証明書が与えられる。

⑦ テクノロジーと農業

・農業研究施設の遺伝子組み換え生物の使用。
・すべてのセクターに農業技術者、専門家が派遣され、民間レベルでの農業技術の向上に努めている。
・市場アクセス向上と価格統制。
・生産性、マーケティング調査をして、1 つのディストリクトで 1 つの作物を耕作する、one crop for one region という政府主導の政策がある。また、食品技術が向上し、加工・貯蔵・.流通の面で成果を見せている。

⑧ 結論

ルワンダではコンピューター、通信等の面で技術が発達してきた。今後の科学技術の発展と貧困の根絶のために長期的な政策が必要となる。

質疑応答

Q. Tele-center では人々は無料で IT を学べる

か。
A. 公共のテレセンターなので無料。

Q. one laptop per child 政策はどれくらいルワンダ国内に広がっているか。
A. 政府は全ての学校に適用させようとしているところ。現段階では半数以上の学校に広がっており、primary school の 4 年生以上が対象。使用・配布されるラップトップは小さくて緑色の安価なもの。

Q. Informatic identity card がどのようにルワンダの技術に役立つのか。
A. ATM のカードのようなもので、名前・写真・本人コードが記載されている。カードをコンピューターに差し込むと、コンピューター上に identify card の持ち主の情報が表示されるようになっている。政府が永久にその個人の情報を把握するためのもの。

ディスカッション
〇テーマ
どうすればルワンダのテクノロジーを発展させられるか。

（ディスカッションの過程抜粋）
「例えば、戦後の日本の経済はとても疲弊していたけれど、そのあと朝鮮半島で戦争が起きたことによって特需景気を迎えたことが日本の復興の転換点だったと思う。その後 1960 年代の総理大臣が、所得倍増計画という政策を推し進めた。」（滝田）
「所得倍増はどのように進められたのか。勤勉に働いただけ？」（Papa）
「この背景には安価な労働力の動員や技術革新、農業従事者が工業の分野で働くようになったり、輸出に力を入れたりしたことがあったと思う。例えば車の輸出とか。」（滝田）
「それ以前に車は日本で作られていたのか？アメリカやヨーロッパの大学で技術を学んで日本で開発したのか？」（Papa）
「ルワンダのディアスポラのようだね。」（滝田）
「日本の経済を支えているものはなんだっけ？」（Gabriel）
「工業品、例えば TV のような電化製品や車だね。」（乾）
「そうか。でもルワンダでは人口の 9 割が農業に従事しているし、経済を支えているのも農業だ。」（Gabriel）
「日本もかつてはそうだった。農業の効率化のために機械化をし、人手を工業従事者に回した。」（滝田）
「ルワンダでは識字率が低くて、その点でまだ問題が残っている。」（Gabriel）
「農業効率化のためにも教育が必要だね。」（滝田）
「さまざまなファクターを向上させないといけない。」（Gabriel）

〇結論
グループ 1
・ルワンダにある技術や知識を十分に生かすことが大切。ルワンダならでは、の強みがあると良い。
・日本が発展したときに外資系企業が増えた。そこで日本がうまく技術を吸収したのでその姿勢を学ぶことができる。

4. 感想

ルワンダ＝近年 IT に力を入れているという認識はあったが、この学生会議のテーマを

通し、政府の具体的な取り組みを知ることが出来た。私が興味深く感じたのは、One laptop per child である。この政策が実際にどれほど普及しているかは定かではないが、primary の 4 年生から 6 年生に laptop を配給するというのは IT 立国を目指すルワンダならではの政策だと感じた。一方ディスカッションではルワンダのテクノロジーの発展に関するアドバイスを求められた。私は主に日本の戦後復興をモデルケースに考えていたが、生活水準が大きく異なる日本の例を簡単には受け入れてもらえなかった。識字率等の教育面、電力供給面（現在ルワンダでは人口の 6%にしか電力が供給されていない）で問題を抱えているルワンダではまずそのようなインフラ整備がテクノロジー発展の第一歩となると思った。

（滝田）

ルワンダの周辺諸国

担当者：HABIMANA Gabriel

報告者：永井 陽右

1. 日時

8 月 17 日（水） 11:00～12:00

2. プレゼン要旨

内陸国であるルワンダは周辺諸国との関係を大切にしている。周辺諸国とは経済的、政治的、社会的、教育的に関係を持ち、盛んに交流が進んでいる。現在ルワンダは他のアフリカ諸国はもちろん、ヨーロッパやアジア諸国とも関係を作り上げている。ルワンダの他国との関係は日に日に大きくなっている。

3. プレゼン詳細

質疑応答

Q. ルワンダの製品よりも中国の製品のほうが安いと思う。みんな中国の製品を買ってしまい、自分達のものが売れなくなるのでは？

A. 私たちも負けずに良いものを作らなければならない

Q. どうやってテロリストから防御する？

A. 国際警察など、東アフリカ組合などにまかせる。

Q. 日本は災害によりマイナスイメージをみんなに持たれてしまった。何か改善策はないか？

A.災害対策をしっかりするべき。

ディスカッション

〇テーマ

他国との関係を悪化させる要因は何か。

〇結論

グループ１

「歴史的偏見が一つの要因といえる。日本と中国の例をとると、高校の時に授業で中国の野蛮な面を学んだ。だから私は中国が好きではなかった。しかし、大学に入ってみると、多くの中国人がおり、友達になってみるとみんな優しくそんなことはなかった。だから今は中国が大好きだ。」

「政治的問題。コンゴ民主共和国とルワンダの国境では争いがあるため、今も問題になっている」

「境界線がまだあやふやである。いくつかの島を巡って論争がある。」

「経済的要因は大きいと思う。先進国の経済にアフリカは組み込まれてしまっているが、貨幣価値が違いすぎるので対等とは思えない。」

「SARZ などの流行病も原因の一つ。人が来なくなるから」

「災害も要因だ。外人が日本を恐れてしまうかもしれない。」

「ステレオタイプの人は、アフリカというだけで一種の偏見を持ってしまう。」

「ルワンダと日本の間でもひとつ問題がある。それはルワンダには日本人が全然いないし日本にもルワンダ人はいないということだ。なぜ？」

→「たしかに多くはない。でも少しはいる。もっと交流するべき。私たちも情報を発信するべき！」

4. 感想

内陸地であるルワンダにとって周辺諸国の影響はとても大きい。お菓子などを見るとケニア製やウガンダ製が目立つ。私たちの住む日本も世界各国に支えられている。グローバリゼーションの中、人々だけでなく、国も寄り添っていかなければならないのだと改めて感じた。(永井)

コラム　タクシーパニック

８月 20 日。キブンゴを訪問した日のタクシーにまつわるトラブルのお話です。

私たちは毎年、安全上の理由から、知り合いのドライバー（ムニャカジさん）のタクシーに乗ることにしています。今回も、前日にムニャカジさんに電話。彼自身はその日別の用事があるらしく、友達のドライバーを紹介してもらいました。彼の名は、ギルバート。

12:00　昼食を買っていたスーパーから外に出ると、外に男性が一人待機しています。
「こんにちは。僕がタクシードライバーだよ。向かいの駐車場に車を持ってくるね。」

12:10　駐車場に一台の車が入ってくる。今日は二台お願いしたはずだった、と伝えると
「ここで待ってて！もう一台持ってくる。電話番号を交換しよう。」と言って彼は車を置いてどこかへ走っていく。

12:20　その番号から電話が入る
「スーパーの表の入口に移動してもらえないか。そこでピックアップしよう」

12:30　移動すると、そこへ車が二台やってくる。窓からはおじさんが笑顔で手をふっている。急いで乗車、いざ出発！

駐車場にとめた最初の車は、そのままでいいのかな・・？

12:40　出発してしばらく経ってから、あの番号から電話が入る
「今どこにいるんだ？？スーパーの入口で待っていたんじゃなかったのか？？？」

え？電話をかけてきたのがギルバートだから、今私たちを乗せているタクシーはギルバートじゃない？別のタクシーを適当に拾っちゃった？？

焦る私たち。案の定ガソリンを入れなくちゃいけないから、その分追加のお金を出せと言ってくる。ぼったくられたらたまらない！と必死に交渉。意外と安い値段で落ち着く。

たまたま物わかりの良い人だったから良かったけど。変な人だったら、どうなっていたことか。。。

14:15　何のトラブルもなく、キブンゴに到着。対談を終える。

17:00　キガリへ出発。途中でタイヤがパンクするアクシデントがあったものの、なんとか宿まで送り届けてくれた。(もう片方のタクシーは運転手が途中でどっかにいってしまうというハプニングが起きたそうで…)
「今日はありがとう！またタクシーが必要だったら、いつでも私を呼んでね！ムニャカジとは長い付き合いだからな！私の電話番号を教えておくよ！」

そして携帯のアドレス帳に追加してくれた彼の名前は「ギルバート」
なんだかおかしなことになっているのに、気づいてもらえましたか？
最初にスーパーで出会った人と、キブンゴまで乗せてくれた人、どっちがホンモノのギルバートだったのでしょうか。。。？？　私も最後までわかりませんでした！（海原）

ルワンダにおけるガチャチャ法廷

担当者：NSENGIYUMVA Francis

報告者：山崎暢子

1. 日時

8 月 19 日(金) 14:30～15:30

2. プレゼン要旨

「ガチャチャ法廷」とは何か、「ガチャチャ」の起源、目的、どのように機能しているのか、ガチャチャと和解、和解のための手段、ガチャチャの限界と課題、おわりに、という流れで発表があった。

3. プレゼン詳細

■ガチャチャの起源

ガチャチャとは伝統的に、村や家庭での問題(例えば窃盗や土地の利権など)を扱う非公式の問題解決方法を指すものであり、村の権力者が長を務め、コミュニティのすべての人が発言の機会を求めることができた。この伝統的なガチャチャは家族や隣人の前で和解を促進し、正義を実現するためのものだった。「インニャンガムガヨ」として知られる正直で高貴な年長者がガチャチャを取り仕切った。

■ガチャチャの目的

ジェノサイドに関連した問題を扱う、真実を告白する、審理の迅速化を図る、人々を和解させる、地域社会の可能性を示す、不処罰の文化を断つ、人々が自分たちで解決する。

■ガチャチャはどのように機能しているか

伝統を維持しながらも、村人によって選出された 9 人の誠実な代表者によって殺人などの人道に対する罪を犯した者を裁く。強姦罪は対象とされていない。村単位での裁判が諸問題を解決し、和解をもたらすことが期待される。公開裁判が行われ、ジェノサイドのサバイバーや被害者の家族と被告は向かい合う。被告は、自白をするか、無罪を主張する。

■ガチャチャと和解

被害者への謝罪や賠償をふくめ、真実を証言するガチャチャの体系的なプロセスのもとに被害者と加害者を一緒におくことは、紛争後の復讐の動機を取り除くか、もしくは復讐への動機に繋がりかねない。

■和解のためのいろいろな手段

・イトレロ（学習機関）
・インガンド
・ SCUR(Students Clubs for unity and reconciliation)
・自発性に基づくコミュニティの取り組み
・国会

■ガチャチャの限界

被告や証人が虚偽の証言をすることがある。依然として外国に逃亡する被告もいる。ジェノサイドを計画した者や組織した者、煽動者、指揮者などで国家レベルの指導者や地方自治体の長、軍隊、政党、宗派の指導者などにあった者は訴追の対象にならないこと。

質疑応答

Q. 地域毎に開かれるガチャチャ法廷において、裁判官の条件を満たす人の数に比べて被告の数が圧倒的に多い場合、どう対処するの

か。
A. ガチャチャは被告を裁くこと自体よりも、コミュニティの和解ということに重点をおいている。

4. 感想

2011 年中に終了予定のガチャチャに関してルワンダ国立大学の学生から発表してもらう貴重な機会であった。ジェノサイド関連の犯罪を扱う特別法廷としてルワンダ政府によって設置されたガチャチャの目的のなかには「裁判の迅速化」や「和解」が挙げられているが、それこそ短期間では解決しきれないであろう問題を含む「和解」というものが、裁判の実施によってどの程度達成されるのか疑問に感じられる私としては、現地の人の評価を実際に尋ねたかったのである。

コミュニティの再生、人々の和解という言葉が繰り返し述べられ強調されていたことから、現地の人にとってそれらはやはり差し迫った課題なのだと感じた。ガチャチャに関連して、プレゼンの際に出た意見ではないが、メモリアルを訪れたときにガイドをしてくれた男性が(虐殺当時は 19 歳。弟 1 人をのぞいた家族全員が 94 年の虐殺で殺害された)、ガチャチャでの被告の証言によって家族の最期の様子を知り得たと語ってくれたことは印象的であった。(山崎)

ジェノサイド教育

担当者 Ephrem
担当者：乾　敏恵

1. 日時

8 月 19 日（金）　15:30～16:00

2. プレゼン要旨

時間の関係上、途中で終了してしまったので、エフレムから直接書いてもらったプレゼンテーションのまとめや感想など抜粋しながら紹介したい。

なぜジェノサイドが起きたのか、という過程と原因などについて触れた後、どうすればルワンダが一層団結していくことが出来るのか、というポイントをいくつか紹介していた。そして、どのように学校でジェノサイドの教育が行われているのかを提示した。

3. プレゼン詳細

テーマを選んだ理由

以下の 3 点が理由としてあげられる。

1)　ジェノサイドがルワンダや他の世界の国で起こらないようにするため

2)特に日本の JRYC メンバー（日本ルワンダ学生会議）にルワンダの歴史をしってもらうため

3)ルワンダのヴィジョンの発展と再建におけるルワンダ人の尊厳をしめすため

プレゼンの展開

ツチ族に対するルワンダジェノサイドは国際連合（以下国連）の政策の失敗によって、長引き、多くの犠牲者が発生した。そのため、ジェノサイドは、ルワンダ愛国戦線（RPF）によって止められた。そして、被害者、加害

者が和解していくために、ルワンダ政府は、1999 年に国民の社会的関係を再構築することを目的とした、国家統一と和解（National Unity and Reconciliation）という組織を結成した。今までのその組織の成果を考慮すると、ジェノサイドのような現象は再び発生することはないように思う。しかし、コミュニティー間における論争（conflict）の発生は考えられるが、国家統一と和解によるような方法で解決していくことができるであろう。

NURC は、開かれた議論によって、社会構造を表しているような人々を選択する。その選ばれた人々は、ルワンダのコミュニティーレベルでの論争に対する専門的な知識を保有することが求められている。そして、その人々によって、その論争は分析される。その方法としては、論争を文書化により記録し、論争の構造を理解する。さらに、データを分析することによって、今後の論争が発生する可能性をパーセンテージで示す。そのため、このNURC のレポートなどは、実用性があるといえる。

（訳：乾敏恵）

ディスカッション

時間の関係上、プレゼンテーションの途中で終了してしまったため、行っていない。

4. 感想

私のほんの少しのプレゼンの後の日本、ルワンダ両国のプレゼン参加者の私への感謝の言葉や笑顔をみると、私のプレゼンは成功に終わったのではないかと思う。プレゼンでは、参加者にとって有益な情報を提供できたのではないだろうか。さらに、日本、ルワンダ両国のメンバーにとって、何か貢献出来たのではないだろうか。そのため、今後、私がプレゼンテーションを行う際には、今回の私のプレゼンへの想いを思い出してもらいたいと私は考える。

（Ephrem）

時間の関係上、エフレムのプレゼンテーションを最後まで聞くことが出来なかった。半分も聞くことが出来なかったかもしれない。エフレムは、ジェノサイドのサバイバーであり、このプレゼンテーションへの想いはきっと強かったに違いないだろう。この場を借りて詫びたい。もし、彼が、第 7 回会議で来日することがあれば、ぜひ、もう 1 度プレゼンテーションを行って欲しい。

先ほども述べた通り彼は、ジェノサイドのサバイバーである。彼のプレゼンテーション後には、会議のクロージングセレモニーが行われた。そのセレモニー終了後には、会議に参加したメンバーで写真を撮ったり、話をしたりする時間があった。その時に、彼は私にたまたま、話しかけてきてくれ、ジェノサイドの当時のことを話してくれた。当時、彼はまだ、幼かったようだが、ジェノサイドの当時の様子を覚えているようであった。彼は、母と共に必死に逃げ、生き延びた。しかし、彼の母は頭や足などを斧か鉈などの武器で切り付けられ、今でもその傷跡は残り、さらに障害も残っているという。そのため、現在でも彼の 2 人の姉が母親を手伝っているそうである。彼とジェノサイドのことについて話をしているうち、平和への強い思いを感じ取ることができた。

私が彼の話で 1 番驚いたのは、ジェノサイドの加害者に対して、リベンジしたいとは思っていない、また、未来をみていきたいと語

ってくれたことである。自分の母親がジェノサイドのせいで、障害を持ち、自分自身も心に深い傷を負っていたとしたら、加害者に対してそのようなことを言えるだろうか。私は、暴力は憎しみしか生まないと考えているので、実際にリベンジはしないだろうが、憎しみの心は持ってしまうかもしれない。私は彼が、リベンジしないということを聞いた時、彼の表情は加害者を許している（forgive）ようだった。その時、私は、マーティン・ルーサーキング・ジュニア牧師の”Love your enemy”という言葉を思い出した。やはりキリスト教の教えなのであろう。そのように考えると、ルワンダ社会で、キリスト教が果たす役割はかなり大きいといえるだろう。彼と話をしたことによって、相手を許す（forgive）ということについて考えさせられるものがあった。（乾）

日本の歴史

発表者：Alfred Ntaganda

担当者：品川 正之介

1. 日時

8 月 19 日（月） 16:00～16:20

2. プレゼン要旨

縄文時代から現代までの日本の歴史を、生活様式の変化や歴史上の人物・出来事を踏まえつつ紹介した。

3. テーマを選んだ理由

私が日本の歴史をプレゼンしようと思った理由は、なにより日本にとても興味を持っているからだった。私が去年の第 5 回本会議で日本に渡航した時、日本人メンバーがルワンダの歴史について人々の前で紹介している姿を見たのも刺激になった。

4. 感想

日本の歴史についてプレゼンした後、自分の話した内容が正しいものか、また長い歴史を持つ日本について十分な情報をプレゼン内で扱えたか少々不安だったが、またプレゼンできる機会があれば良いと思う。もし私が間違った情報を伝えていたら、日本人メンバーに訂正してほしいと思っていた。というのも、人々の中には他国の歴史のある一側面だけを強調して話す人がいる。たとえば、ルワンダを語るときはジェノサイドのことばかり話すなどがそうだ。ルワンダにはジェノサイドの後にも先にも美しい歴史があるというのに。日本の歴史をプレゼンするにあたっては、日本の良い面、問題・課題点の両方を述べるようにした。特に戦後、焼け野原からの日本の

復興・経済発展の歴史は、これから経済発展を進めていくルワンダ、また多くのアフリカ諸国にとって学ぶことは多い。(Alfred)

学生会議のトピックがすべて終了したあとに、すこし見てもらいたいものがあると言ってアルフレッドが最後にプレゼンしてくれたのがこの「日本の歴史」のプレゼンだった。

このプレゼンは非常に印象的であって、詳しくは私の全体感想でも触れているのだが、彼が JRYC での活動や実際に渡航もして、日本の文化や歴史を知り、交流もして、日本について深く知り、好きになってくれたことが嬉しかった。(アルフレッドの家には日本の国旗がでかでかと飾ってあって、しかも AKB のあっちゃんの写真まで貼ってある) プレゼン中、実をいうと感動で涙が出そうになった。アルフレッドは JRYC がルワンダで活動を始めたから関わってくれていた古株メンバーの一人で、今年の大学卒業で、学生として JRYC と関わるのは最後の年である。新しく入ってきているルワンダ人メンバーも、アルフレッドのように、日本のことを知り、好きになってくれればと思う。(品川)

※※※はなちゃんの 4 コマケニアルワンダ語講座※※※

コラム　結婚式 in ルワンダ

結婚おめでとうございます！ということで、ＪＲＹＣメンバーも参加して欲しいと言われ急遽参加することに。しかし、パーティー服なんてない・・・さらに、ゴミ処理場行った同じ日、かつ、そのままの服装で参加。結婚式では何かプレゼントを渡すというセッションがあり、何かギフトを持っていかねばならなかった。何も持っていない・・・が、しかし、そこは海原代表が先を読んでいたかのように、経由地ドバイで、器のようなものを購入していた！さすがです。笑　ということで、ギフトはなんとかＯＫ。そして、結婚式が始まると、新郎・新婦と同じような服装をしたカップル？のような人たちが 4 組ほど新郎・新婦の後ろにぞろぞろ。一体誰なんだ・・・？ケーキ入刃の時には、花火のようなものがケーキの上から噴き出しているではないか！す、すごい。これは、どうやら、相当な金持ちの結婚式のようだ。一体、牛を何頭新婦の家族に贈ったのだろう。だいたい平均は３頭らしいが、10 頭ほどでも贈ったのだろうか。そういえば、車も贈ったらしいという情報が。

すごく豪華な結婚式だった。帰りは、フロントガラスから前が見えないほどの土砂降りの雨の中、ムニャカジカーにぎゅうぎゅうになり、キガリ中心部まで帰った。（乾）

【第 3 章】

ルワンダ現地活動報告

1. ジェノサイド・メモリアル……63
2. 在ルワンダ日本大使館……65
3. ラジオ局(Radio Salus)……67
4. Kings'Palace……70
5. キヨンベ地区……73
6. トゥワ村……77
7. イントワーリ小学校……82
8. 廃棄物処理場……87
9. JICA……94

RWANDA
キヨンベ
Kiyombe
アカゲラ
国立公園
キブンゴ
Kibungo
キガリ
Kigali
ニャンザ
Nyanza
ギコンゴロ
Gikongoro
NUR
Radio
Salus
ブタレ
Butare
ニュニングエ
国立公園

ジェノサイド・メモリアル

担当者：山崎 暢子

1. 訪問日時・場所

a)キガリ・ジェノサイド・メモリアル

日時：8 月 14 日(日)16:00～17:00

場所：ギソジ

b)ムランビ・ジェノサイド・メモリアル

日時：8 月 15 日(日)16:00～17:00

場所：ギコンゴロ

2. 企画目的・訪問の経緯

第 5 回学生会議では、日本ルワンダ学生会議(以下、JRYC)のルワンダメンバーが東京でのピースコンサートや大阪での交流会、戦争体験者による平和継承 NGO などの訪問先で自らの体験を語ってくれた。「共通認識」を形成することはそれ自体難しい問題を孕むが、ある出来事について何かしらのかたちで共有、共感できる術がある場合、それは交流の中でお互いの意見に耳を傾け、理解しようとする助けとなるに違いない。今夏の第 6 回学生会議では、これまでの会議での活動もふまえ、メモリアルでどのように虐殺が紹介されているのか、また、一般の人々にとってのメモリアルの位置づけ、メモリアルの果たしうる役割を、虐殺の起きたまさにその地で確認するために訪問した。

3. 当日活動概要

2004 年に完成したキガリのメモリアル（キガリ中心からバスで約 20 分）は、主に 1994 年の虐殺の経緯、その被害の規模や国際社会の対応などについての展示と、犠牲となった子ども達についての展示、そして、世界各地における「ジェノサイド」行為に関する展示の三部構成となっており、全ての展示は英語、フランス語、キニャルワンダの三言語で表記されている。入館前に荷物とボディチェックを受けた場所のすぐそば、記念館の建物の周りには庭園がある。ここを訪れた人々が忘れがたい記憶を慰め、亡き人を静かに悼む場所として設けられた。

ムランビでの犠牲者は 5 万人にのぼる。もともと学校であった校舎の脇に、記念館が建てられた（キガリからバスで約 30 分、そこからさらにバイク・タクシーで約 10 分）。かつてこの地域一帯はフランス軍の拠点であり、フランスの国旗が掲げられたことを示す碑が今に残る。おびえ隠れていた人々はここに来れば安全だと聞かされ集まってきたところを民兵組織に襲撃されたという。校舎には約 800 超の遺体が安置されており、恐らく鉈で切りつけられたのであろう頭蓋骨に穴があいている人もいれば、身体の部位が欠けている人もいて、虐殺の悲惨さを物語っている。案内をしてくれた女性はサバイバーの一人であるが、彼女の夫や子ども達は殺害されてしまった。

閉館時間が迫っていたこともあってか、キ

ガリでは 2 グループいたが、ムランビでは私たちの他に訪問者を見かけなかった。

なお、ここで紹介した以外にもニャマタ、ンタラマをはじめ全国各地に記念館があり、JRYC のルワンダメンバーが通うルワンダ国立大学のキャンパス内にも、追悼スペースが設けられている。そこには当時の学生や教授の、日に焼けて色あせた写真が飾られていた。

4. 感想

孤児、難民、配偶者や友を亡くした人、肉体的、精神的に傷を負った人…ジェノサイドは、おびただしい人の死をもたらすだけでなく、のこされた人の生をも蝕む。ドアを開けると独特のにおいが鼻をつき、横たわる遺体を目の前にして、喉の奥がつまった。遺体には防腐剤がかけられているものの、この状態がいつまで続くのかという疑問が残る。ある部屋には骨が山積みにされており、冷たく無機質な部屋に彼らはずっと眠っているのだと考えるとやるせなかったが、死者の尊厳をたたえるためにもメモリアルがあるのだと聞き、また、こうして各地から訪れた者が虐殺の実態を少しでも学べるのは意義あることなのだろう。厳粛な空気がはりつめるメモリアルをあとにし、街の喧騒の中に身をおいたとき、生きる人間の躍動を感じたようにも思う。これらがメモリアルを訪問して感じた率直な思いであるが、帰国後しばらくして私個人の中でまとまったひとつの結論として、どのような情報を誰が誰にどのようにして提供するのか、また受け手はそれをどう咀嚼しアウトプットするのか考え続けることになるのだということがある。（山崎）

キガリにあるメモリアルは、想像していたより、非常に展示がきれいにまとまっていて、雰囲気は長崎や広島のそれと同等のものであった。ジェノサイドの歴史を写真や説明文で追えて、途中には生存者の証言を記録したムービーが見られるところもある。この表現には語弊があるかもわからないが、このメモリアルはジェノサイドを「頭」で理解し、考えられるメモリアルだったと思う。一方、ムランビにあったメモリアルは「心」や「感情」に訴えてくるメモリアルであった。

ムランビのメモリアルについては、そこに安置されている無数の遺体、どんなに衝撃を受けたかなど、昨年渡航したメンバーから色々聞いてあったし、第 4 回の報告書も読み、ある程度心構えはできていた。なので実際に自分でそこを訪れて、ジェノサイド犠牲者の遺体を見たときは、正直に言えば、話で聞いて、報告書で読んだ光景がひろがっているという感覚で不思議と衝撃的という感じではなかった。しかし、実際に自分の目で見るその

光景はじわじわと僕の思考と感情を襲ってくる。遺体をよく見れば、まだ髪の毛がついたままであったり、子供を抱きかかえた姿であったり、以前生きていたしるしが残されている。部屋が狭いため、自分と遺体がこすれることもある。そして次の部屋にいっても、次の部屋にいっても続く遺体の数々。鼻を衝く強烈な臭い。なぜこんな悲劇が起こらなければならなかったのか、もし自分がこのような形で自分の家族が、友達が奪われたとしたら、その悲しみと絶望はどれほど深いものだろうか、そんな考えが頭の中をめぐり、ずっしりと重たくて暗い感情が自分の中で生まれた。もしかしたらこのように犠牲者になっていたかもしれず、今はこの歴史を背負う一緒に回ってくれていたルワンダ人メンバーを見て、自分が彼らの立場にいたら、彼らのように振る舞えるだろうか。「和解」や「ジェノサイドを乗り越える」ことは並大抵のことではない。二度とこのような悲劇がこの国で、いやこの国だけじゃなくどこの世界でも起きてほしくないと心から思う。あの、宿に帰っても鼻に焼き付いて消えなかった強烈な死臭は多分一生忘れないだろう。（品川）

大使館訪問

担当者：嶋田 康平

1. 訪問日時・場所

日時：8 月 8 日(月)　10:00～11:00

場所：キガリ(空港より車で約 15 分)

2. 企画目的・訪問の経緯

・ルワンダ国内の現状を学ぶ。

・日本とルワンダの外交及び経済的関係について学ぶ。

・日本ルワンダ学生会議と日本大使館との今後の協力について意見を交換する。

・渡航期間中の安全についての注意を確認する。

3. 訪問先概要

2010 年 1 月に開館。それまでは在ケニア大使館がルワンダを管轄していた。二国間関係の進展・日本企業及び関係団体との連携強化・経済支援の推進など、対アフリカ外交の一環として開館した。当団体も昨年の渡航時に訪問し、お話を伺った。

大使館はキガリの中心部に位置し、厳重に警備されたビルの中に設けられている。

4. 当日活動概要

大使はご不在だったので、近藤茂参事官に 1 時間ほど時間を作っていただき対談を行った。メンバーの質問に対し近藤参事官が回答されるという形式で進んだ。訪問者が日本人メンバー6 名であったためか、各々自らの興味・関心に基づき質問することができた。そのため、全体としては幅広いざっくばらんな内容となった。ここでは、近藤参事官のご回答のうちの一部要約を掲載するにとどめさせ

ていただく。

●ジェノサイドから現カガメ政権

「ジェノサイドがなぜ起きたのか」という問いに対して、ルワンダ人の従順さが一つの答えとして挙げられる。上の人の言うことを疑問に思わずに実行するという国民性がある。それは現在の長期政権にも通じるところだと考えられる。

しかし、カガメ大統領は 2017 年の大統領選挙で RPF の人材に自分の政権を継いでほしいと考えている。インフラ整備もそれを見越して推進されている。また、ジェノサイド関連の調査や発言はタブーとされている。

●日本の企業進出について

中国や韓国の企業が積極的に進出しているにもかかわらず、日本の企業の進出は圧倒的に少ない。援助＝外交という伝統的な考え方に固執されるのではなく、民間の関心が向けられていくべきである。カガメ大統領は在日ルワンダ大使に対して、日本の観光客及び投資家の増加・促進を指示しているという。

ちなみに、数少ない日本企業の代表例としては、トヨタやケニアナッツがルワンダに代理店を置いている。

●トゥワ

トゥワの人々は見かけないし、気にならない。今日のルワンダでは、民族という考え方が消えつつあり、またそれが政府の方針である。よって、日本人としてトゥワという「民族」を支援することがルワンダの社会で評価されるとは限らない。

●日本ルワンダ学生会議との関係について

日本ルワンダ学生会議のルワンダ人メンバーの大使館へのアプローチには少し問題がある。いきなり、プロジェクトの支援や公認を一方的に求められても対応するのは難しい。実績や段階を踏んで関係を構築したい。もちろん、今後も関係をより深くしながら継続したいと考えている。

ラジオ局(RadioSalus)

担当者：品川 正之介

1. 訪問日時・場所

日時：2011 年 8 月 10 日(水)10:00～12:00

場所：ブタレ(ＮＵＲから徒歩 20 分ほど)

2. 企画目的・訪問の経緯

ルワンダのマスメディアに対する日本側の興味関心は非常に大きく、第 4 回本会議の際にもこの Radio Salus に訪問し、またこれまでの学生会議のトピックでマスメディアを扱うものはいくつかあった。前回の訪問の際、予定の都合上、短時間の訪問になってしまったこと、当日はラジオ局が休みで会ったことも重なり、職員の方のインタビューのみに終わってしまったため、今回の訪問では、滞在時間を多めに確保しルワンダの主要メディアであるラジオが、どのように制作され、放送されているのかを実際に見学し、職員の方、また学生にインタビューを行えるようにした。

3. 訪問先概要

Radio Salus は、2005 年に UNESCO の支援を受け、ルワンダ国立大学が設立したラジオ局である。毎日 24 時間放送を続けている。常駐のスタッフは現在 13 名。そのほかに NUR の学生が約 100 名、ボランティアとして働いており、NUR のジャーナリズム学部の学生のトレーニング機関としての役割も果たしている。ジャーナリズム学部の 2 年生から実地研修を積むことになっている。

4. 当日活動概要

当日は、訪問人数が多いとのこともあり、2 グループに分かれ前後半でラジオ局の中を見学させていただいた。ラジオ局の中は決して大きいとは言えず、小さな局の通路を歩くと、忙しそうに仕事をしている学生ボランティアや職員の姿が目に入る。

①News room(Draft room)

この部屋では主にインターネットでのニュースの情報集め、集めた情報の翻訳、音声の編集などが行われている。ここで働いている全員が学生ボランティアであって、それぞれ自分の仕事を忙しそうにこなしていた。日本についてのニュースも放送することがあるらしく、最近では地震と原発問題について、また、なんと広島・長崎原爆投下の追悼番組も放送したそうだ。

②Broadcast room

今回の訪問では実際に生放送をしているところにお邪魔させていただくことができた。3 名の学生が PC とマイクの前に座り、ケニアルワンダ語での放送をしていた。室内は防音、また冷房が設備されている。

③Staff room

局内の奥の方に、常駐スタッフ用の部屋が用意されており、ＰＣやプリンターなどの設備が整っていた。今回の訪問でも、職員の方にインタビューを実施した。

≪インタビュー内容≫

Q.一番放送時間の割合の多いジャンルはなんでしょうか。また、人気の番組は何ですか。

A.音楽、スポーツ、ニュース番組の割合が多いです。特に音楽番組の占める割合が大きいですね。人気の番組としては、「Salus Relax」というニュースとスポーツを扱う番組が人気です。

Q.去年の訪問で Salus テレビを作りたいと伺いましたが、その計画はどうなりましたか。

A.まだ進んでいません。政府の許可がまだ下りないからです。ルワンダには今国営チャンネルの一つしかなく、実現すれば、民間のチャンネルは初になるでしょう。まだ計画が進むのに 2~3 年はかかるのではないかと思っています。

Q.ジャーナリストの仕事は人気があるようですが、就職先は足りていますか？

A.就職先はたくさんあります。ルワンダには１５のラジオ局があって、そこで働く 300 人が中卒の勉強をしてないような人たちです。だから技術を持った人材が必要とされています。また政府は、2013 年までに、すべてのラジオ局の職員の 50%をトレーニングされたプロのジャーナリストにする目標を掲げています。

Q.お給料はほかの職業と比べてどうでしょうか。

A.ジャーナリストは、給料は低めです。スポンサーが足りないなどの理由があります。

Q.NUR のジャーナリズム学部について、キガリに新しくキャンパスができたと伺いましたが。

A.今年、キガリにジャーナリズムの訓練のできるスクールが立てられました。機械・設備が整っているのはキガリなので、（NUR のメインキャンパスのあるブタレではなく）キガリに作られました。

Q.誰が、どうやってラジオの企画を決めるのですか？

A.半年ずつ入れ替わりで 30 人の学生が働いています。彼らが取材したいことを探してきて、プロのスタッフを含めた MTG で企画を決めます。そしてその決定にしたがって学生が取材に行く形となっています。

Q.政府の干渉はありますか？

A.新聞の内容には政府は干渉しているようですが、今のところラジオではその様な話は聞いていません。今後どうなるかはわかりません。

今回の訪問で、特別に Radio Salus の番組放送予定表を頂くことができた。ある一日の番組スケジュールを抜粋してここに紹介する。

（2011 年 6 月時点の番組放送予定）

06:00-06:30	国際ニュース
06:30-07:00	ミュージック
07:00-07:30	ニュース
07:30-08:00	広告・広報
08:00-09:00	エンターテイメント
09:00-09:30	世界の歴史
09:30-10:30	ミュージック
10:30-11:00	ミュージックトークショー
11:00-11:30	ミュージック
11:30-12:30	ショーミュージック
12:30-13:00	農業
13:00-13:30	広告・広報
13:30-14:00	経済
14:00-15:00	教育
15:00-16:00	地域問題
16:00-17:00	ミュージックトークショー
17:00-17:30	ニュース
17:30-18:00	広告・広報
18:00-18:30	法律
18:30-19:30	スポーツ
19:30-20:00	世界の歴史
20:00-20:30	ニュース
20:30-21:00	広告・広報
21:00-21:30	道徳
21:30-22:00	ミュージック
22:00-23:00	Monday night show
23:00-24:00	スポーツ
24:00-06:00	ミュージック

一目見てわかることは「ミュージック」の多さ。深夜帯も含めればかなりの割合をミュージックで占められているのがわかる。

ミュージック以外には歴史や法律など、教育や教養になる番組がおおく、この表にはないが、女性問題について取り扱う番組なども存在する。ちなみに、「地域問題」という番組では、どこそこの誰それさんが誰それさんと喧嘩した、のように地元に根付いた（？）内容を放送するそうだ。また、番組のスケジュールがきっちりきまっているので、ルワンダ人はアフリカンタイムで行動するけれど、ラジオ局で働いている人たちはどうなのかと冗談交じりで聞いてみたところ、
自分の担当以降の番組担当の人に迷惑がかかるから、時間には厳しいとのことだった。

5. 感想

放送時間の多くを占めるミュージック。、この理由について伺ってみたところ、純粋にルワンダ人はミュージックが好きだし、(心に傷を負っている人が多いので）ヒーリングの意味も含まれる、と答えていただいた。かつて、ジェノサイドにおいて大きな負の役割を果たしたラジオではあるが、現在は人々に教育や癒しを提供し、また以前、日本開催の学生会議でルワンダ人学生がしきりにいっていたのだが、地域に根付いた番組などを多く放送することで、よりよい地域社会の構築に役立っていたりと、ルワンダ社会におけるラジオの役割は非常に大きいものだと改めて感じだ。

Radio Salus を訪問して、そこでボランティアとしている学生たちのモチベーションの高さに驚かされた。それぞれの学生が、将来はジャーナリストになりたいという夢をもち、

また責任感を持って仕事にあたっていた。現在 JRYC には、Radio Salus で働いているピーターという学生メンバーもいて、その彼と渡航期間中多く共に時間を過ごすことがあった。彼が話してくれたように、ルワンダのジャーナリズムは機材的にも、技術、人材的にもまだまだ発展途上である。以前、日本での学生会議で、日本のマスメディアについてプレゼンテーションをする機会があったのだが、日本や、諸外国のジャーナリズムの良い面も、悪い面も参考にして今後のルワンダのジャーナリズムが発展していくことを願っている。（品川）

ジャーナリストという仕事に情熱をもって取り組む大学生と出会い、刺激を受けた。彼らが伝える「情報」は、自分が日本で得られるものとは違った。ルワンダはもちろん、アフリカの情報ですら、私たちが受け取るものの大部分は第三者が伝えるものでしかない。この訪問を通し、ルワンダと日本の様子や、両国での報じられ方などを当事者目線で共有できた。また、言語感覚が希薄な私にとって、4 言語以上の習得を強調したルワンダ学生の意見は非常に新鮮であった。私たちは外国語である英語でコミュニケーションをとっていたが、一番自分を表現しやすい言語は母国語であることは確かである。母国語を話す者どうしは比較的早くなじめる。ルワンダの学生ジャーナリストは実際に現場に出るときには現地の言葉を使い、その土地に順応するのだと教えてくれた。アフリカに住む彼らならではであり、近い将来日本人の私たちにも求められるかもしれない「力」を感じた。（久保）

Kings Palace

担当者：永井 陽右

１．訪問日時・場所

日時：8 月 11 日(木)　14:00～16:00

場所：Kings Palace ニャンザ郊外

２．企画目的・訪問の経緯

ルワンダがベルギーにより植民地化される以前の文化と以後の文化を学習できると、同時に直接的に体感できるので訪問することになった。

３．訪問先概要

通称 kings Palace（王の家）。植民地化される前、ルワンダの王が住んでいた住居であり、そのまま再現、維持されている。

植民地支配後の king の住居もレプリカがほとんどだが、忠実に再現されている。
ルワンダのダンスで表現される大きな角を持った牛もたくさんいる。この牛達はおとなしい性格で人間を襲うなどといったことはなく、角が大きいのもオスのみ。

４．当日活動概要

《スケジュール》

14:00 到着、受付

14:20 見学開始

16:00 終了

受付にて撮影器具は一つだけしか許可しないことを言われる。二つなどにするとお金が必要になるらしい。

まずはルワンダ古来の住居を見学する。実際に中に入ることができるのでとても興味深かった。家ごとに役割があり、様々なルールが存在していた。王にミルクを献上するための家、ビールを作るだけの家、など。ビールの家は入口に突っ張りがない。理由は酔っ払ったときに躓かないようにとのこと。なんだかかわいく思えてくる。王の家にはルールがあり、基本的に男尊女卑だったので、女性が王を直接拝見することは許されておらず、壁際から見るしかなかったという。王の寝室に行くにも回り道しなければならなかった。ちなみに王の寝室には、ルワンダで有名なツボがたくさんあった。あのツボは収納能力に優れており、王が愛用していたとのこと。

植民地支配後の王の家も展示されていて、実際に中に入ることができる。この王の家も非常に忠実に造られており、とてもおもしろい。ルワンダの王は歴代身長が高いと言われていて、実に 2 メートル 30 センチあったとされている。ありえないと思っていたのだが、ヘリコプターと一緒に写っている王の写真を見て驚いた。ヘリコプターのドアの上底まで頭があるのだ。もしかしたら本当に 2 メートル 30 センチくらいあったのではないかと感じた。加えて、王はテニスが好きだったという。

写真もたくさん展示してあり、西洋人とルワンダ人がどのように付き合ってきたかがよくわかり新鮮であった。西洋人に植民地化される前、ルワンダの社会は王をトップとした氏族社会だった。みな伝統的な衣装でダンスをしていたらしい。ダンスなどで客を盛大に歓迎する文化で西洋人が来たときも、総出で歓迎をした。そのときの写真は両者共に笑顔であった。ルワンダ人を妻とした西洋人も少なくなく、一緒に暮らしていた写真もあり、興味深かった。

５．感想

ルワンダ古来の家を体験することができてとても楽しかった。今まで一度も見たことがなかったので、その風変りした家とおもしろいルールなどは“異国の文化を知る”という原点を思い出させてくれた。実際に体験できたということでそれはより衝撃を強めて私にやってきてくれた。西洋人が来た当初、彼らは相互理解をしていたのだと思う。異なる文化を持った異なる人間たちが来たときに、心をどう構えるか。ルワンダ人と西洋人が一緒に写っているたくさんの写真を見ると、そのことを考えさせられた。(永井)

コラム　出会い in Rwanda

ルワンダでは、実に様々な人たちとの出会いがありました。その中でも特に印象的で面白かったのが次の２人。１人目、名前はボノボノ。彼は朝、玄関先で僕たちがルワンダで発表する踊りを練習し始めた姿を見ると、徐にどこからかPCを取り出してきて、洋楽を大音量で流し、「俺がダンスを教えてあげるから一緒に踊ろう！」と私たちの輪に入ってきた。毎朝30分は踊っているらしい彼のダンスは非常にユニーク・・というより音楽に合わせてジャンピングスクワットをするだけ。渡航して間もない＋早朝眠い私たちにはツライ。苦行。鬼・・などと思っていたら毎日30分は踊っているはずのボノボノが先に息が上がってしまいノックアウト（笑）。まったくと言って朝練ができなかったけど、楽しかったからよしですね！ちなみにボノボノとは今でもFacebook上で友達である。

２人目は大学の近くにあるレストランで働く若い女の子、通称エンジェル。彼女の素敵な笑顔と毎日毎日てきぱきと仕事をこなす姿に、私たちはいつしか彼女をエンジェルと呼ぶようになっていた。常に笑顔を絶やさないエンジェル。毎朝のティーとパンケーキとエンジェルの笑顔はもう最高(笑)。永井は「一緒にキガリに行きたい」だとか「お土産買ってきて」だとか、はたまた「日本まで私を連れて行って（はあと）」とまで言い寄られるほど仲良く（？）なったのであった。そんなエンジェルとの日々もずっとは続かない。ブタレ滞在最終日に、私たちはエンジェルにみんなのメッセージを書いたポストカードをプレゼントした。これでエンジェルともお別れ…宿に戻りルワンダでの最後の予定に向けて用意をしていると、なんと、わざわざエンジェルが宿まで来てくれて、私たちにお別れを言いに来てくれたのである。日本に帰ってからもはなちゃんの携帯にはエンジェルから電話がかかってくるとか。

きっと今日もエンジェルはブタレの小さなレストランで、お客さんに天使の笑顔を振りまいているに違いない。

（品川）

社会貢献活動(キヨンベ地区)

担当者：久保唯香

訪問日時

日時:2011 年 8 月 15 日、20 日

【はじめに】

私たちは、「学生会議とフィールドワークでの学びを社会に還元したい」というルワンダ学生の要望を受け、昨年から社会貢献活動の在り方について議論を重ねてきた。学生会議を中核に位置付けている私たちにとって、「社会貢献」の実現には本当に多くの困難が伴った。今回私たちが訪れたキヨンベ地区は、ウガンダとの国境近くに位置している、人里離れたいわば辺境の地である。キヨンベにはたくさんの子どもがいる。しかし就学率は低く、かといって活発な産業がないので就職も難しい。キヨンベに住むひとにとって農業資源とその技術は重要な生活資源なのである。私たちはここに着眼した。

【キヨンベ地区の現状】

首都・キガリから車で 3 時間。キヨンベはルワンダとウガンダの国境近くにある。子どもはとても多い。この地区には小学校(primary)、中学校(secondary)があるが、中学校に進学できない生徒も多い。この割合が多いのは、この地区に孤児や貧しい家庭が多く居住しているからである。

中学校には Giribakwe Youth Cooperative と呼ばれる就労トレーニング施設が併設されている。この施設は 2 年前、中学校に進学するのが難しい 20 人の子どもたちが中心となり設立された。現在は政府が主導するプロジェクト、VUP(VISION 2020 Umurenge Program)の支援を受け、ミシンで服をつくるプロジェクトを行っている。加入条件は小学校卒業のみ。指導はこの施設の卒業生がヤングリーダーとなって行っている。現在、16 名の生徒がこの施設で訓練を受ける。

この施設は多くの問題を抱えていた。そのひとつがマーケットの欠如である。いくら服を生産しても、それを売る市場がキヨンベには圧倒的に欠落している。加えて交通の便が悪く、製品を市場に持っていくのも困難。実際、材料費は VUP からの借金で賄っており、その返済に追われている状態が続いている。

また、この地区では自給自足が生活の鍵となっている。収穫物を商品にするほどの技術や供給量はない。したがって、生活を持続可能なものにするためには、持続可能な資源が必要なのである。

この問題はなにもキヨンベに限ったことではないらしい。地域によって生産物の違いはあるものの、首都のキガリを除いてほとんどの地区は自給自足生活がスタンダードとなっている。そこで重宝するのが、牛やヤギといった家畜である。これらの家畜は食糧や肥料となり、短期間で頭数が増えるために、他人への譲渡がたびたび行われ、時には売買によっ

て金に姿を変える。実際、ルワンダの結婚式では新郎が新婦の実家に牛をプレゼントするのが伝統である他、政府の「一家に牛一頭政策」にも貧困対策に牛を用いたビジネスが採用されている。

【JRYC とルワンダの「地方農業」社会】
私たちは再度にわたってルワンダの地域社会の現状について議論した。例えば第 4 回学生会議(2010 年 8 月)では、ルワンダにおけるグリーンレボリューションの可能性を共に考え、ルワンダの経済成長と農業がいかに密接に関わっているか議論した。また、第 5 回学生会議(2010 年 12 月～1 月)では、『一家に牛一頭政策』のプレゼンテーションを受け、ルワンダにおける家畜の重要性を学んだ。今回の第 6 回学生会議の中では、ルワンダの農業そのものについてのプレゼンテーション他、テクノロジー、地方分権社会、周辺諸国との関係にも触れた。

私たちはまず、ルワンダでは多くの人口が地方社会に依存していることを学んでいた。また、地方社会の持続には農業が重要な役割を果たし、またその農場が持続していくための鍵は、家畜(牛、ヤギ)にあることを学んだ。私たちの短い滞在時間で高い効果を得られる事業として、ヤギの贈呈案が挙がった。そのとき、私たちのキヨンベ地区訪問が決まったのであった。

【キヨンベ地区への訪問】
2011 年 8 月 15 日、20 日(いずれも午後)
ルワンダ学生の事前調査と私たちの訪問・聞き取り調査から、前述のように、キヨンベ地区の訓練施設には持続性に問題があることが分かった。そこで私たちは、ヤングリーダー 10 名に対しヤギを贈呈することでこのキヨンベ地区の農業技術の向上を図れないかと考えた。また、このヤギの成長を観察することで、地域における家畜の役割と若者の成長を知ることができ、今後の学生会議に役立てることができる。
この事業を行うにあたり、10 人のヤングリーダーのうち 3 名にインタビューを行った。すると、彼らはヤギを育成するにあたり以下のような利益を得ることが分かった。

- 肥料になる。
- 子ヤギが生まれたらお金に換えられる。
- 食糧としても有用。

しかし、困難として以下のようなことも上がった。

- 小屋がない。
- 死んだあと、頼るものがない。
- 病気になったとき。

とはいっても、家畜を用いず化学肥料を多用する日本と比べると、牛やヤギ飼育する環境は良好だと言える。医者や薬も比較的簡単に手に入るようである。また、地域コミュニティーが発達しているため、困った際には地域住民どうしが支えあえる。子ヤギが誕生し、それが次世代リーダーへと手わたってゆけば、さらに持続的な社会を構築できる可能性もある。

私たちは最低でも第 7 回学生会議までは月

に１度のペースでこのヤギとヤングリーダーの成長を見守り、その後は子ヤギの誕生や譲渡などの折りにふれてこのキヨンベ地区のヤングリーダーと繋がることとなっている。このプロジェクトを通してキヨンベ村のヤングリーダーが成長すると同時に持続的な社会の形成に貢献できることが理想的である。また、この活動がきっかけとなり、次回以降の学生会議では積極的に互いの社会でのスタンダードや価値を共有しあい、需要や社会の矛盾についてより深い議論が交わせることを期待している。

【感想】

キヨンベ地区という具体的な事例を扱うことができ、実りは多かった。ルワンダの大学生が、ルワンダのトイレは排泄物が蓄積すると場所を変えなければならず、効率が悪いといっていたその状況もみることができたし、誰もがキニアルワンダを話すという事実も確認できた。また、住民の悩みや喜びは、実際に行ってみないと分からないのだと痛感した。

恥じらいなく踊り、歌うこどもたちは、不思議なことに。いざ聞き取りしようとすると引きさがってしまう。特に女性は顕著だった。しかし、英語を学校で勉強しているという小学生は習ったばかりの英語を一生懸命使おうとしていたのが印象的だった。

中学校があるとはいっても使われているようには見えず、指導者がいるようにも見えなかった。この地区では、子どもの多くは高等教育を受けられない。生活の豊かさと高等教育の有無は必ずしも一致しないかもしれないが、この村の将来を考えるとき、学校で学ぶことができる組織内での動きや責任、他人に物事を伝えるという基本的な技術は改めて大切だと気がついた。たくさんの子どもを抱える地方コミュニティーでの絶対的教育対象者数の向上は、生活の改善に大変重要であると感じた。（久保）

このルワンダでの社会貢献活動についての議論はさかのぼれば第４回本会議頃までさかのぼり、これまで日本側で大いに議論されてきた問題だった。この議論の詳細や社会貢献活動実施に至るまでの過程については僕の全体感想にて少し述べられているので是非ともそこを参照して頂きたい。

今回の訪問で、一番に考えさせられたことは、「支援や援助というものは本当に良いことなのか」ということであった。

食べるものがない、病気が蔓延している、というような生死にかかわる極限的な状況の人々に手を差し伸べるような援助や支援はあってしかるべきだと思う。しかし一方で援助というものは依存関係を生み出し、援助を受ける人の自立を阻害する可能性もある。ではどこまでの人を援助し、どこまでの人に援助しないべきなのか、ボーダーはいったいどこにあるのだろうと考えていた。加えて今回の活動では、キヨンベ村の方々にヤギを贈呈したわけだが、見ず知らずの初対面のルワンダ人にポンとヤギを買って与えるような社会貢献や援助の仕方には問題があると思うし、今

後しっかり議論を日本とルワンダ側でしていくべきだと思う。

【インタビュー詳細】

質問内容 1. ヤギを飼ったことがあるか。(Do you have any experience to have any goats?)

質問 2. どうしてヤギが必要なのか。ヤギを得ることでメリットはあるか。(Why do you need goats? What is the benefit for you?)

質問 3. ヤギを得ることでどのような困難があると思うか、そしてそれをどう乗り越えるか。(What do you think the problem you would face with is? How do you plan to overcome it?)

質問 4. これらのヤギをくれた人へなにかコメントがあればどうぞ。(If you have some comments for those who gave them to you, feel free to say.)

A,20 歳女性

名前：Omrngabire Dianwe

1.ヤギを飼った経験はない。

2.ヤギは子どもを増やすから他のひとともシェアすることができ、相乗効果が認められる。また肥料にもなり、農業にもよい影響を与える。ヤギから様々な収穫物が見込める。肉やミルクや肥料だけでなく、売ってお金にかえるとこもできる。

家がないこと。できるだけはやく家をたてたい。また、病気になったときが心配。でも一度ヤギを飼い始めればお金もできるし、薬も買うことができると思う。

ヤギという贈り物をもらえて幸せ。とても役に立つと思う。

B,19 歳女性

名前：Muhotacyere Liliane

1.ヤギを飼ったことはない。

2.将来がたのしみ。ヤギは次の世代にも引き継ぐことができる。食べ、売り、そして買うことに繋がる。

3.一つは病気。医者を見つけて薬を飲ませる。もうひとつは家。作るようにする。

4.来年には増えていると思うから、見に来てください。

C.16 才男性(英語での会話が多少可能)

名前：Ntihabose Emmanuel

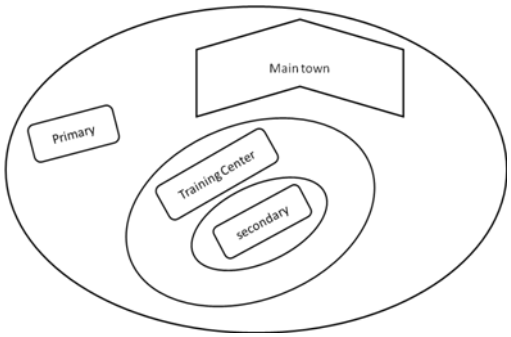
1.ヤギを飼ったことがある。

2.肥料になるし、農作物・畜産物を増やすことができる。肉も食べられる。

3.病気が心配。医者は多くはないけど、secondary を出た人なら病気をみることができるから、心配ない。ヤギが死んでしまったらどうしようとは思う。ヤギが死んだあとの生活が想像できない。

4.心配ない。

(キヨンベ簡略図)



トゥワ村

担当者：秦 七愛

1. 訪問日時･場所

日時：8 月 16 日（火）9:00～10:00

場所：NONKO 村（キガリから車で 15 分）

2. 企画目的・訪問の経緯

ルワンダに住む民族。ツチ・フツ、そしてトゥワ。ルワンダ人口の約１％にあたるトゥワの人々は、ルワンダでは長い間マイノリティーとして扱われてきた。

本企画では実際に村を訪問し、住民へのインタビューを通して、彼らの生活、文化、社会的地位、経済状況などについてを学ぶ。

また、トゥワの人々を支援する NGO「COPORWA」の職員の方にも同行して頂き、彼らの活動について話を聞いた。

そして、トゥワの人々の生活が向上してゆくにはどのような方法が必要であるのか、急速に発展してゆくルワンダでの、避けては通れない貧困問題に目を向けることが目的である。

今回は、第４回本会議にも訪れた NONKO 村を再び訪れた。

３．訪問先概要

・トゥワ

ルワンダの第３の民族であるトゥワ。歴史の中で、少数の彼らの存在は無視される傾向にあった。昔から山林に住み、狩猟採取の生活をしていたが、自然保護や国立公園の設立を理由に移住を強いられた。新たな土地でも、貧困状態の生活を送り、社会からの偏見や差別を受けている。

現在の収入源は伝統的な陶芸で壷やレンガを作って売り、わずかな家畜を飼うことである。

・NONKO 村

大通りから少し外れた林のなかに、肩を寄せ合うように土壁とトタン屋根の家々が建っていた。家同士の間の道は人一人が通れるほどの幅しかない。この村には 19 の家族、83 人が住んでいる。陶器を売っての収入が主で、農業を営む土地は無い。牛やヤギといった家畜はごく少数であった。

村の土地は 60 年代に裕福なトゥワの男が所有していたもので、ルワンダ内戦の時に彼が逃げた後、その子供たちが他のトゥワの人々と分け合うようになったそうだ。

・COPORWA

この村を支援している「COPORWA」（The Community of Pottera of Rwanda）はルワンダ全国のトゥワの権利の主張・保護・生活の向上を目指して活動する NGO である。活動分野は人権、教育、暮らし、文化、HIV/AIDS、ジェンダー、環境、と多岐に渡る。

４．当日活動概要

私たちが村を訪れた時は、ちょうど村の女性達が集まって、陶器を作る材料の準備をしていた。村人に、ルワンダ学生が私たちのこ

とを紹介してくれた。村人は昨年に引き続き２度目の訪問である海原の事を覚えていた。

事前に、私たちと話をしてくれる村人が選ばれていて、村のリーダーが彼らを紹介してくれた。彼らは村の現状を外に伝えようと、私たちに話をしてくれた。

村の少年

・生活について

私たちの生活は良くはない。１家族（子どもを４人持つ）は１日１ドルあれば生活できる。村に居る子どもの４０人中３０人は primary だけだが学校に通っている。卒業後、村に留まる人と外で職を得る人が半々ぐらい。学ぶことは大切だよ。

・今必要なもの

家・トイレが必要。

ルガンバディエ（男）マリガルト（女）

サラ（女）

・収入について

ツボには特定のマーケットは無くて、毎週売りにでる。道で人々にツボを買ってくれるか聞いて回る。しかし、ツボのような工芸品では少しのお金しか得られない。

・生活について

ここの暮らしで困難なことは、生活の状態が悪いこと。私たちのバックグラウンドが影響している。社会からはじかれているので電気も通じていない。祖先の暮らしも悪かった。子供達の教育も primary まで、これはプロジェクトからお金をサポートしてもらっているので無料でいける。Secondary もサポートがあれば行ける。

・他の村とは、ツボ作り組合で交流がある。

Amani Nsanzumuhire(22 歳・男)

・仕事について

ツボを作ることを仕事にしている。このツボは誰もが作れるわけではないが、小さい頃から家族が作っているのを見て自然に覚える。１つのツボを作るのに３時間ほどかかる。１日に１０個ほど、１つが２５０rwf（約３.３円）で売れる。Ministry of infrastructure が最近ツボの作り方を指導してくれて、材料を少なく、しかも売れるようなデザインのツボが作れるようになった。去年まで学校に行っていたから、お金も無くて、今私はツボ作り組合には入っていない。

だけど、将来はもっとお金の稼げる電化製品販売のようなビジネスがしたい。

・生活について

お金が無いため、学校を中退した。病気になったら家族に見てもらって、民間治療のようなことをする。必要なのは、十分に働くこ

とが出来ることと、その仕事によって生活できるだけの十分なお金が得られることだ。

・夢について

裕福になること、そして貧しい人々を助けること。

ルガンバディエ（男）ガモンドエルバ（女）

（村のリーダーと、キガリ全体の COPORWA の責任者）

・政府について

COPRWA の主な活動は政府にトゥワの問題に対処することを促すこと。政府は様々な約束をするけれど、district（おそらく地区の行政のようなもの）がそれを実現しない。でも、違う村には健康保険金のようなものや牛を与え、公立学校へ子どもを行かせたりしている。だから、壷を焼く窯は新しくできたが、この村は１年で何も変わっていない。

しかし、この村には World Vision のような国際的な NGO も来てくれ、個人的な寄付などもあるが、サポートは少ない。

・トゥワについて

トゥワの人々の状況を世の中に広めること。トゥワに対する差別は依然として残る。NGO がこの地域に調査に来て政府にレポートを出したとしても「batwa」の文字を消さないと支援は降りない。トゥワはルワンダに初めて到着した民族だ。トゥワという名は私たちのアイデンティティーである。だから、政府の「１つのルワンダ」に対して保持し続けたいと考えている。

・村の様子

村は林の中にある。

手前にあるのが政府にもらったという窯。

ツボを作るのは女性の仕事だそうだ、工場で貰ってきた材料を練り上げ、皿ロクロを使い女性達は陶器を作る。インタビューをする傍らで、あっと言う間に器の形が出来上がった。子供たちも一緒になって土をこねている。

乾燥中の陶器。これは、食事を作るときのコンロの様なもの。

陶器を作る作業場のかたわらで食事を作る。

右の女の子は右目を真っ赤に充血させていた。痛がっている様子はなかったが、どうしたのか気になった。

家は狭く、物もほとんどない。

村の中には陶器の破片などが落ちているがほとんどの子どもが裸足である。

5. 感想

今回時間が限られていたこともあり、じっくりとはいかなかったが彼らの生活を垣間見た。彼らと私の共通点は土を練って、形を作り、窯で焼くという事だった。事前にそのことを知った時はアフリカの焼き物とはどんな物なのかと、興味津々だった。けれど同時に、その共通点は決定的に違う点であったことに気づく。壁がボロボロの小さな家。土管のような窯。裸足の子ども達。割れた陶器の山。彼らの生活は私の生活とは対極のところにあり、私はそのことですっかり戸惑ってしまった。もっとお金を稼げる仕事がしたいという彼ら。トゥワの伝統的なツボ作りは今のルワンダではお金にならない。貧しさから彼らが

抜け出すということは、遠くない将来に、トゥワのツボがなくなるということだろうか。

村で、私は彼らとの間の距離感に戸惑い、混乱していた。名前も名乗らず、名前も聞かずに、始まってしまった少年へのインタビュー。その間、気が進まないのか、終始節目がちで答える少年。ルワンダ学生の通訳で少年に質問をしている間、私には罪悪感のような気持ちさえ芽生えていた。彼らに対して私に何が出来るというのだろうか。

トゥワの村で、他の社会の抱える問題に首を突っ込むのは難しいと強く感じた。支援、支援と、下手に手を出してしまえば、文化（ここで例えるならばツボ作り）を 1 つ消してしまうことになるかもしれない。そういう可能性を考えると動けなくなってしまった。それでも、彼らの生活する現状で発展を望むのはわかるし、力になりたいとも思う。困っているからと、安易にサポートするのではなく、彼らのことを知り、もう一歩踏み込んで発展について話をし、お互いに考え、彼らが本当の意味での発展するためのサポートが出来たら、と思った。（秦）

私が言葉を交わした青年は、英語を話すことができた。話している彼の眼は、好奇と喜びで輝いていた。彼は突然現れたよそ者からの質問に快く、楽しみながら答えていたように見えた。

差別や貧困という単純で一面的な基準だけで、「バトゥワ」をとらえてしまうのは適当ではない。バトゥワの人々が訴える貧しさは何に起因するのか。ルワンダ内部の文化や生活様式の相違による不調和、「1 つのルワンダ」という政治的決定と現実社会との乖離、経済成長の光と影。このような複合的な要素が、人々の意識の中で複雑に絡み合い疎外意識や排外感情を形成する。そして、現実社会に貧困となって表面化する。

経済成長の恩恵や国民国家のイデオロギーから取り残された人々がいる。それはバトゥワに限られたことではないだろう。新国家に迎えられた人と取り残された人。その間には感覚的・意識的な距離が存在し、これを縮めるのには時間がかかる。故に、彼らの貧しさはすぐに解決できる性格のものではないと考える。私たちの団体が、「相互理解」という考え方をルワンダ社会に広げていけば、少しずつではあるが状況を変えていくことができるかもしれない。（嶋田）

イントワーリ小学校

担当者：海原　早紀

1. 訪問日時・場所

日時：8 月 20 日(土曜)　14:00～17:00

場所：東部州　カヨンザ郡　カバロンドセクター

2. 企画目的・訪問の経緯

小学校への訪問は、当団体 OB であり現在協力隊員として活躍中の宗像淳史氏の紹介により実現した。

渡航の時期が小中学校の長期休みと重なってしまったため、生徒との交流はできなかった。今回はイントワリ小学校の校長先生にルワンダの教育現場について詳しくお話いただいた。

3. 訪問先概要

私立イントワーリプライマリースクール（Intwari Primary School）は、子どもに関わる各機関・団体との連携、発達/発育方針、教育/教科課程、アドボカシーなどを通じて教育及び子どもの権利を促進する父母主体の私立学校である。ジェノサイドで家族を失った経験から次世代の子どもたちに同じような経験をさせたくないと思い、ウィヒルウェ・ジャンデデュー(Uwihirwe Jean de Dieu)現校長が 2006 年に保育所、及び父母委員会（日本の PTA に相当）の協力により 2007 年に現小学校を設立した。

現在 250 名の子どもが在籍、一クラス 30 人～40 人で構成されている。教員数は 7 人。また、父母委員会が学校の活動を評価及び指導している。

4. 当日活動概要

Uwihirwe Jean de Dieu　校長へインタビューを実施した。

Q.「学校の設立経緯について教えて下さい。」

A.「私自信が 14 歳の時に両親を亡くして孤児となったのだが、その時に周りの人々に助けられて生き延びることができた。だから、私も子供たちを助ける仕事がしたいと思うようになり、Secondary School（日本の中学校・高等学校に相当）では教育について勉強した。そのあとは、ストリートチルドレンの施設で四年間ボランティアをしていたが 2006 年にこの学校を始めた。この地域の子供たちの親御さん達から資金を募って学校を建てたが、最初は nursery（幼稚園）の一学年だけだった。今では生徒が増えて primary（小学校）６年生までの子供たちが通っている。この 9 月に初めて卒業生を出した。」

Q.「ジャン校長が目指している教育理念はどんなものですか？」

A.「第一に、教育の質。第二に、将来社会に貢献出来る様なモラルある人間になってほしいということ。」

Q.「学校に入学するにはテストなどはありますか？」

A.「nursery は特に何もしていないが、それ

以上の学年は適正を判断するためにもテストをしている。」

Q.「男子生徒の方が多い理由は何ですか？」

A.「現在男女の比率は 154:96。昔ながらの女の子は家にいるべきという考え方は残っている。また、私立の学校はお金がかかるので男子が優先的に通わせてもらえる。」

Q.「ドロップアウトする子どもは多いですか？」

A. 「ここは私立の学校なので、親がしっかり教育の大切さを理解して通わさているからドロップアウトは少ない。しかし、学校に通い出す年齢が遅くなってしまっている子どもたちはいる。例えば、本来 6 年生は 12 歳ですが本校では 15 歳の子どもまで受け入れている。」

Q.「教科書は足りていますか？」

A.「教科書は本当に高い。政府が認可している教科書は海外で出版されているものなので、5000 ルワンダフランもする。本校では、先生は生徒用・先生用の教科書を持っているが、生徒は学校から提供している数少ない教科書をシェアしている状態。学校が全員分を買うお金がないので、親御さんたちに購入してあげることを進めている。

実は、教科書に関しては、政府の補助が出る公立学校の方が恵まれている。」

Q.「給食について教えてください。」

A.「本校では給食は設けていない。昼休みが 2 時間あるのでその間に家に帰って食べる子どもたちがほとんど。

ルワンダでは、2000 年～2002 年の飢餓で全国的に学校からのドロップアウトが増えたので、WFP の給食プログラムが導入された。しかし全部の学校で実施されているわけではなく、現在はさらに減ってきていると聞いている。

本校の生徒でさえ全員が満足に食べられているわけではないが、教育を受けたいという思いから生徒たちは学校に来てくれている。」

Q.「公立の学校と比べると教育の質はどのような点で優れていますか？」

A.「クラスが少人数制であるということだ。公立学校では 70 人のクラスが普通だが、本校ではその半分だ。先生がひとりひとりの名前・性格を覚えることができる。」

Q.「美術/図工の授業はありますか？」

A.「残念ながら、今はない。英語、キニアルワンダ、算数、社会、理科の 5 教科を教えている。美術系の授業はお金がかかるし、美術を教えられる人材がいないから難しいのだが、私は是非やりたいと思っている。

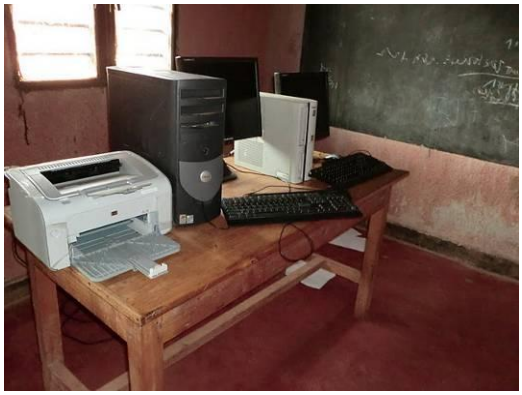
ちなみに、通常授業以外にクラブがあって、スポーツ・カルチャー・工芸・ディベート・環境などに取り組んでいる。勉強ができるだけじゃなくて、責任を持って色々なことに取り組める'good man'になってもらいたいと思っている。」

Q.「ルワンダ政府は教育に ICT を取り入れるのに積極的ですが、ここでは One Laptop per Child 計画（全生徒が一人一台パソコンを使って授業を受ける）は実施されていますか？」

A.「そのプログラムはまだ計画段階。公立学

校では始まっているが、ここには２台しかパソコンがない状態だ。パソコンは一台２００ドルもする。

個人的には、私はパソコンによる教育が絶対必要だとも思わない。本校で ICT の授業を導入するなら、パソコンルームを別に作って決まった時間以外は使えないようにする。」



Q.「生徒が好きな授業はどの科目ですか？」

A.「もちろん全科目大事なのだが、やっぱり子どもの好奇心をくすぐるのは社会と理科。社会では 5 年生から他のアフリカの国々について、6 年生から世界について学ぶ。」

Q.「ジェノサイドについてはどのように教えていますか？」

A.「テレビや追悼イベントを見ているので、子供たちは入学前からジェノサイドについて知っている。しかしその背景や詳しいことについてしっかり教えるのが学校の役目だ。

最初からジェノサイドについて教えるのではなく、社会の授業の中で peace、harmony、respect についての授業をしてから、それと対比させる形でジェノサイドを振り返り、当時はそういった価値観が忘れられていた、という風に学ぶ。朝礼のお祈りや国家、校歌からもそういった価値観が学べる。

先生によってジェノサイドの経験が違ってくるので、スタッフミーティングでフォローをしたり、もちろん教科書も参考にする。」

Q.「今までで、一番大変だったことはなんですか？」

A.「一番最初に学校設立のアイデアを実現させるのが大変だった。この地域で初めての私立学校だったし、私もまだ若くて自信がなかった。

そして今でも困っているのが物資の不足だ。ノート、チョーク、ペン、水、救急セットなどがまだ足りない。」

5. 感想

私は去年もイントワリ小学校を訪問したのだが、その時は主に生徒とのダンス交流などで終わってしまったため、今回その学校について校長先生と詳しくお話できたことは、私にとって貴重な機会だった。

とても単純な感想になってしまうが、「この学校は楽しそう！」と心から思った。ジャン校長は勉強だけでなく'good man'になれるような教育が大事と言っていたが、そのような理念の下作られた学校で、子どもたちはのびのびと成長していくのだろうと想像した。

また、個人的に渡航前からどうしても気になっていたジェノサイド教育について、ジャン校長とお話してみて納得した。というのも、教育現場でしっかりと歴史的な背景を説明しなければ加害者が「悪者」として見えてしまいそうだが、小学生に植民地時代から始まる経緯について教えるのは難しいだろう、と私は思っていた。しかしジャン校長が教えてくれた道徳的な価値観と対比してジェノサイドを振り返る方法は、いずれの問題もクリアしていると思った。実際にこれが正しい教育のやり方なのか日本人の私が判断することはできないが、少なくともジャン校長のようにジ

ェノサイド教育について熱心に考える人間が学校全体の教育方針を見守っている学校なら、間違ったジェノサイドイデオロギーが子供たちに広まることはないだろう、と感じた。

※※※はなちゃんの４コマケニアルワンダ語講座※※※

コラム　感電コンサート

まさかコンサートがコラムになる日が来るとは・・・・。

ＪＲＹＣルワンダの学生の多くが所属する伝統舞踏サークルＩＮＤＡＮＧＡＭＵＣＯ。そのコンサートが８月１３日に行われた。テスト期間中ではあったが、卒業を間近に控えたメンバーと共に立つ舞台とあって、ルワンダ学生は気合十分で、練習にもとても迫力があった。日本人メンバーも、毎朝ホテルの前で練習をし、やる気に満ちていた。

しかし、やはりというか今回の渡航は一筋縄ではいかなかったのだ。

コンサート当日。

私たちが会場に着くとホールの前では、すでに衣装に身を包んだドラム隊のメンバーが力強いドラム演奏をしていた。日本人メンバーも、ルワンダ学生も、これから始まるコンサートへの期待と興奮を隠しきれない様子だった。ホールはほぼ満員。いよいよ、コンサートが始まった。

司会者のラッパー二人が出てきて、会場が沸く。しばらくすると、１５人ほどの学生でドラムの演奏が始まった。使われる太鼓は日本の和太鼓のようにバチで叩かれる。太鼓のリズムの合間にダンスも織り込まれていた。会場と私達はそのパフォーマンスとオリビエの踊る筋肉に酔いしれた。

ひとしきり彼らの演奏が終わり、次に入れ替わり立ち代りで、流行の曲に合わせたﾛﾊﾟｸのパフォーマンスがあった。それが終わると、いよいよ我らがＩＮＤＡＮＧＡＭＵＣＨＯの出番である！！

会場暗転。

「！？」「停電？」「うわー来たよ全く・・・」

（滞在中何度と無く訪れた停電に日本人メンバーもさすがになれた）

すぐに復旧するだろうと、さっきのパフォーマンスについて話をしたり、暗闇の中写真を撮ったりして待った。１０分待った。２０分待った。あれ？復旧しないぞ？

停電開始から４０分程経ったころ、プレジデントによって、コンサートの中止が言い渡された。

どうやら、ホールに繋がる電線を誰かがひっかかって切ったらしい。

東アフリカからエンジニアを呼ばないと直らない・・・。もしかしたらそいつは感電して死んだかもしれない・・・。

気づくとホールの中にあれほどいたお客はすでに居らず。残っていたのは私たちだけであった。舞台に立てなかった彼らのことを思うと残念で仕方が無い。私たちも意気消沈し、その夜はヤケ酒をあおった。（秦）

廃棄物処理場見学

担当者：滝田 知子

1. 訪問日時・場所

日時：8 月 21 日(月)　9:00～13:00

場所：ニャンザ（キガリから車で 30 分程度）

2. 企画目的・訪問の経緯

毎年めまぐるしく成長するキガリ市が直面しつつあるごみ問題。経済背長の影にひそむ、避けては通れない問題を探るため、国連開発計画（UNDP）の環境コンサルタントとして働く三戸俊和さんが携わっている廃棄物最終処理場の見学をさせて頂いた。

三戸俊和さんには、昨年の渡航の際の Enas Coffee factory の見学にもご協力頂いた。

3. 訪問先概要

キガリの南東のニャンザにある廃棄物処理場はキガリ市を見渡せる、見晴らしの良い丘の上に位置していた。この地にありとあらゆるごみが日々運ばれてきている。三戸さんは 2007 年よりこの廃棄物処分場で現場監督をなさっていて、状況改善や、新しい処分場の建設を進めていらっしゃる。

1960 年、70 年代からごみがニャンザの丘に集まり始めた。2005 年にベルギーの NGO が一箇所集積所を作り、キガリ市が管轄した。しかしごみは無秩序に捨てられ、たまったごみはブルドーザーで崖下に落とされ、自然発火が多かった。この事態に政府の要請を受け、UNDP を通し三戸さんの活動は始まった。現在は数年前と比べて煙が無くなり、捨てる場所を日々変えているため、環境は改善されている。

4. 当日活動概要

《スケジュール》

9:00 三戸さんと合流

9:30 ニャンザごみ処理場到着、見学

12:00 見学終了、昼食

三戸俊和さん

《三戸さんのお話》

●ごみが無計画に埋められていたため、土中からガスが発生し時には火事が起きていた。そのため、崖からごみを捨てるのをやめ、今では階段状に捨てている。

ルワンダでは歴史的に、山のてっぺんにごみを集積していた。しかしこれでは、風の影響をもろに受けてガスをコントロールできないし、表面に出てこない浸出水がどこに流れるか分からないため、大変危険である。雨季に大量の雨が降るため、谷ではなく山のてっぺんに捨てる習慣が出来たのかもしれない。ただ、現状では環境が悪いので、2,3 年後キガリ

の西の谷に新たな処理場を作る予定である。

キガリ市は人口密度が高く、かつ人口は増加傾向で空いている土地がないが、こみ捨て場が 10km 以上離れてしまうと輸送コストがかかるため、途中で捨ててしまう、という懸念がある。そのためキガリ市に処理場を設けなくてはならないのだ。

ごみ処理場からの眺めは良い

●この処理場の二大問題は浸出水とガスである。浸出水は昔のごみを掘ると出てくる有害物質が含まれるもので黒色をしている。この浸出水がアカゲラ自然公園の川に流れ込むとナイル川にも流れ込むことになってしまい、危険である。また、運ばれてくるごみの 7 割が生ごみで、分解の際にメタンガスを発生するため火事の危険がある。生ごみは分解で自然に 40 度くらいになるそうだ。以前は火事が起きてもここで働く日雇い従業員は自力で火を消すことができなかったが、今は三戸さんが自費で調達したスコップを使う消し方を教えたため、自力で消すことができるようだ。

ここでは 70 人の日雇い従業員が二交代制で作業をしていた。

●三戸さんがスコップを自費で調達したように、用具の調達問題もある。政府が崩壊しているアフリカの国では汚職が問題だが、そのようなことはルワンダでは見られない。公務員の給料は高く、クリーンな分とても厳しい。担当者は入札後に書類にミスがあると刑務所に送られるため、なるべく署名をしたがらないのだ。そのため、役所との話がなかなか進まない現状がある。

●ブルドーザーはレンタルをしている。これは壊れても修理ができないためだが、レンタル料が高いという問題がある。1 時間動かすのに 250 ドルかかり、日本やアジア諸国と比べても高いという。この計算だと 1 年で 3000 万円くらいかかってしまう。

●崖にごみを捨てることは火事や崖崩れの危険がある。まして火事が起きてもキガリ市には消防車が 2 台しかないのだ。崖崩れを防ぐために階段状に捨てることに変えた。また、ごみの崖の下にはスカベンジャーの人が暮らしている。本来は住んではいけないはずの場所だが、彼らはごみを集め生計を立てていて、ルワンダの中でも生活水準が特に低い人々である。彼らは簡易な家に暮らし、豚を飼っていた。三戸さんのお話によると、屋根がアスベストでできているだろうという。アスベストの問題は、病院や教育機関のような公共施設の屋根でも見られ、アスベストの除去を行う国家計画が進められているが、予算の問題でなかなか難しいようだ。

スカベンジャーの人々の家

●ごみの量は 1 日 120~150 トンで、1 日あたり 4 トントラック 50~60 台分になる。民間業者がごみを管理し収集していて、半数くらいしかこの処理場に捨てられていないという。また、トラックあたりでごみを捨てる時にお金を取っている。大型トラック
1 台 5000 ルワンダフラン、中型トラック 4000 ルワンダフラン、小型トラック 3000　ルワンダフランで回収して、キガリ市の中央銀行口座に収めている。しかしごみ処理場の維持管理費には使われず、他のプロジェクト（教育など）にお金が回っているのが現状である。

また、産業廃棄物のごみはここではまだ捨てられていない。テレビや冷蔵庫といった家電製品は今後増えるだろうが、処分方法がまだ決まっておらず、今後の課題である。

●ニャンザ廃棄物処理場の改善方法として、福岡大学が考案した準好気性の福岡方式が有効と三戸さんは考えている。これは安価で、日本でも導入されていたもので、パイプを埋め立て場に取り込んで、酸素を送り、生ごみを分解させる方法をとる。ルワンダでは 2009 年から導入。

福岡式

●これと対極の方式といえるのが嫌気性のドイツ方式である。生ごみを発酵させてメタンガスを発生させ、それを燃焼して発電に使用する方式だが、コストが高い。例えば福岡式で使用するパイプは現地調達で 25 ドルくらいのものだが、ドイツ方式のパイプは 1 メートル 250 ドルするという。

ドイツ方式パイプの先に手を当てると熱を感じられた。中で生ごみが発酵して、測ると温度は 36.9 度、濃度は約 40%だった。このドイツ方式ではメタンガスの濃度が 50%だと発電に有効とされる。

ドイツの提案によりパイプをテストで設置した。メタンガスによる発電と、クリーン開発メカニズム（京都議定書により、温室効果ガス排出削減が義務づけられている先進国（投資国）と義務を有していない途上国（ホスト国）が共同で排出削減事業を実施し、その削減分を投資国が自国の目標達成に利用できる制度）によって儲けがでるとみられたからだ。メタンガスは熱を吸収して取り込む能力が Co2 の 20 倍なので火をつけて燃やすと 20 分の 1 に温室効果ガスが減るのだ。実際いろんな国で取り組まれている。しかしここではガスの濃度が薄く、量も満たないため、採算が合わず赤字になったため福岡方式での改善を望んだ。

先進国は投資して施設を途上国に作ることが多々あるが、先進国の関与が終わってしまったら、資金面、技術面でも回らなくなってしまうことが多い。しかもこのドイツ方式のパイプもドイツによるフォローアップがされていないため、三戸さんがボランティアで行っているそうだ。途上国自身で回せないものは作らないほうが良い、と三戸さんはおっしゃった。

ドイツ方式

●ルワンダの西に位置するキブ湖の底にメタンガス埋まっていると言われており、それで発電するという珍しい取り組みがある。

すでに発電施設はあるが、メタンガスは容器に閉じ込めにくいから持ち運びが難しい。現在は実験段階で、ストローのようなものを湖にさして、上がってきたメタンガスに火をつけてタービン回して発電をしている。これで 5 メガワット発電しているが、潜在性は 400 メガワットと言われている。電力消費量は 50 メガワットなので余った分を売ることができたら良いビジネスになるだろう。

●生ごみのコンポストの山があった。パイナップルの葉やパッションフルーツの皮で、ジュース工場で絞ったあとに捨てられているようだ。

工場から来ているものは良いが、その他にはペットボトルや紙ごみが混ざっていて、堆肥に使えるが、分別が大変であるし、さらに、本来コンポストは全て万遍なく発酵させなければならない。だがコンポストの発想がルワンダ人にまだなく、農業に効果的であることを理解していないという。

農村でも牛の糞尿を肥料に使うという発想が、最近農業省の働き掛けで浸透してきたという現状のようだ。(ウガンダではすでに使われている。)そのため、土が悪く生産性が低い。この環境要因がブゲセラやギコンゴロでジェノサイドの被害が大きくなった原因の一つだと考えられている。ブゲセラやギコンゴロはルワンダの中でも土地が悪く貧しかったため、人が強制的に移住させられていたこともあったようだ。

●品質管理においてはルワンダ人は厳しいようだ。お店の賞味期限が切れた商品は政府の命令で処分となる。例えば、この廃棄場では小麦粉や牛乳が捨てられていた。しかもただ捨てただけでは放っておくと捨てられた袋を貧しい人が持って帰ってしまうため、処分の際は警察が銃を持って見張りをするそうである。辺りは捨てられた小麦のにおいが漂っていた。

●固形と液体廃棄物も問題である。トイレは水洗式であっても汲み取り式なので、汚泥が溜まったらバキュームカーで吸ってここに捨てている。三戸さんは次の雨季には溢れるだろうと懸念していた。この穴もすでに 4 ヶ所

目で、増える一方という。本来なら穴を浅くして浸透を促進させ、残ったものをコンポストにしたり、本格的に煉瓦で周りを囲ってメタンガス取ったりする方法が有効だが、トイレの問題はどこの途上国でもうまくいってないようだ。ここでお話を聞いている際、汚泥の沼の反対側には、子供の姿が見えた。

●ニャンザの丘では森林伐採も進んでいる。2 年前は森だったところも、ごみが増えているから木を切って敷地を広げてきたそうだ。

《質問》

Q. ルワンダで環境意識が高いわけは何ですか。

A. 1994 年のあと 300 万人の難民がでて、難民キャンプでは敷地を拡げるため、食べていくために森林伐採がたくさんされた。後に土地が良い西側の森に人々が戻ってきた。その際にも住むために人は木を伐り続け、90%の木が伐採されたそうだ。今ではその反省から意識が高まり、ルワンダの植林数はかなり多い。

また、ウムガンダという、毎月最終土曜日に公共清掃の日がある。午前中、各家庭から一人だし、ウムドゥグドゥの単位で清掃が行われる。交通もシャットダウンされ、参加しない家庭には政府から手紙がきて罰金を請求されることもある。これは和解のプロセスでもあるようだ。しかし最近は、農村では大丈夫でもキガリ市内ではうまくいかないケースもあるらしく、いつまで継続するかは分からない。

Q.キヨンベのような農村でもウムガンダは実施されているのだろうか。

A.全国で実施されているはず。

しかし、生活向上するにつれて扱いにくいものが入ってきていて、農村には彼らの力で回せるものと回せないものが入ってきているのも事実。

また、地方都市でも、例えばブタレでは処分場がなく、収集業者も訓練中で、ごみ処理がうまくいっていないようだ。

地方では、元々牛を飼うために人々はばらばらに離れて暮らしていたが、現政府がインフラの普及のために、にウムドゥグドゥを作って移住させるようにした。地方でもごみが集積するようになるから、地方も変えていかなければならない。

しかし、ごみ問題は二の次の問題でもある。以前は虐殺後の対応やマラリア、HIV といった問題が深刻だった。マラリアは蚊帳の普及などにより減ったが、今度は下痢の問題が重大である。水が悪いが煮沸をするお金がないから、人々は生水そのまま飲んでいる。生水は泥などが混ざっている地下水だから、お腹を壊して病院行く子供が多いのだ。

Q.スカベンジャーの人たちとはコミュニケーションを取りますか。

A.スカベンジャーの人はほとんどがキニアルワンダ語しか話せないため、難しい。外国語を話せたとしても英語ではなく、フランス語。

プラスチックのリサイクルを始めた業者がスカベンジャーを雇う計画をしているが、資

金繰りの問題で実現には至っていない。

５．感想

　ルワンダ、特にキガリは急速に経済発展をしていて都市化が進んでいる。ごみ処理場を訪れ、キガリの発展が環境に与える悪影響を目の当たりにした。今後この都市化は地方としにも確実に進むだろう。また、ナクマットというスーパーに行って家電製品や外国製品の多さにとても驚いたと同時に、キガリと農村の格差の激しさを感じた。家電製品やプラスチックといった便利だが扱いにくいものの流入も進むだろう。処理の方法が決まっていないにも関わらず店頭に並ぶ様子を見て、商品を輸入し、売る側の身勝手さに憤りすら感じた。一方で、毎月実施されるウムガンダのシステムは興味深い。清掃の目的のみならず、地域で協力することで、和解への取り組みにもなっている。都市化の進むキガリでもこの習慣が継続されることを願う。

毎日のように様子を見にいき、そしてルワンダの環境問題を動かしていらっしゃると三戸さんの熱意に感心したと共に、訪問を快く受け入れ、多くのことを教えてくださったことに改めて感謝申し上げたい。

（滝田）

コラム　消えるペン

ドンベー。彼は、JRYC ルワンダの副代表であり、大学ダンスグループのパートリーダーでもある。そんな彼はいつもフル充電。移動中のバスで彼の隣になると、うとうとすることすらできない。ラジオから発せられる曲を数倍でかく、数倍いい声で熱唱。しかも元気な手拍子がもれなくついており、それは張り手となり隣人を襲う。

そんなドンベーと初めて会った時のこと。彼にペンを貸した。ルワンダ人は筆箱や筆記用具を整理して持ち歩くという習慣はあまりないようである。そのペンはとても大事にしていたのだが、今となっては行方知れず。次の日、またペンを貸してくれと言う。ためらいはしたが、“無くなってもいい”ペンを渡す。案の定、無くなった。

さらに次の日、ドンベーのＹシャツの胸ポケットには、何事もなかったかのようにスッと私のペンがぶら下がっていた。私は、「そのペン借りてもいい？」と何食わぬ顔で奪還を試みる。このまま借りパク（貸したものを取り返しているだけ）して切り抜けよう。しかし、休憩の時間に私の所に来て「ちょっとペンいいかい」といってメモを書いた後に、私のペンは再びドンベーのＹシャツの胸ポケットに帰って行った。

結局、シャープペンシル１本、ボールペン２本が行方知らずになってしまった。だが、それでルワンダ人の明るくずぼらな一面を楽しめたと思えば安いものである。（嶋田）

JICA 在外事業訪問

担当者：滝田 知子

1. 訪問日時・場所

日時：8 月 21 日（日） 14:00～16:30

場所：キガリ市内

2. 企画目的・訪問の経緯

JICA の在外事業プロジェクトの一つである、『障害を持つ元戦闘員と障害者の社会復帰のための技能訓練及び就労支援プロジェクト』（以下、ECOPD）が今回の訪問先である。実際に社会復帰を果たした方々が設立したコーペラティブ（事業体）の訪問を通し、ルワンダにおいて元戦闘員がどのように社会復帰を果たしているのかを学びたかった、また JICA の具体的な活動内容を見てみたかったので今回の訪問を依頼した。

3. 訪問先概要

ECOPD は JICA の技術協力プロジェクトの一つで、技能訓練に参加した障害を持つ元戦闘員と障害者の就労の実現を目標とする。

実施期間は、2011 年 3 月 10 日～2014 年 3 月 9 日。

2005 年 12 月から 3 年間、『障害を持つ除隊兵士の社会復帰のための技能訓練プロジェクト』が実施され、2009 年には上述プロジェクトのフォローアップ協力も実施された。この際 925 人の障害を持つ元戦闘員が技能訓練を修了し、約 75%の訓練修了生が習得した技能を用いて仕事を行っていると調査に回答した。

4. 当日活動概要

14 時から 1 時間ほど、JICA ルワンダ事務所にて専門家の妹尾隆児さんにプロジェクトのブリーフィングをして頂いた。その後、キガリ市内にある、コーペラティブ（障害を持つ元戦闘員が設立した事業体）2 社を妹尾専門家、ルワンダ人コーディネーターBahoze Jean Floribert 氏同行のもと訪問した。今回訪問したコーペラティブは前身のプロジェクトで技能訓練を受けた後結成されたもので、1 社目が携帯電話等電気機器修理会社、2 社目がパソコン教室だった。

① プロジェクトに関するブリーフィング

《プロジェクト概要》

・ECOPD は障害を持つ元戦闘員と障害者を対象に、就労に必要な技術訓練をし、就労支援、社会復帰支援を行うものである。JICA のプロジェクトはルワンダ政府と協力して行われ、このプロジェクトはルワンダ動員解除・社会復帰委員会（RDRC）、地方自治省、教育省をカウンターパートとしている。一言で元戦闘員といっても様々な組織に属していた人（たとえば今の政府と直接関係のある元愛国戦線、旧政府軍（９４年以前の政府関係者）、民兵、旧ザイール兵、等）がいるが、このプロジェクトでは彼らを分け隔てなく支援している。現在の訓練者数 275 名。

・2005 年～2008 年の前身のプロジェクトでは対象は除隊兵士に絞られていた。これはジェノサイドから 10 年たっても未だ彼らの社会復帰がなされていなかったからである。（義足の支給やリハビリの面で支援はしたが、就労支援まではできていなかった。）

・ルワンダ国内の障害者支援の取り組みとしては、1994 年のジェノサイド後、1997 年に RDRC が設立され、10 年後の 2007 年に障害者支援のための法律が制定された。しかしこの法律は障害者の就労を義務付けるようなも

のではない。

この法律の制定には対人地雷やジェノサイドのよって手足を失った一般人が多くいるという背景がある。ルワンダには障害者の認定基準が無いため、正確な障害者数のデータも無い。しかしオランダが行った調査によるとその数は 50 万に上ると見られ、一説では 80 万人ともいわれている。

・目標：技能訓練に参加した障害を持つ元戦闘員と障害者の就労の実現。さらに、長期目標として障害者の社会参加、平和構築、経済的自立が掲げられている。

・成果：3 つの柱で構成され、環境整備、技能訓練、そして就労支援サービスの発展がある。

1. 技能訓練の環境整備、ニーズ調査の実施。関係機関の人的環境（受け入れ経験の無い訓練センターの人材育成）、物理的環境（訓練センターのバリアフリー化工事）の整備を行う。
   ニーズ調査とは、プロジェクトで訓練希望者がどういうコース受けたいかの調査（大工、理髪 etc..）をし、コースの選定をするもの。
2. 現在ルワンダ国内のキガリ、キバリ、ニャンザ、ルワブイエで事業が展開しており、今後さらに展開予定である。訓練センターの 1 クラスには 20-30 人の生徒が所属し、コースの種類は美容理容、溶接、調理、縫製、等多岐に渡る。訓練生となる最低限の条件は読み書きができること。
3. 訓練後の就労支援方法として、組合の結成がある。2004 年のデータでは、従業員数 10 人以上の民間企業はわずか 250 社で、ルワンダ国内の企業は数が限られていて就職は困難である。またこれら企業はキガリに集中しているため、このプロジェクトでは特にキガリではなく彼らの地元での組合の結成を支援している。
   対象となる人々は貧しい人が多く、いきなり組合を結成することは困難なため、最低限事業ができるようスターターキットを配布する。たとえば大工に鉋を、縫製従事者にはミシンを、といった具合である。そして組合結成後も巡回指導を実施しフォローアップをしている。

《プロジェクトに関する質問》

Q1 訓練参加者はどのように募るか。

A1 全国放送・各コミュニティのラジオのアナウンスで募る。元戦闘員の場合は RDRC が名簿を持っていて、誰が障害を持っているか把握しているから RDRC がその人たちに呼びかける。一般障害者に関しては、ラジオ放送を聞いてもらうか、研修をやる自治体に情報提供をし、担当者が人々に情報を流す。

Q2 訓練生の受け入れ条件はあるか。

A2 読み書きができることを条件に自発的に訓練を受けたいと来た人を受け入れる。すでに職がある人は受け入れない。大学に行くような人々は外れるし、特に障害ある人の中でも貧困状態にある人たち対象なため、その時点で数は全体母数からは絞られている。

Q3 読み書きができることが条件だが、それは英語か。

Q3 現状は少し複雑で、政府は建前上英語で行うと言っているが、訓練生は英語ができない。授業でキニアルワンダ語に訳す必要があるが英語もキニアルワンダ語もできる講師もなかなかいない。だから基本的には

フランス語のテキストを先生は使用し（教科書は配られない）、それを現場でキニアルワンダ語に訳す。現地語に技術用語が無い場合が多く、その場合はどうしてもフランス語が混ざる。

Q4 訓練生のジェンダーバランスに配慮するか。

A4 元戦闘員の女性は１割に満たない。前プロジェクトだと 1000 人の研修生のうち女性は３人。元戦闘員に女性は少ないが、一般障害者に占める割合は半分近く。

Q5 参加費用はあるか。

A5 訓練生の参加費用は無料。逆に訓練手当を訓練がある日に限り、交通費と昼食代として１日１５００RWF を支給する。

Q6 ルワンダではそのような配当金を払うのは一般的か。

A6 現実的にはそういう現状。バスに乗って遠方から来る訓練生もいるため。

Q7 宿泊施設は訓練センターに設けているか。

A7 一部特別に設けている施設はあるがその他は無い。遠方から来る人は訓練施設近くの親戚の家に泊まったり、訓練生同士で安い部屋を借りたりする例もある。

Q8 障害者、元戦闘員にメンタルケアも行うか。

A8 メンタルケアはすでに済んでいる前提。元戦闘員はこの訓練以前に、一般社会で生きるのに必要な市民教育、識字教育、メンタルケアがそこでなされる。一般の被害者にも政府がそういうケアをしているが 100%行き届いているわけではないのが現状ではある。

Q9 プロジェクト修了後に資格の証明となるライセンスのようなものは授与するか。

A9 教育省の下に訓練センターを統括する機関があり、そこが発行している。

Q10 プロジェクト終了後の長期的なフォローアップはどのようになされる予定か。

A10 現在は巡回、電話調査でフォローアップを行っている。しかし、元戦闘員を支援する政府機関はあるけれど、一般人の障害者の支援を誰がやるのかという問題がある。さらに、協同組合が永続的に続くかも問題。プロジェクト経験者は例え組合が潰れたとして職を失ってもすぐ次の仕事を見つけるための技術をもつことが必要と認識している。障害者の社会参加をサポートすることがこのプロジェクト。組合のマーケティングやビジネスデベロップメントはまた別の機関が担う仕事。JICA はそういう機関を紹介することはある。

Q11 今後プロジェクトが終了し JICA が引き上げたら就労支援施設はルワンダ人だけで回るか。

A11 公立や NGO のセンターもあるから完全に休業することはないだろう。ただ障害者への技能研修は難しいかもしれない。政府が訓練センターを拡大し、生徒数を倍にする計画を掲げているが、全般的にどの事業もドナーの介在なしではまだ難しい。

Q12 全て日本のお金だけで事業は行われているか。

A12 定められた ODA の額は相当使われているがルワンダ政府もお金を出している。

Q13 過去のプロジェクトから対象を拡大する形で再開した理由はなにか。

A13 ルワンダ政府の要請と日本の外務省の重点的分野が合致したから、また、前のプロジェクトである程度の成果がみられたから。

Q14 施設のバリアフリーが進んでも一般社会で進まないと意味が無いのではないのか。

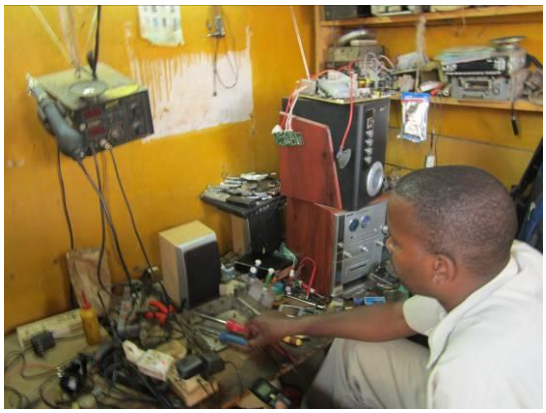
A14 どこかから始めていかなければ変わらない。だから技能訓練センターから始めた。東洋大建築学科の方を招いて、公共工事にかかわる政府機関の人にセミナーを開いている。国家予算に限りがあり即時着工は難しいかもしれないが。

Q15 このプロジェクトの目的の一つで共生社会づくり、平和構築があるが具体的にはなにか。

A15 授業内容に平和構築のようなものがあるわけではなく、加害・被害の立場を乗り越えて協力して訓練を受けてもらったり、両者が混ざってコーペラティブを作ったりするよう働きかけている。
一緒になって収入を増やすことで、コミュニティも良くなったと実感してもらっている。

②コーペラティブ 2 社訪問

《1 社目：携帯電話等電気機器修理会社》



私たちが訪れた時には 2 人の元戦闘員が小さな小屋で働いていた。今回 Celestin Hakorimana さん、35 歳にインタビューした。戦闘員の時に頭に傷を負った。彼は 1 年間 JICA の電子機器に関する訓練を受けてからコーペラティブを作る訓練を受けた後コーペラティブを結成した。それ以来 5 年間ここで働いている。

（Celestin さん）

インタビュー

Q1 ここでは何人が働いているか。

A1 従業員は 10 人で、ローテンションで働いている。

Q2 稼ぎはいくらくらいか。

A2 携帯電話、テレビ、ラジオ、DVD プレイヤーの修理で 1 日に 5000RWF～10000RWF くらい。

Q3 困難なことは何か。

A3 税金が高い。1 年間にディストリクトに 5000RWF、政府に 40000RWF、建物に 30000RWF を払っている。また政府がキガリ市を綺麗な建物だけにしようとしており、建物が壊されてしまうかもしれない。

Q4 今後のプランはどんなものか。

A4 建物を拡張したい。それに日本、中国から修理用備品を輸入したい。

Q5 現在備品はどこから得ているのか。

A5 中国やドバイに行くビジネスマンから買い付けている。

Q6 あなたは幸せですか。

A6 幸せです。

（右側の建物が今回訪れたコーペラティブ）

《2 社目：パソコン教室》

訪れると Donath Nyaruaya さん、49 歳が働いていた。今回インタビューした元戦闘員の Donath さんは 2007 年に JICA のプロジェクトでコンピューターサイエンス、ハードウェア、ソフトウェア、ネットワーキングについて学んだ。当時最新式のパソコンがスターターキットとして JICA から支給され、コーペラティブ設立直後はインターネットカフェとしてスタートしたが、その後インターネットの接続に問題があり現在はパソコン教室として事業を進めている。

（Donath さん）

インタビュー

Q1 何人の人がここで働いているか。

A1 2 人。

Q2 稼ぎはいくらくらいか。

A2 インターネットの接続が無くなって以来十分な収入を得ていない。今はコミュニティの人々にタイピングを教えているくらい。

Q3 なぜインターネットは止まったか。

A2 回線速度が遅く、客がそれを好まなかった。コンピューターが古くなり、ウィルスの問題も出てきた。

Q4 どのような人が客として来るか。

A4 老若男女、さまざまな人がコミュニティから来る。

Q5 新しいコンピューターが事業に必要なようだが、手に入れるためのプランはあるか。

A5 簡単なことではない。サポートがあれば良いのだが。

Q6 新しいコンピューター無しでビジネスをどう広げる予定か。今後のプランは。

A6 今のままでは広げられない。この地域にインターネットカフェは無いので新しいコンピューターとインターネット接続があれば容易だろう。JICA の訓練で習ったことを生かして冷蔵庫の修理もしている。

教室と修理の両方を続けるつもりでいる。

（建物の外には冷蔵庫が並んでいた）

Q7 夢はなにか。

A7 新しいコンピューターを手に入れて事業を拡大すること。

Q8 JICA の訓練支援とその後のサポートをどう思うか。

A8 とても良いプロジェクトだと思う。ただ、問題はいずれコンピューターが古くなってしまうことだ。

Q9 家族はいるか。

A9 妻と 10 人の子供がいる。

（教室の中の様子）

５．感想

コーペラティブを 2 社訪問し、そこで受けた印象は異なった。大量の電気機器の修理の備品に囲まれ、大人 2 人が入ればいっぱい、という決して広いとはいえない仕事場だが、それでもこの 5 年間の仕事に満足しているといった表情をしていた Celestin さん。古いコンピューター、インターネットが繋がらない、という困難を抱えるも、JICA で学んだことを生かし修理も手がける Donath さん。どちらも JICA の就労支援を通し社会復帰を果たしている点に変わりは無い。だが Donath さんのインタビューで繰り返し聞かれた「新しいコンピューターの支援を受けられれば」、の言葉に被援助国の援助慣れや支援の難しさを少なからず感じた自分がいた。今年 3 月に ECOPD は始まったばかり。元戦闘員だけでなく一般の障害者の方も支援対象になり、障害者の就労促進だけでなく、ジェノサイドの被害者・加害者間の平和構築にも繋がるプロジェクトの今後の展開を気にかけようと思う。（滝田）

対象が元戦闘員に限られていた 2008 年までの事業から、「障害を持つ元戦闘員と障害者の社会復帰のための技能訓練及び就労支援プロジェクト（以下、ECOPD）」として、対象枠を拡大し今年から新たな事業がスタートした。ECOPD によって得た技術を実際に用いて仕事をする人への聞き取りのなかで特に印象的だった二点を述べたい。

一つは、家族に関する質問へのパソコン教室を開く男性の反応。子どもが 10 人と妻がいるそうで、「収入はごくわずか」、「（プロジェクトで支給された）パソコンはもう古く、技術

向上の制約になっている」、などと話すときの暗くかたい表情とうってかわり、家族の話のときには緊張が和らいだように感じられた。もう一つは、訪ねた二人が共通して、今ある技術を活かし将来的に顧客を増やしたいと語ったこと。しかし、国の方針で都市整備が進められているためこうした小さな店は立ち退きを迫られる傾向にある。そのような場合にサポートがどうはかられるかということと、修了生自身の自発的なアイデアを引き出し発展させることが長期的な視点に立った場合必要になるのではないかと考えた。JICA 職員や、政府機関で働いたこともあり通訳をしてくれた人物からは、このプロジェクトで習得した技術をもって企業に就職することや国際市場に進出する可能性は低いにしても、まずは経済的な自立が実現し、生活に変化が起きたことは評価できるという意見があった。（山崎）

コラム　おいしいパッションフルーツジュースの作りかた

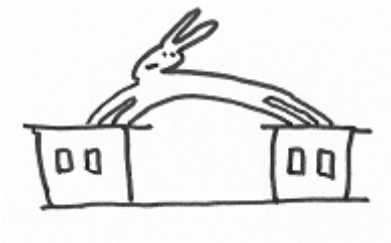
学生会議も中盤を迎えたころ、私たちはブタレで休日をもらった。1 日なんにもしなくていい、そんなのんびりとした日に、突然代表のアルフレッドが彼の部屋に私たちを招待してくれた。ミーハーな私たちは昼寝のあとの閉じかかった目をこすりこすり、NUR から徒歩 5 分ほどの彼の部屋に向かった。

私たちを迎えてくれたのは、アルフレッドご自慢の日の丸の旗と、2 人のルームメートだった。薄暗い部屋の中で、何を狙ったのか、メンバーのひとりがテーブルにのっかっていたベビーバナナに目を付けた。こころやさしい住人たちは、彼にベビーバナナを分けてくれただけでなく、あらゆる食糧を出してきて、私たち全員にふるまってくれたのである。バナナ、ゆで卵に塩、そしてパッションフルーツ。特にパッションフルーツは、日本人の私たちにとっては目新しい果物である。実物がこんなにぶつぶつしているとは思っていなかった。ノリがいいアイバンは、アルフレッドのルームメイトであり、随一の親友でもある。陽気に「JRYC の資金調達」という深刻な話題を持ちかけながら、彼は意気揚々と掌でナイフをつかってパッションフルーツを縦に切り始めた。パッションフルーツジュースづくりの始まりである。まず切ったフルーツの種と果実(しかしほとんどが種)をスプーンを使ってくりぬき、こしきで濾し始めた。ボトルの 3 分の 1 くらい、濃厚な原液がたまる。そこに煮沸した(と言っていた)水を注ぎ、大量の砂糖を加えれば、できあがり。これがルワンダ風パッションフルーツジュース!!これがとても濃厚、まろやかでおいしい。きんきんに冷えてなくても、氷がはいってなくても、今まで飲んだパッションフルーツジュースの中で一番おいしかった。新鮮だったから、砂糖がいっぱい入っていたから、理由はたくさんあるかもしれない。でも一番理由は、ルワンダ人のホスピタリティだと強く感じた!!とりあえず水煮沸説は真実だったのか、このジュースには誰も当たりませんでした。よかったよかった。アルフレッド、そしてルームメイトの 2 人、どうもありがとうございました。(久保)

【第 4 章】

参加メンバー感想

1. 海原早紀 早稲田大学文化構想学部 4 年……..104
2. 山崎暢子 関西学院大学法学部 3 年…….....106
3. 乾 敏恵 同志社大学大学院 1 年.....108
4. 秦 七愛 多摩美術大学美術学部工芸科 3 年.....110
5. 久保唯香 早稲田大学文化構想学部 2 年.....112
6. 品川正之介 早稲田大学教育学部 2 年.....114
7. 嶋田康平 早稲田大学法学部 2 年.....120
8. 滝田知子 慶應義塾大学法学部 2 年.....122
9. 永井陽右 早稲田大学教育学部 1 年.....124



海原早紀

早稲田大学文化構想学部４年

今回、私は去年に引き続きルワンダ渡航が二回目だった。二回目だからといって、決して「慣れた」わけではないが、去年より落ち着いてルワンダについて考えることができたと感じる。今回の渡航を通して考えたのは、漠然と「ルワンダ人として生きる」のはどういう感じなのだろう、ということだ。

一つ目に、ルワンダ社会の中にある「貧富の差」についてである。

今回は学生会議の活動を超えて、目に見えるような社会貢献活動にチャレンジしようということで、キヨンベ村やトゥワの村に団体で主催したコンサートの収益などの寄付をした。発展途上の社会に生きる学生は、恵まれない人々のことを常に考えていなければならない、という彼らの訴えに寄り添った形だった。ルワンダで暮らしていれば街でも物乞いやストリートチルドレンを多く見かけるし、日常的に恵まれない人々のことを意識せずにはいられないという点で日本に住む私たちとは違う。「目の前にいる人を助けたい」という気持ちが発生するのは、ルワンダでは自然だと思った。

しかし助けたいとは思っていても、ルワンダの上層階級はそれなりに贅沢をしていることも確かだ。今回ルワンダ国立大学の卒業パーティーに招待してもらったのだが、みんな綺麗なドレスやスーツを着て、大きなスピーカーを使って音楽を流し、ビールが振舞われ、夜遅くまで踊り続ける。私もとても楽しかったので文句を言うつもりは毛頭ない。ただ、考えてしまったのだ。「このパーティーをもうちょっと質素なものにしたらあと何人のトゥワの人々の食料が買えただろう？」

娯楽にはたっぷりお金を使うのと同時に、貧しい人を助けたいと願うこの矛盾を抱えるルワンダの人々はどういう気持ちなのだろう、とずっと考えていた。しかし、ある時気がついたのはこれが決してルワンダに限定される話ではないということだった。日本にだって恵まれない人は少なからずいるのにも関わらず、私は日常的に自分の娯楽のためにたくさんのお金を使い、彼らのことは考えていない。

結局「恵まれない人も助けたいが、自分も大事」という人間のエゴはルワンダも日本も一緒だった。あまりに基本的なところを再認識したようだが、「ルワンダの子は発展途上の社会に住む人間、私たち日本人とは考え方が違う」という想定は少し行き過ぎていたかもしれない

二つ目に「歴史の風化」について。

ギコンゴロメモリアルへ去年に引き続き訪問した。ここでは学校に多くの人が追い詰められ虐殺されたのだが、ミイラ化した遺体がそのまま教室に展示してある。

去年私は、犠牲者の無数の遺体を見てショックを受け、さらにはルワンダメンバーに慰められ「強くなれ」と言われて彼らのたくましさに衝撃を受けるという、一生忘れられない経験をした。しかし、今回はスケジュール

に時間が少なかったという事情もあり、ルワンダ人は私たちに何かを説明したり、気持ちを語ってくれる暇もなく、「はい、次！次！」と言わんばかりに教室を回った。さらに、私はユジーンに「早紀は二年目だし、慣れたね。去年はあんなに泣いていたじゃないか！」と笑顔で言われた。

同行してくれたルワンダメンバーの雰囲気があまりに違ったので、私はびっくりした。その理由として、同行した人が去年と違い、ジェノサイド当時海外で過ごしていたなど、実際に虐殺を見ていない人たちが多かったことが挙げられるだろう。それにしても、去年の重々しい雰囲気の見学の方が、そこで起こったことの悲惨さが痛烈に伝わってきた。

しかし、ここである光景を思い出した。それは第 5 回の学生会議（2010 年 1 月）で広島に行った際に原爆ドームの前で写真を撮ったときのことだ。日本人ルワンダ人みんなで「ピース！」で写真を撮ったのだが、そのとき日本人の一年生が「ジェノサイドメモリアル前で笑顔で写真を撮るなんてありえないんだから、ここでピースなんかしたらダメだよ」と言った。当時私は「集合写真は楽しく撮るものだ」くらいに考え、彼の発言を無視していた。

しかし今年、私はルワンダのメモリアルでの軽率な言動をとるルワンダ人に不満を感じていた。自国最大の惨劇の地で笑顔で写真を撮れる私が、そんなことを考えるのはおかしいと思った。ルワンダをなぜか特別扱いするのだろうか。

教室の見学の後に今年新しく出来たジェノサイド記念館（写真やビデオの展示）を見せてもらった。展示の途中、床に大きな穴が空いている部屋があったのだが、聞いてみるとそこにあの遺体達を移す計画だそうだ。今は遺体が外の空気にさらされているので、劣化防止という意味では必要な措置だ。しかし、正直ちょっと残念に思った。あの教室に遺体がありのままに置かれている状態、あの臭いや、「同じ部屋にいる」感覚がもう体験できなくなる。そして、きれいな展示物としてガラスに覆われるその作業が、この出来事を「過去」のものとしてとして箱にしまっているような気がした。

ジェノサイドから早くも１７年が経っている。ルワンダ人の１７歳以下の子どもたちは、ジェノサイドをその目で実際に見ていない計算になるのだが、ルワンダの高校生が日本人と同じようにあのメモリアルを見学するのを、私は想像できなかった。

遺体が箱にしまわれ、ルワンダの若者はジェノサイドを「歴史」として勉強するようになる。いつの日かメモリアルの前で「ピース」で集合写真を撮るような日が来るのだろうか？

年月が経てば記憶が薄れて行くのは避けられないことであり、「過去」としてしっかり整理しておくことは大切な作業である。どうすれば歴史をしっかり語り継げるのか私にはまだわからないが、ルワンダの歴史をどう伝えていきたいのかルワンダの人々に考えて欲しいと思った。今回の学生会議で私は歴史認識について取り上げ、まさにこのテーマについてディスカッションした。皆自分のジェノサイドの体験を後世に伝えていきたいという意見が多く、自らのストーリーを語る勇気がある彼らに感銘を受けた。今後も日本招致の企画で、このテーマについて深めていきたいと思う。

以上の二点について述べてみたが、どちら

も「ルワンダ人として生きる」について考えた結果、日本と自分について考えることとなった。学生会議の活動は、いつも私に自分を振り返るチャンスを与えてくれる。

これだけの体験ができたのも、渡航の企画を組み、無事にやり遂げたメンバーの頑張りがあったからだ。試験終了日に日本を出国したり、現地で様々なプログラムがキャンセルされたり、数名が食中りに苦しんだり、激動の１７日間であった。

全員のメンバーが渡航期間中目一杯動いたと思うが、実際のところ「これで大満足！」という者は少ないのではないだろうか？もっと知りたい、やり残したことがある、と感じるのであれば、それを後悔するのではなく次につなげる原動力にして欲しいと思う。

最後に、顧問の小峯先生、渡航準備でお世話になったWAVOCの皆様、アドバイスをくれたOB・OG、現地で活躍するたくましい日本人の方々、そしてルワンダ側メンバーの代表アルフレッド君に最大級のお礼を言いたい。そして、日本ルワンダ学生会議はこれからも活動の継続、活動の広がりを見せることが期待されるが、これからも是非注目して見守っていただくことをお願いしたい。

山崎 暢子

関西学院大学法学部３年

夜の帳が下りると肌寒いほどのルワンダの空にも星が輝いていた。首都キガリから3~4時間車を走らせた所に位置する村には平屋が点在し、丘の上にある学校のまわりをヤギやウシが通りすぎる。農業が国の基幹産業であり、バナナの木があちこちに生え茶畑も広がるゆえそうした景色は決して珍しくないとしても、高層ビルが立ち並び排気ガスのたちこめるキガリ市街と比べるといくらか牧歌的だといいたくなる(ちなみにキガリにもウシが居た)。都市を離れるにつれ街灯はまばらになり、陽が沈めばこちらの車と対向車のヘッドライトの明かりが頼りになる。村からキガリにある宿への帰り道、窓をあけて冷たい風にうたれていると、ある考えが頭をよぎった―この辺りにも遺体が横たわっていたのだろうか―。

虐殺をきっかけにルワンダのことを知ったものだから、現地に着くまでも着いてからも日本に帰ってきてからも考えてしまうし、さらにいえばその地の人に「虐殺の影」を見出そうとしていたのもまた確かだった。「17年経った今も」、あるいは「17年しか経っていない」、そんなフレーズがループして、近づけそうなことに近づけないとも感じた。もちろんルワンダの側面はほかに沢山あって、そ

の沢山あるなかの、この第6回本会議を通して見られたうちの少しでも、この報告書が反映できていれば幸いです。
ルワンダ航空の機内から「千の丘」を初めて目にしたとき、ポツポツと灯る家々の明かりが星のようにも見え、まるで天地が反転しているような錯覚さえしたが、それらの光は停電で消えてしまうことがしばしばだった。それに引き換え自然の明かりは今も昔もそこにあり、そしてこれからもこの地を照らし続けていくのだろう。遥か昔の光が今になってやっと見えていて、今まさに生まれた光が見えるのはずっと先になる、そんなことを思うと、こうした草の根の交流も、たとえ細々とでも絶やすことなく紡がれていくことで、後の糧となってくるのかもしれないなどと考えた。「学生」というスパンを越えていつか振り返るとき、この渡航はまた違った意味を持ってくるだろう。どこかで誰かが感じ取ったことと同じようなことを、私は遅れてたまたまこの夏ルワンダで体感しただけかもしれないし、次の学生会議でルワンダを訪れる人は全く違うことを感じ考えるのかもしれない。当たり前だと一蹴されてしまうようなことだが、それを実感として確認できたことは私にとって収穫である。同じ場所で同じ様子や同じ話を見聞きしているようでも、各自でとらえかたが少しずつ、時には大きく違うのであって、なんでやねんと思うならそれは何故かと考えたことが、何とかわかった気にさせてくれているのだと思う。
「アフリカ」「ルワンダ」「アジア」「日本」「関東」「関西」「ルワンダ人」「日本人」…くくりが必要になるのも確かだし、くくれることとくくれないこととの間で行ったり来たりしなければならないとも感じた。だから、といっていいのだろうか、何故そのように考えるのかと問いかけて、こうだからだよと答えてもらうという対話の繰り返しを通して共感できるとき、ようやく交流のスタートラインに立てる気がした。
初めて関西から渡航者が出るということで勇んで飛び出したものの、私自身の至らなさには目に余るものがあった。今後の渡航に限らず、ほかの人が同じような思いをしないよう引き継ぎを工夫していきたい。
最後になってしまいましたが、日程調整に奔走してくれた久保さんはじめ、様々な面で皆をサポートしてくれた代表の海原さん、会議全体をリードしてくれた品川くん、心配りの滝田さん、的確な指摘をくれる嶋田くん、多彩な秦さん、“Be Friendly”を貫く永井くん、関西からともに渡航し、ルワンダが大好きになった乾さん、そして、受け入れてくれた全てのルワンダメンバー、現地で出会った人々にあらためて、ありがとうございました。

乾 敏恵

同志社大学大学院

グローバル・スタディーズ研究科修士１年

初めてのアフリカ、初めてのルワンダ。すべてが初めての渡航となった。私は大学院生として唯一の参加であった。さらに、今年（2011 年）4 月から日本ルワンダ学生会議（以下 JRYC）に参加しているため、関東、そしてルワンダにはどんなメンバーがいるのか、今まで JRYC がどのような歴史をたどってきたのか、しっかり理解できていなかった面があった。そんな不安を抱えながら渡航した。

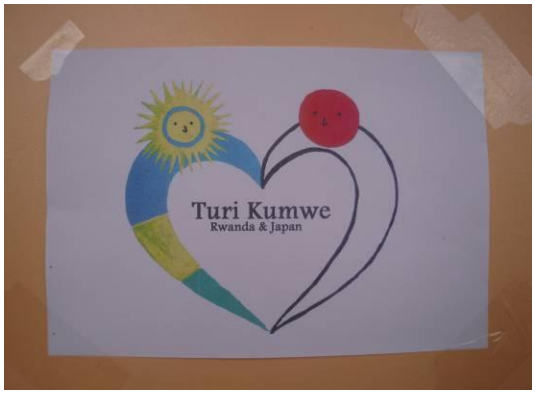
しかし、現地に着くと、そんな不安は消えていった。いろいろ分からないことがあっても、皆丁寧に教えてくれ、本当に感謝している。

さて、今回の第 6 回本会議では、さまざまな場所を訪問し、学生会議を行った。私は、学校の期末テストの関係上、先発隊とは、約 1 週間遅れての参加になった。しかし、ルワンダ、日本側のメンバーの配慮で、先発隊が訪問していた所にも、足を運ぶことが出来た。そのひとつに、ギコンゴロのムランビジェノサイドメモリアルがある。ここを訪問する前に、キガリのギソジのメモリアルを訪れ、同じようなものだと想像していた。しかし、実際に行くと、恐怖と衝撃がはしった。今まで、ジェノサイドについて、書籍、映画、動画などを通して学んでいるつもりになっていた。しかし、このメモリアルでは体中に電気が流れたかのような衝撃があった。何部屋にも分かれて展示されている遺体とその臭い。ジェノサイド後 17 年も経過しているが、まだ読み取ることの出来る遺体の各表情。自分の子どもを抱いたまま亡くなった母親。結婚指輪がまだ付けられたままの女性。頭蓋骨が陥没した子ども。衣服を着ていない男性の巨体。数え切れないほどの頭蓋骨。正直、直視するのが怖かった。しかし、これが現実世界で起きた出来ごとであって、絶対に風化させてはいけない歴史のひとつである。もう、二度と世界中でジェノサイドを繰り返してはならないと、今まで以上に強く思った。そして、そのためには自分には何が出来るのだろう、と考えさせられた。

ルワンダに来て、ジェノサイドというネガティブな側面だけではなく、そんなネガティブな面をカバーするくらい素敵な人々、風景、食べ物などさまざまなものに巡り会うことが出来た。特に、私の人生にとって、人との巡り合いが一番大きいことではないだろうか。町の中、食事をしたバー、ホテル、イソコ（市場）、スーパーマーケットなど私が行くところすべてにおいて、多くの素敵なルワンダの人々と出会うことが出来た。さらに、ルワンダが千の丘の国と言われる意味が分かった風景。見渡す限り丘が続く。アガトゴ、サモサ、アマンダージ、ブロシェット、チップス、サンバサ、ティラピアなどといった美味しい食べ物。ルワンダで目にするもの、口にするもの、香り、音、すべてが新鮮で、目新しいものばかりで、そんなルワンダが今回

の渡航で大好きになった。

さらに、私が出会ったもののひとつで、ルワンダの言葉・キニヤルワンダがある。私が英語でもフランス語でもなく、キニヤルワンダで話しかけた時、ルワンダ人は驚き、すごく嬉しそうな笑顔になった。私もそれがすごく嬉しくて、キニヤルワンダを習得しようとルワンダ人や現地で出会った日本人の方に教えてもらった。そのなかで、「Turi Kumwe」（トリクムウェ）という言葉がある。これは、we are together という意味である。



この写真は、東日本大震災が発生し、半年が経った時にルワンダで行われた震災追悼のイベントで私が撮ったものである。とても素敵だと思ったので紹介したい。日本から１万2000 キロも遠く離れたルワンダでも日本を応援してくださっている。感謝したい。Murakoze cyane(ありがとうございます)。

私は、今回の渡航を通して、ルワンダが本当に大好きだと気付いた。日本に帰国してからも、ついついルワンダのことを考えてしまう。学校の研究室でルワンダの話をすると、「アフリカ病」だと診断された。（笑）アフリカ病は、アフリカにどっぷりはまってしまい、また行きたくなるというものらしい。私のリサーチフィールドは、ルワンダである。これから、修士論文の構成を考えていくにあたり、私はルワンダのネガティブな面ではなく、ポジティブな面を前面に押し出し、日本の１人でも多くの人にルワンダの魅力を伝えていけるよう、努力していきたい。今回の渡航に関して、私に関わったすべての方に、感謝申し上げたい。本当にありがとうございました。

秦 七愛

多摩美術大学美術学部工芸科３年

私が最初にルワンダに行きたいと思ったのは二年前。日本でインダンガムチョのパフォーマンスをみたからだった。去年の招致の際、伝統舞踏の表現にのせて、平和構築を行おうという彼らの目的を知った。それに私はとても驚いた。「アフリカの音楽をやっているのにどうしてアフリカのことをもっと知ろうとしないんだ？」というルワンダ学生の言葉と共に、心の隅っこにルワンダという遠い土地がチラチラするようになった。ルワンダへの思いは日に日に増すばかりであった。そんな中、私は本当に良いタイミングで、ルワンダへの渡航のチャンスをもらうことが出来た。ただの観光ではなく、ＪＲＹＣとして行けて幸運だったと思う。むこうのルワンダ学生のお陰で、限りなく生のルワンダを見ることが出来たからだ。ルワンダの抱える現状を肌で感じられたのはとても貴重だった。そして、異なった文化をもつ人々とのコミュニケーションはとても新鮮だった。

私は、ルワンダ語はちろんわからないし、英語も本当にお粗末。（他のメンバーも予想だにしなかったレベルだったと思う）そんな中で、フランシスやアルフレッドにルワンダ語を習った。といっても、すごくちょっとだけ。だけど、それでカフェの女の子笑顔が素敵なエンジェルと仲良くなった。（今でも深夜に電話が掛かってくる）それから、謎の感覚が働くようになった。最後の３日くらいは、彼女のケニアルワンダ語で言っている言葉や、宿舎の門番のおじさんの言葉が言ってることわかんないんだけど、意味がわかるという謎の体験をした。（正しくくみ取れたかはわからないけども。）それは、顔の表情だったり、声の感じだったり、ジェスチャーだったりからの印象だったのかもしれないけれど、言葉以外のコミュニケーションをとったというのは、物を作るとか絵を描くとかそういうものに近い気がした。前半は周りの環境に付いていくのがやっとだったけれど、後半ではフランシスを皮切りに何枚か似顔絵を描き、自分で作った器を何人かにプレゼントしたりすることも出来た。彼らはとても喜んでくれてとても嬉しかった。友達がたくさん出来た。だけれど、ディスコミュニケーションもたくさんあった。やはり、言葉ではないとわからないこともある。ルワンダ学生がメモリアルで自分の体験を話してくれたが、私はそれを十分理解することが出来なかった。トゥワの村ではインタビューで少年の名前すらきちんと聞けなかった。誤解無く知るためには言葉は必要不可欠で、私の今後の大きな課題のひとつである。

渡航中、この国で美術の入る隙間を探していた。教育に置いても、「美術は高いので今のルワンダではそうした授業をするのは難しい、けれど美術は素晴らしいものだから将来絶対やりたい」と校長先生がおっしゃっていた。（職員室に 2 枚子どもの描いたポットの絵があったのが印象的だった）トゥワのツ

ボも、伝統工芸品として確立しているわけではなく、お金にならない。街中の物乞いや、食べ物をねだってくる子どもが居る中でそんな悠長なこと言ってはいられないのかなとも思った。それでも、将来ルワンダンアーティストが世界で活躍するようになるのは楽しみである。

そして、彼らの音楽や踊りは素晴らしかった。ルワンダについて一晩あけた日曜日。朝7時から夕方まで、ホテルジョイフルの隣の教会ではミサが行われ、ほぼ一日中賛美歌や、神さまの歌が聞こえてきた。日本に居るとあまり感じない信仰の深さを感じた。キヨンベの村でも歓迎のダンスや歌を歌ってくれた。そうしたものが文化に根付いていることがうらやましく思った。惜しくも、コンサートは中止になってしまったが、ＩＮＤＡＮＧＡＭＵＣＨＯのパフォーマンスも練習やパーティで見ることが出来た。そこでのエネルギーの爆発はとんでもなく、とても感動した。

ルワンダの人々はとても友好的で、魅力が沢山ある。とても好きだ。お互いに手をつないで歩いていると何故かとても楽しくなる。彼らがもっと良い生活を送れるように、協力したいと思った。けれど、一方的にお金だけを渡すことに違和感を持つのも確かだ。街中の物乞いや、ストリートチルドレンに「お金ちょうだい」と言われてもただあげることに抵抗があった。そうした人達に、絵のモデルになってもらって、報酬に食べ物やお金をあげるならば、ＯＫだなあと思った。彼らが自力でお金を得られるようになる手助けを私たちはしていけばいいのだと思った。

ルワンダにいって、確実に私の中で何かが変わった。ルワンダで見たものは良い意味でも悪い意味でも相当なショックだったらしい。帰国後、このまま美術をやっている意味がわからなくなったし、大学を辞めようとさえ思った。これから、そんな自分自身と向き合っていかなくてはいけない。

そして、多くの貴重な経験やたくさんの友人を得ることが出来た。別れは不思議と悲しくはなかった。また会える。なぜだか確信がある。他の日本人メンバー、ルワンダメンバーのアルフ達、渡航に携わってくれたすべての人達に感謝したい。本当にありがとう、ムラコゼ！

久保唯香

早稲田大学文化構想学部 2 年

「ほら。これが、黒の大陸だ。僕の世界だ。」初めてのルワンダの公共バス。最初の交差点を過ぎたとき、代表のアルフレッドが私に言った。ああ、来たんだ、ルワンダに。ここは、私の世界ではない。彼の世界なんだ。興奮気味の私は、そう感じた。

ルワンダはもちろん、アフリカに来るのは初めてだった。24 時間を越える移動時間、7 時間の時差。短い滞在ではあったが、事前に接種した予防注射は 4 本、薬も飲んでいた。ルワンダに行く理由を何度聞かれたか分からないし、何度自問自答したかも覚えていない。ここに来るためには、正直覚悟が必要だった。

渡航の実現が危うくなり、自分の力不足を本気で悔やんだ夜が続いたのは、渡航 1 カ月前だった。ルワンダに行くという義務感と、アルバイトで働かなければ行くこともできないという焦りと、もっとルワンダのことを勉強したいという好奇心と、渡航それ自体への疑問や反対に立ち向かっており、私は正直張り裂けそうだった。それよりも増して、ルワンダ側との交渉に、私は一種の限界を感じていた。チャットというコミュニケーションツールの伝達情報量は会話と比べて何倍も少ない。なぜ相手が怒っているのか。なぜこんなに返答が遅いのか。何を意図しているのか。私に何をしてほしいのか、分からないことがよくあった。スケジュールも変更に変更を重ねた。出国の前の日まで時間の確認をしていたものだった。

しかし、実際にルワンダでの生活が始まって、水シャワーを浴びて、流れないトイレに入って、ぎゅうぎゅうづめの車にのって道を走っていくと、それが「フツウ」になっていった。メモリアルでたくさんの骸骨を見て、悲しくて、くたびれて、ふと気がつくと、どうして私はもっと早くルワンダに来なかったのかと考えていた。

ルワンダでは、チャットやメールでは伝わらなかったたくさんの情報が滝のようにふってくる感覚を味わった。「ルワンダの状況が分からないからそんなことが言えるんだ」と言われてむかむかしたことも、「やっぱりそうだっかかもしれない」と思い直した。メールで 4 往復、チャットで 1 時間くらいかかる話が 10 分で済んだ。ルワンダの地理と社会の様相を見たり知ったりするのも面白くて仕方なかった。ルワンダ人の友達は得意になって、千の丘とサバンナと火山の話しや、ジェノサイドから伝わる噂を教えてくれた。お茶畑でたくさんの女性と子どもが働いていたり、山の向こうまで広がる基地や、取り残されたような小さな集落に電気がともっているのを見た。その風景は、授業や課外活動などあらるる場面で思い起こされている。

一方で、情報が伝わるからこそ分からなくなることもあった。一人ひとりは確かに違う発想を持っていたが、概してルワンダの大学生が考える「社会貢献」の在り方と、自分が思う方針が微妙に違っていた。どれもが決して間違ってはいない議論だった。ただ、話せ

ば話すほど、実際に何をすればよいのか分からなくなったのだ。

結局、100%の確信がないまま起こした私たちが下した結論がよかったのか悪かったのか、私にはまだ分からない。しかし、「社会貢献」の議論によってこの団体は危機的状況に陥ったと同時に、逆に私は2国間では陥りやすい一方通行という危機から脱出するきっかけになったと思うのだ。母国語でない英語をつかいながら、言いたくないことをいい、必死に価値観をすり合わせた経験は貴重である。私はこの議論を通してルワンダ人と共に「相互理解」の本質をもう一度考えることができたと考えている。

大学生の私は社会とどう関わっていけばよいのか。これは大学に入学した時からの疑問であり、その疑問が学生会議で活動するひとつの動機となっている。私はその答えをまだはっきりと見つけていないが、少しだけ分かったことがある。それはとても単純かもしれないが、多分にある意見に善悪はつけられないということ。対象者のニーズとアクターのアイディア(対象者≠アクター)、あるいはアクター(対象者＝アクター)のアイディアと一般的な解決方法は必ずしも一致しない。このとき、どちらが正しくてどちらが間違っているのかは、判断できるだろうか。大学生という立場の私は、今回のような議論やフィールドワークを通して、多くの時間をこの意見交換に費やすことができる。どこにいる時も何をするときも、自分が対象者であってもアクターであっても両方であっても、両者とは言わず、多方からの意見を聞き入れるような姿勢をとりっていきたい。

第6回日本ルワンダ学生会議を無事に終えることができ、安心していると同時に、少しさみしく、そして悔しい気分にもなっている。この渡航を成功させようとやっきになり、渡航前は不健康な生活を送ったわけだが、私はついに日本とルワンダ両国の代表の2人の連携プレーに加わることができなかった。大学の 4 年間という歳月は、偉大だと思う。と、感嘆している場合ではない。これからも私は、ルワンダに住む同じ大学生との「相互理解」を目指し、一緒にこの団体をつくっていかなければならないのだから。

品川正之介

早稲田大学教育学部 2 年

私の感想はルワンダで行う社会貢献活動「Takeaction」についての議論の概略を踏まえた上での第 6 回本会議の感想となっている。団体の内輪的な話であるし、少し長くなって退屈かもしれないが、この議論の概略なしに私の感想はあり得なかった。

■「相互理解」と「対等な関係」

私たちはこれまで、遠く離れたアフリカのルワンダに住む学生たちと、援助―被援助の関係ではない、「対等」な関係を築こうと、学生会議という活動を軸に、団体の理念として「相互理解」を掲げ活動してきた。

「相互理解」「対等な関係」

この二つのキーワードは我々の団体の活動の根底にある、非常に重要な理念である。そして、この二つのキーワードが、ルワンダ渡航期間中、どれだけ私を悩ませ、考えさせたのかわからない。今この時でさえも、このキーワードに対する疑問は私の頭の中をぐるぐると巡っている。

日本ルワンダ学生会議は今、大きな転換期にある。今回の渡航は、それ如実に表すようなものであった。なぜ今私たちは転換期にあるのか、それを説明するには、少しだけこの日本ルワンダ学生会議という団体の設立にまで話を遡る必要がある。

■団体の設立と「相互理解」

この団体創設者のある先輩は、初めてルワンダに渡航する際、「アフリカの貧しい国の人たちのために、なにができるのだろうか、どのように助けてあげられるのだろうか。」と考えていたそうだ。しかし、実際に現地を訪れ、ルワンダ人と交流をすると、「彼らは私達に援助なんて求めていないし、そのような考えは自分のおごりであって、彼らはむしろ、共に成長していくパートナーを求めている。」そのように感じ、そしてその経験から、援助―被援助の関係ではない、対等な関係での学生会議や交流を軸にして活動していこうと考えた。これが、日本ルワンダ学生会議の始まりであり、私たちの理念である、「相互理解」の始まりである。

アフリカと言えば、正直貧困や紛争など、ネガティブな印象が先行してしまいがちだろうし、特に日本において、そのような偏見を多くの人が持っていることは（以前の自分も同じような偏見を持っていたが）、この団体に所属するようになってからつくづく感じることである。アフリカのルワンダに関する活動をしている、と友人知人に言えば、ボランティア活動をしていると誤解されることも多い。もちろんルワンダにおいて貧困などの社会問題は多く存在するし、日本との経済格差は言うまでもなく大きいものである。しかし、そんな中あえて「相互理解」を目標に、ルワンダ人学生と援助―被援助の関係ではない「対等な」関係を構築しようとするこ

の団体の理念は素晴らしいと思うし、意味のあるものだと思う。しかし今、この理念は揺らぎ始めている。そしてそれがまさにこの団体が転換期である所以なのである。

■理念の揺らぎと Takeaction

ここでもまた少し昔の話になってしまうのだが、この理念の揺らぎを、私が初めて目にしたのが、2010 年度の冬に日本で開催された日本ルワンダ学生会議第 5 回本会議での、「Takeaction」についての議論の時であった。「Takeaction」の議論の主な内容はルワンダ国内での社会貢献活動、聞きなれた言葉で言い換えれば、ルワンダでボランティア活動をするか否かというものである。アフリカの奇跡と呼ばれ、年平均約 7%の経済成長をとげ、首都キガリでは、高層ビル建設や道路等のインフラの整備がものすごいスピードで進んでいるルワンダではあるが、その発展の陰には貧困問題、経済格差、ストリートチルドレンなど様々な問題を抱えているし、まだまだ発展途上の国である。今までのルワンダ渡航で、このようなルワンダの負の部分を先輩たちは見てきたし、実際今回の渡航で私たちもそれを目の当たりにした。しかし、この団体の活動の目的はあくまで「相互理解」であり、そのようなルワンダの負の部分に対して学生の立場で無理に何かアプローチをするというよりも、その現状を学ぶことが大切であると今まで考えられてきた。だが、第 5 回本会議では、ルワンダ人学生たちの「何か社会貢献活動をしたい」という強い要望を受け、なにか団体として、ルワンダの社会に貢献できることはないか、なにか行動を起こさないのか、つまり「Takeaction」について真剣に議論することが始まった。先輩が「彼らは援助なんて求めていない」と思ったことは、一概に間違いだったとは言えない。しかし、事実ルワンダ人はルワンダでの社会貢献活動をしたいと訴えているし、日本人自身だって、ルワンダの負の部分を目にするたびに、目の前に困っている人がいるのに何も行動を起こさなくてもいいのかという葛藤に苦しむことがあったのではないかと思う。しかし、Takeaction で、何かルワンダ社会を支援することは、援助―被援助の構造を生み出し、私たちの理念とずれが生じるのではないか、もしその活動に重きを置かれすぎたら、今までの学生会議や交流による相互理解が達成されるのか、など日本側でこれに対する議論は紛糾した。第 5 回本会議では、ルワンダ人達の意思を汲み、とりあえず何か社会貢献活動を始めるというところまで決まったが、意見がまとまらずこの第 6 回本会議で Takeaction の議論に決着をつけることになっていた。

ルワンダ人が、社会貢献活動をしたがる理由はいくつかある。まず一つ目は、彼らが純粋に何か社会に貢献したいと思っていることである。貧困や格差など、ルワンダ社会を見渡せば社会問題なんて山ほどある。それを毎日自分の目で見て感じるルワンダ人が、なにかそれに対してアプローチしたいというのは自然な成り行きであろう。また、日本人は「学生ができる程度のちっぽけな援助よりも、今は文化交流など、互いを知る活動に重きを置いた方が良い。」という考え方を持っている一方、ルワンダ人学生は、「たとえそれが小さなことでも、やれることはやるべき。」という考え方を持っていることも、彼らが takeaction をしたがっている理由だと思う。さらに、大学からの補助が打ち切られ

たということがある。今までこの日本ルワンダ学生会議の活動には、食費や交通費の面でルワンダの大学側から補助が下りていた。しかし今年はそれらの補助が打ち切られてしまった。その理由として、国家が大学の教育に割く予算を減らしたこと（現在は初等教育の普及等に力を入れているため）に加え、現在 NUR には、KOICA（韓国版 JICA）や、中国の援助団体(？)のような組織と協力して、ルワンダで社会貢献活動を進める学生団体ができ、活発に活動していることが考えられる。それらの団体はルワンダの経済発展や社会のために役立つ活動を次々と行っているそうだ。そのような状況で、大学側からは「君たちの団体は今までにどんな成果を出してきたのか。」と問われ、補助が打ち切られてしまった。これはある意味しょうがないところもあると思う。経済発展が目下の課題であるルワンダにおいて、「交流」を主にした、成果や結果がすぐに表れない活動（そもそも表れるかもわからないし、目に見える成果であるかもわからない）よりも、すぐ目に見えてルワンダ社会に貢献するような活動の方をサポートするのは当たり前といえる。だから、なにか社会貢献活動をしないと団体の維持が困難であるし、社会貢献活動をすることで、国内での知名度を上げてもっと団体を大きくしていきたいというのがルワンダ側の言い分であった。

第 5 回本会議を契機に、Takeaction に向け動くことになったのだが、大学からの援助打ち切りにルワンダ側代表アルフレッドは焦り、この今回開催の第 6 回本会議で何か成果を出さねばいけないと、渡航前の企画段階でチャットやメールを通じて訴えてきた。しかし、渡航まですでに時間は少なく、ルワンダのインターネット環境や時差様々な理由で意思疎通は困難を極めた。そんな中、日本側からは、様々に Takeaction の案を出したが、ルワンダ側は受け付けず、「ヤギを貧しい村に贈りたい」との案が出てきた。この案に日本側は当初猛反発した。ただ物を与えるだけの援助？誰が面倒を見るの？死んでしまったら？お金はどこから出すのか？挙げればきりがない。しかし、渡航の直前まで話はまとまらず、このヤギをあげる案はルワンダについてから議論して買うか買わないかを決めるということになった。

■ルワンダでの議論

ルワンダに到着し、しばらくした 8 月 12 日に、この「ヤギを貧しい村にあげる案」や takeaction について議論した。そこで僕はすこしショックを受けた。議論に参加しているルワンダ人学生から聞こえる「社会貢献活動をしたい」「ヤギを贈りたい」「発展のためになることをすべき」などの意見の大合唱。耳から聞こえるのは「Development」という言葉ばかり。さらにこんな意見も聞いた。

「日本に渡航する人数が減ってもいいから、そのお金で社会貢献活動をしたい」

この言葉を聞いたとき漠然と、彼らがこの団体に所属する一番のモチベーションは、「日本人とルワンダでの社会貢献活動をする」ことなんじゃないかと思ったのだ。

結局、「①ヤギを買う費用はルワンダ人が第 5 回本会議のダンスイベントで踊って得た収益の半分を用いる。②贈り先は以前から日本ルワンダ学生会議と親交があり、しっかりとヤギの面倒を見てくれるだろう信頼できる村長がいるキヨンベ村へ贈る。③贈ったあとのサポートはルワンダ側がしっかりやる

④来年度からの Takeaction はただ、何かをあげるような活動ではなく、しっかり議論する」ということで結論に落ち着いた。また、ルワンダ着いてからわかったのだが、この牛やヤギなどを貧しい村にあげるというのは、ルワンダの文化のようなもので、ジェノサイドメモリアルで手に入れた新聞（機関紙？）などの記事にも貧しい村に誰それが牛を寄付、みたいな記事が 2、3 個見つけられた。

■援助と援助慣れ

数日後僕たちはキヨンベ村へ向かった。そこには洋服制作の職業訓練校があって、村の人々達が僕たちを踊りや歌で歓迎してくれた。学校の中に入って一通り挨拶をした後、アルフレッドがヤギの件について村人に説明した。すると村長が「私たちを支援してくれてありがとう。この協力が来年もずっと続いてくれることを願っています。」と言ってくれた。この瞬間、僕はすごく複雑な気持ちだった。僕はこの村の人を良く知らない。「相互理解」なんてものは皆無である。それなのにただヤギをポンとプレゼントして援助をした。僕たちとルワンダ人の間で、援助―被援助という構造が出来上がってしまった。そう思ったのだ。と同時に、何故このような単純な援助をしてはいけないのかとも思った。今まで団体の、援助は嫌だみたいな雰囲気の中で、自分も漠然と援助やボランティア的な活動について一概に良くは思っていなかったわけだが、本当に困っている人がいて、自分が手を差し伸べられるのなら、渋ってないで助ければいい。そうとも思った。トゥワ村に行った時もそう思った。村の人に話を聞くと、いろんなものが足りない、生活に困っている。という声をよく聞く。街で見かけるストリートチルドレンはずっと僕の後を追って物乞いをしてくる。大学のすぐ近くには盲目の物乞いが毎日道端に座っている。そんな人たちを見るたびに、複雑な気持ちになった。

しかし、もう一つ考えさせられたこともある。渡航の終盤、ルワンダでごみ処理施設の管理と技術指導をしていらっしゃる三戸さんから聞いた「援助慣れ」ということについてである。三戸さんは次のようなことを話してくれた。「ルワンダ人はキリスト教国であり、待っていれば誰かが助けてくれるという精神を持っていたり、歴史的に自分たちが援助を受けるのはある意味当たり前のことのように思っている一面がある。また、援助をするとしても、援助がほんとにその人のためになるか見極めねばいけない。」このお話を聞いた後に、JICA の職業訓練支援を受け、現在インターネットカフェを経営しているルワンダ人男性を訪ねた際、三戸さんから伺った「援助慣れ」を垣間見ることとなる。彼の経営するインターネットカフェは使用しているパソコンが古くなり、しかも断線でインターネットが使えなかったり、使えても回線が遅かったりと、経営がうまくいってないとのことだった。そこで彼に、これからどうするつもりでいるのか聞いてみたところ、「新しく何か援助がないと何もできない状況だ」とこぼしていた。日本人メンバーが、「パソコンやインターネットの知識や技術を持っているのだから、学校で教えたりいくらでも考えようで仕事ができるのではないか」と聞いてみても、「援助がないとできない」と答えるばかりであった。JICA の職業訓練支援で、技術や知識を得て、事業を成功しているルワンダ人の方々も多くいたが、このインターネットカフェの男性のように、事

業に失敗した場合それでギブアップみたいな、創意工夫の欠如（ここまで言うのは正直言いすぎであるとは思うが）が援助によって引き起こされるのではないかと思った。事実、援助を広い視点で見てみれば、これは様々要因はあるとは思うが、アフリカにはずっと莫大な援助が流れているにも関わらず、いまだ貧困から抜け出せない国ばかりである。援助は、本当に人のためになるのだろうか。

今後私たちは何かしらの Takeaction を進めていくことにはなるのだろうが、正直個人としては、「対等」という関係が守れるのか、そもそも「対等」とは何なのか、我々が行う「援助」がルワンダ社会にとって本当に良いものなのか、私たちが「援助」や「社会貢献」というそんな責任重大な活動をたった二週間程度の渡航でできるのか、などすっきりしないところがまだ残っている。

■相互理解とは

Takeaction について考えたり、議論をしている中で、彼らルワンダ人メンバーは日本のことに興味があるというより、日本人と一緒にルワンダでの社会貢献活動することに興味があるからこの団体に入っているのではじゃないか、ルワンダでの社会貢献活動がしたいのならば、別に交流する国は日本である必要はない、などと捻くれた考えを持ってさみしい気持ちになることもあった。しかし、この考えはアルフレッドが最後にしてくれたプレゼンを見て、間違っていると気付かされた。

彼は学生会議のトピックがすべて終了し、閉会式を執り行おうとしていた時に、すこし見てほしいものがあると、サプライズのように日本の歴史についてプレゼンをしてくれた。かつて私たちがルワンダについてプレゼンしていたの見て、自分も日本についてプレゼンしようと思ったそうだ。アルフレッドの家には日本の国旗が部屋に飾ってある。日本語も覚えて使ってくれる。そしてアルフレッドは自分の自腹を切ってでもこの団体を継続させようと裏で一生懸命働いてくれていた。彼は日本のことが大好きである。アルフレッドはかなり古くからいるメンバーだが、初めから日本のことを好きだったのかはわからない。そもそも日本人の学生が NUR のダンスグループと交流を始めたのが日本ルワンダ学生会議の始まりであって、アルフレッドがこの活動に参加したきっかけは、たんなる偶然であったかもしれない。けど今彼は日本のことが純粋に好きであると思う。そして、同じように、僕もルワンダのことが大好きだ。初めてルワンダを知ったときは、ジェノサイドでしかルワンダを知らなかった。この団体に所属した理由も、このジェノサイドについての興味があったからでもある。けど今は、ルワンダ人を知り、歴史を知り、文化を知り、食事も、風景も、いろんなルワンダを知って、今僕がこの団体に所属している理由は、「純粋にルワンダのことが好き」だからである。

アルフレッドのプレゼンを聞いているときに、僕たち日本ルワンダ学生会議が活動する意義が自分の中ではっきりした気がする。「先進国日本について知りたい」でも、「社会貢献したい」でも、「ジェノサイドに興味がある」でも、「アフリカに興味がある」でも、団体への入り口は何であれ、実際に交流してみることで、お互いのことをよく知って、互いのことを好きになれれば良いのだ。「相互理解」とは、どんな活動をしようとも、究

極的に、両国が互いを知り、好きになることである。これが僕の現時点での答えだ。（交流してみて嫌いになっちゃうこともあるかもしれないけど、ここは希望を込めて）

この「好き」という感覚は非常に重要な意味を持つ。どこかの国、人、なんでも良いが、初めに「嫌い」という気持ちや、偏見や誤解を持ってしまうと、そのせいで、相手のその他の面を見ようとしなくなる傾向があるのではないか。初めに「好き」という気持ちを持てば、相手の至らない部分に対しても寛容な気持ちを持てる。（実際ルワンダの水道事情やサービス業に関しては多少ひどい目にあったこともたしかである…笑。）日本人も、ルワンダ人も、この団体の活動を通じて、お互いのことを理解し、好きになればいいのだ。お互いを知り、理解し、好きになる。ごく当たり前で単純なことのように思えるが、いろいろあったこの渡航を通じて得たその認識は、自分の中でしっくりきているし、こんな単純なことではあるが、「相互理解」の何か核心的なところに触れているものだと思う。

ところで、そもそもルワンダ人メンバーのこの団体への参加理由は社会貢献だけではもちろんない。日本が純粋に好きで、興味を持ってくれている人ばかりだ。会話では日本についてのことをよく聞いてきてくれる。フランシスというルワンダ人メンバーは日本語の達人である。パーティの日に、「今日の 3 時に宴会！遅れるな！」いきなり彼が言ってきたその台詞には爆笑したし今でもその声が聞こえてくるような気がする…(笑)頑張って覚えてくれたのだろう。今まで Takeaction で頭がいっぱいであったせいで、懐疑的な気持ちを持ちがちであったが、「相互理解」という理念をちゃんと彼らは理解し、そして共感してくれている。

■今、共に変わるとき

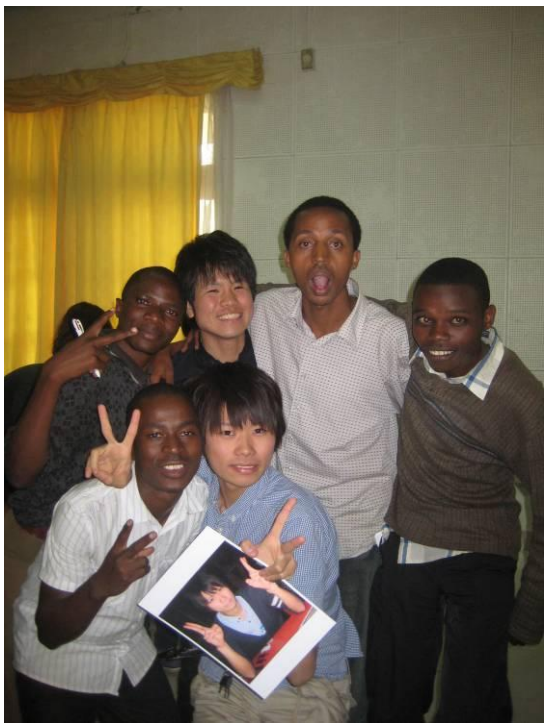
ルワンダ社会はジェノサイドから 17 年が経ち、経済成長の只中、変化の中にある。日本ルワンダ学生会議も、本会議開催 6 回を迎え、大きな過渡期にある。団体の活動範囲は Takeaction を始めるに伴って変わるし、理念に多少の変更も必要だろう。また日本側ルワンダ側共にこの団体設立当初からいるオリジナルメンバーがいなくなってしまうのも間近である。

そして今、この僕自身も変わるときにある。ただ無邪気に国際交流をするだけでなく、もっと相手を深く知り、社会問題を一緒に考えられる位知恵をつけ、ルワンダについても自国についてももっと知識をつけなければいけない。それでも、その根底にあるのは「ルワンダが好き」という気持ちだ。これは多分揺るがないであろう。そして、今だにアフリカ＝サバンナ・貧困などのステレオタイプを持っている日本人にルワンダについてもっと知ってほしいと思っている。

今回の渡航は、Takeaction のことに意識が行き過ぎて、個人的にはジェノサイドについて、考える時間が少なかったように感じる。これはいい意味にも悪い意味にも捉えられるが、あえて良い意味で取るならば、この第 6 回本会議は、今までの渡航の中で一番私たち団体の未来を考えていた渡航であったということだろう。そしてそもそも、ルワンダはジェノサイドだけじゃない。もちろんルワンダに関われば必ずジェノサイドに突き当たる。僕がこの団体に加わる時、入口となったのもジェノサイドである。しかし、ジェノサイドは重要ではあるが、ルワンダの要素の

一つにすぎないのだ。美しい自然、人懐っこい人柄、甘くておいしいティー、忘れられないキガリの夜景、迫力のあるダンス・ドラムパフォーマンス、おなか一杯アガドゴ、優しい友人、のんびりアフリカンタイム、子供たちの笑顔…今回の渡航で、さまざまなルワンダを知れた。これからも、もっとルワンダについて知って、そして叶うならば、大学在学中にもう一度ルワンダに渡航したいと思っている。

最後に、こんな素晴らしい経験をさせてももらって、支えてくれたメンバー、家族、関係者の皆様には感謝の気持ちで一杯です。ありがとうございました。



嶋田康平

早稲田大学法学部 2 年

この部分を完成させるのに数週間かかった。何度投げ出したことか。

言葉で表現できない心情や思考も数多くある。それらを言葉にするのは、本当に骨の折れる作業である。ここに書く私の言葉が共感を得られるかは分からない。いたるところに語弊があるだろう。それでも、苦悩しながら言葉にして発信してみる。だから、一言一句、噛みしめて読んでほしい。

郷に入っては郷に従え、という諺がある。でも、従う必要なんてない。その土地の文化に順応したところで、それは便宜上の意味しか持たない。ただの世渡りの術だ。

「これが私たちの文化だから」

「それじゃ仕方がないね」

そんな関係が「相互理解」の関係なのか。文化が違うことなど初めから分かりきっている。「ここではこれが当たり前」を押し通し、自分の文化を強制する行為は、“反則”以外の何ものでもない。

この団体の活動は、文化と文化の接触である。当然、文化摩擦も起こる。あらゆる違いを少しずつ埋めていかなければいけない。それは、主張と受容の繰り返しである。時には、強く頑強に主張する。時には、苦悩しながらあきらめる。だから、「相互理解」には莫大

な時間と労力がかかる。ニコニコ微笑み合うだけの即席の人間関係もあるだろう。だが、「相互理解」とは、そんな生易しい関係を意味しているのではない。煩わしくて七面倒臭い道のりに対して、強い決意と覚悟をもって臨む必要がある。

ルワンダ渡航中、私は、道半ば「相互理解」をあきらめた。

「ふざけるな。そんなことできるか、このアホ！」

そんなルワンダ人への主張を心にしまい、押し殺した。もう、厄介ごとには関わりたくないと思った。傍観に徹した。ニコニコ笑い合うだけの人間関係で終わりにしてしまおうと心に決めた。ルワンダ人に主張するだけの、強い決意と覚悟がなかったからだ。心のどこかに、彼らとの「相互理解」を他人事だと思う自分がいた。そんな無責任な人間が、主張をしたところで誰の役にも立たないのは明白だった。この気持ちは今でも全く変わっていない。

この渡航は、自分にとって大きな利益になったと確信している。「相互理解」のような大きな目標に立ち向かうには、強い決意と覚悟が必要なのだと学んだ。さらに、自分の役割が少しずつ見えてきた。人間皆それぞれ、その人間にしかできない役割がある。自分の役割を探しだし、それを演じるというのは、思っているほど簡単ではない。自分の立場を知り、自分の生きている社会を知り、自分の限界を知る。そして、ようやく自分の役割が定まり始める。日本ルワンダ学生会議は、私にしかできない役割、私が果たすべき役割をじっくり考えさせてくれた。これは本当に貴重な経験だ。ここでの活動は、いつも思ってもみなかった発見を与えてくれる。今回の渡航を含め、人間としての成長を実感できる素晴らしい活動である。

滝田 知子
慶應義塾大学法学部政治学科 2 年

ルワンダ渡航から帰国して早いもので一か月が経った。私は第 6 回学生会議における直前の日程変更に伴い、12 日から 23 日までの参加となり他の東京メンバーより 1 週間短い滞在となってしまった。実質 10 日間という短い渡航ではあったが、その中でも様々な経験をし、感じた。徒然なるままに思いを書きたい。

私が今回の渡航に参加した理由はそう難しいものではなかったと思う。ルワンダといえば 1994 年のジェノサイドのイメージが付きまとう。私自身紛争に興味があるため、ジェノサイドは大きな興味の一つであったことは間違いない。だが、ジェノサイドという事実をどこか理解できない自分もいた。本を読み、勉強会を開き、冬の招致でルワンダ人学生の口から体験談を聞いた。それでもまだ、人はなぜむごい殺戮をできるのか、そんなことを考えていた。だがそれ以上に、とても単純な理由があった。この団体の活動を通してルワンダを学び、第 5 回学生会議の招致で実際にルワンダ人に出会い交流をした。そうしたら、百聞は一見に如かず、ルワンダを自分の目で直接見たり肌で感じたり、もう一度ルワンダ人に会いたいと思うことは自然な流れだったのだろう。

日本から 30 時間もかけて行く、日本語のガイドブックに載っていない国は、私の想像とは違った表情を持っていた。千の国と呼ばれる通り美しい丘が広がる。アフリカ＝サバンナ、暑いではなくセーターが無ければ朝夕は肌寒い。24 時間営業のスーパーに行けば、外国製の生活用品や食料品、家電製品が並ぶ。（私のお気に入りのチョコレートペーストまで置いてあった！）そして驚いたことにキガリ市で綺麗な夜景を見られるのだ。無論東京の夜景ほどの輝きではないが、高層ビル群の夜景ではなく、低い建物や街頭の夜景は今でも目に焼き付いている。アフリカの奇跡と呼ばれるルワンダの首都キガリの発展はテレビ等で取り上げられるよう目覚ましい。キガリタワー、舗装された道路、ひしめく TOYOTA 車・・・いわゆる人々が思うアフリカ像とは異なる姿だった。成長の一方で、古い小屋の取り壊し・立ち退きやごみ問題、“綺麗なキガリ”の裏に隠された負の側面も見たし、繁華街には 1m おきに銃を持った警官が立っていて、都市の安定が保たれている一方で日本では感じない居心地の悪さを覚える時もあった。キガリを出て丘を進めば茶畑、バナナの木々、重い荷物を抱えて歩く子供たち・・・キガリとは異なるルワンダがそこには広がっていた。それでも共通して、どこに行っても人々は人懐こい笑顔で手を振り、途切れなくお喋りを楽しむ。

後発隊の 3 人、フランシスとギコンゴロのジェノサイドメモリアルを訪れた時のことが今でも印象に残っている。1994 年のジェノサイドでギコンゴロは特に被害が大きく、

5 万人が犠牲になった場所である。(詳細は個別の訪問先レポートを参照していただきたい。) ギコンゴロのジェノサイドメモリアルには 10 ほどの倉庫のような建物があり、それぞれに 6 つの部屋がある。その部屋を開けると、鼻につく死臭とともに、無造作に並べられた 100 体を超える薬漬けになった遺体が目の前に広がっていた。骨が異様な方向に曲がっているもの、髪の毛や指輪が残っているもの。言葉が出なかった。頭の片隅に追いやられていたジェノサイドという事実が、現実のものだったことが急に意識に引き戻された瞬間だった。案内をして下さった女性はジェノサイドを経験し、夫と子供の遺体がこのメモリアルに安置されていて、このメモリアルの案内を務めているのだという。帰り際にフランシスは私たちにこう言った。「神以外に、生き残った人々を助けた人を考えられるか？私は思いつかない。見ての通り、周りには隠れられる場所なんてないし、犬を使って人間を探し出して殺した人もいたし、フランス軍も加担していた。本当にたくさんの人が犠牲になったけれど、少しの人は生き残った。神が彼らを救ったんだよ。」辺りは綺麗な丘で牛の鳴き声や子供の声が聞こえるのどかな場所にたたずんだ時、彼の言うことが少し分かる気がした。
そしてここを訪れ、私は紛争予防を学びたいと改めて強く思った。

そして今回の渡航では今までの渡航とは異なり、take action を行った。2 年目の私がいうのも可笑しな話ではあるが、この団体の活動は過渡期にある。この take action に関する議論と、現地で活動する方がおっしゃっていたルワンダの援助慣れの側面が、重なったような気がしたことも事実である。援助の難しさ、これが正しいという答えの定まらない問題にもどかしい気持ちを覚えたこともあった。

また、学生会議では NUR の学生がルワンダの政策を学び、理解し、国の将来を真剣に考えている姿に刺激を受けた。ルワンダでは大卒の就職率は良いわけではないようだが、それでも熱意がある。私は普段日本に対してそんな意識を持って過ごしているだろうか。自国のことを意識的に考える姿勢をルワンダ人から学び、今後の大学生活に反映させたい。

ルワンダを後にしてケニアに向かう機内で、10 日間の滞在を振り返っていた時に見た空の美しさや感動を決して忘れないだろう。現地滞在日程の半分以上、お腹を壊したことも今となれば微笑ましい思い出である。最後に、渡航に際しお世話して下さった方々、試験前の忙しい時期の合間を縫って受け入れてくれたルワンダ人メンバー、そして渡航メンバーに感謝の気持ちを表したい。ありがとう、ムラコゼ！

永井陽右

早稲田大学教育学部１年

高校時代に教科書で勉強したルワンダのジェノサイド。その後ルワンダに関する映画や本を見て、私は大学在学中には絶対にルワンダに行くと決意していた。同時に“困っている人を救いたい”という気持ちが芽生えていた。つまり大学入学当初、私は「ルワンダはジェノサイドがあったので、今も困っている人がたくさんいる。その人達を助けよう。」と考えていた。そして実際に行動しようと強く決心していた。そうして始まった学生生活。真っ先に早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター（WAVOC）へ向かった。そのプログラムの中で見つけた団体、それが日本ルワンダ学生会議だった。すぐにホームページを調べ、説明会とミーティングの見学に行き、そして入会。だが、入会するときに問題があった。私はこの団体の理念を完全に理解することができなかったのだ。対等な関係、相互理解、果たしてこれは意味があるのだろうか。私は人を救いたいのに…。

自分の理念と団体の理念のジレンマに陥る中、とりあえずまずは現地に行こうと思い、渡航を希望した。私が日本ルワンダ学生会議の一員として、ルワンダに渡航してみて何を感じ、何を得たのか。他のメンバーの感想とかなりズレがあるだろうと思いつつも、自分にとって印象的だったことを挙げていきながら述べたいと思う。

ルワンダに到着し空港の外へ出た時にまず感じたこと、「なにこの人達、怖い」。バイクタクシーとバスの客引きが私たちの周りに溜まっていたのだ。加えて、新メンバーなのでルワンダメンバーとは一度も会ったことがなかった私は、ルワンダメンバーとみんなが再会した時も居場所が無く孤独であった。なんだか色々とイメージが違う。私はやっていけるのだろうか。そんな不安から始まった初ルワンダ。すべてが初めてだった。

日本ルワンダ学生会議とあるように、アカデミックな交流であるルワンダ学生達との学生会議はものすごく刺激的だった。こんな遠く離れた土地に住む人達と理性的討論空間を作ることができることに感動した。彼らを日本にいる友達と同じように素直に思えたし、共に問題について考えることはこの団体の理念にぴったりあてはまると感じた。どこに行くにも誰かルワンダメンバーが付いてきてくれたし、新メンバーで居場所が無かった私は彼らのフレンドリーさに本当に助けられた。ルワンダという遠い地で多くの友達を得ることができて、本当にうれしかった。見た目は黒人だから私たちとは異なるが、直接対面して話してみると、対等ということを意識せずに自然に対等な関係でいたように思う。自分の中でこの団体が頑なに大切にしているものに気が付けたような気がした。

しかし、同時に自分の理念もより一層強

まっていった。

まずは、ジェノサイドメモリアルについて述べたい。私たちは首都キガリにあるメモリアルとギコンゴロにあるメモリアルの計２か所に行った。最初に行ったのはキガリのメモリアルだ。ここでジェノサイドの際使われた武器や頭蓋骨を見ることができたのだが、みんなよりゆっくり回っていたおかげで、ゆっくりと妙に冷静に観察できた。武器は重々しく、ほとんどの頭蓋骨はヒビが入っているか後頭部が割れていた。10 分ほど頭蓋骨と向き合って様々なことを想像しているとみんな一人の人間だったのだなと感じた。みんな痛かったに決まっている、僕らはケガして痛いと感じるのだから。

防腐処理された遺体がそのまま展示されているギコンゴロのメモリアルでは強い衝撃を受けるだろうと思っていたが、私はキガリのメモリアルの時と同じ心境で彼らを見ていた。そのままの遺体と頭蓋骨にどう違いがあるだろうか。胴体がないという違いだけだ。その違いで感情が変わるということに理不尽さを感じていて、妙に冷静だった。

次に、ゴミ処理場の訪問。私はゴミの山の深刻さに目が行ったのではなく、スカベンジャー（ゴミの中からお金になるものを探して生活している人々）という人々に目が行った。彼らはゴミ山のふもとに集落を作り生活している。なので、ゴミ山が崩れると生き埋めになり死んでしまう。彼らの家の屋根はアスベストでできていると聞いた。アスベストを吸うと遅かれ早かれ、死んでしまう。なにかできないかと強く思った。

全然まとまっていないが、結論から言ってしまえば、私のジレンマはより強くなったということだ。

この団体の、対等な関係で相互理解を十分に体感でき、理解することができた。しかし、弱者を前にして、助けることができうるのに何もしない自分がいて自己嫌悪に陥った。結局、渡航の間弱者にフォーカスしていた気がする。命はたった一つであり、そのことは平等で対等だ。なのに、苦しんでいる人と苦しんでいない人がいる。苦しみは世界共通だ。私に何かできないのかと思ってしまう、私がお金を十分に持たない学生であっても。具体的な行動はまだわからないが、さしあたって今は、フレンドリーに生きようと思う。私は渡航前にパッチ・アダムスに直接「とにかくフレンドリーでいなさい」と言われた。パッチは笑いで人々を救う人だ。なので、私はこの渡航中どんな人にでも、とにかく心からフレンドリーに接するように心がけていた。その結果、それを根底とすることがすべてだと思うようになり、私がジレンマに悩むということも無駄ではないのだと感じている。無関心でいないということが大切なのではないか。そして現在、私は直接人々を助ける活動も始めようと考えている。

最後になってしまったが、すべての JRYC のメンバー、並びに支えてくれた友人、先生方、家族に感謝を示したいと思う。ありがとうございました。

【付録】

会計報告.....128
写真館.....131

第六回学生会議　現地費用会計報告

作成者：海原早紀

支出

日付	金額（ﾙﾜﾝﾀﾞﾌﾗﾝ）		使途
8 月 6 日	15000	2000×7 人	キガリ市内レストランで夕食
	68000	6 人分×2 泊	キガリ市内ゲストハウス宿泊
8 月 7 日	12000	2000×6 人	朝食
	1300	100×6 人×往復	宿⇔空港
	1800	300×6 人	宿→EXPO　バス
	24000	3000×8 人	EXPO で昼食
	1800	300×6 人	EXPO→ジェノサイドメモリアル　バス
	1800	300×6 人	メジェノサイドモリアル→宿　バス
	14000	2000×7 人	キガリ市内で夕食
8 月 8 日	1400	200×7 人	宿→日本大使館　バス
	30000	1 台	大使館→St.Paul　タクシー
	30000	3000×10 人	キガリ→ブタレ　長距離バス
	180000	6 人分×6 泊	ブタレ　バルトスホテル宿泊
	37000	7 人分	夕食
	8500		携帯電話チャージ
8 月 9 日	7250	9 人分	ルワンダ国立大学カフェテリアで昼食
	3650	7 人分	ブタレ市内カフェで夕食
8 月 10 日	6100	7 人分	ルワンダ国立大学カフェテリアで昼食
	25000	2500×10 人	ブタレ→ムランビジェノサイドメモリアル　バス
	2650	7 人分	ブタレ市内カフェで昼食
8 月 11 日	5950	7 人分	ルワンダ国立大学カフェテリアで昼食
	18000	1000×9 人	大学→kings palace　バス往復
	1500	500×3 人	kings palace　入場料ルワンダ人
	20000	3000×6 人	kings palace 入場料日本人
	2300	7 人分	ブタレ市内カフェで夕食
8 月 12 日	6900	7 人分	ルワンダ国立大学カフェテリアで昼食
	6400	7 人分	ルワンダ国立大学カフェテリアで夕食
8 月 13 日	5800	7 人分	ルワンダ国立大学カフェテリアで昼食
	16000	3 人分×1 泊	キガリ St.Paul ゲストハウス宿泊
8 月 14 日	33800	2600×13 人	ブタレ→キガリ　長距離バス
	80000	10 人分×2泊	キガリ St.Paul ゲストハウス宿泊
	27500	11 人分	キガリ市内で夕食
8 月 15 日	24300	5 人分	キガリ市内で夕食
8 月 16 日	2000		NGO・COPORWA 訪問
	20000		トゥワ村へ寄付
	190000	9 人分×4泊	ブタレ　バルトスホテル宿泊

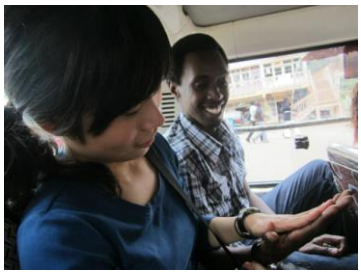
	49000	14 人分	ルワンダ国立大学カフェテリアで昼食
	200000		大型貸切バス　キガリ→ブタレ
	1000	100×10 人	バス
	27500	7 人分	ルワンダ国立大学カフェテリアで夕食
8 月 17 日	8750	7 人分	ブタレ市内カフェで昼食
	6900	7 人分	ブタレ市内カフェで夕食
	10000	5000×2 台	キガリ→カバロンド　タクシー
8 月 18 日	6800	6 人分	キガリ市内で昼食
	86000	9 人分×2泊	キガリ St.Paul ゲストハウス宿泊
8 月 19 日	60000	1台	タクシー　JICA 訪問
8 月 20 日	16400	6 人分	キガリ市内で昼食
	16000	1 台	タクシー　JICA 訪問
8 月 21 日	20000	6 人分	宿→空港　タクシー
8 月 22 日	2000	6 人分	朝食
合計	**854150**		

収入	
合計	**858400**

※渡航期間中、随時9人のメンバー徴収

収支合計	**4250**

＜写真館＞



おわりに

目が覚めたら、世界が黄色かった。赤く、開けた大地に降り注ぐ朝日。そこは、ルワンダでした。
ルワンダに到着したのは現地時間の 8 月 6 日午後 7 時 15 分。空港で預けたはずの荷物がすべて手元に届かず、十分な虫よけ対策もできないまま、慣れない蚊帳に入りました。あふれんばかりの不安をよそに、その夜は明けていったのです。初めての朝。私たちを待っていたのは教会から聞こえるミサと、ゆったりとした時間でした。
第 6 回学生会議は、開催も危ぶまれるほど数々の困難を乗り越え、実現しました。予期せぬ東日本大震災と、それに伴う授業期間の乱れ。ルワンダ国立大学の試験期間の変更。時差、ネット環境の悪さ、誤解、すれ違い、勘違い。さらに、日本国内でもメンバーは 500 キロ以上距離を隔てた東京と大阪から参加したのですから、渡航を終えた今振り返ってみると、よくやったものと思います。ここに、私たちの理念である「相互理解」の真髄が問われたといっても過言ではありません。1 回のメール、1 時間のチャットで相手が何を意図し、何を自分に求めているのか、全員が常に意識する必要がありました。それができないときはいつも、ひと悶着あったものでした。
今回は日本ルワンダ学生会議がルワンダで発足して 2 回目の渡航です。企画のノウハウも確立しない中、テスト前の大事な時期にも関わらず、ルワンダの学生はとびっきりのもてなしで私たちを受け入れてくれました。彼らと交わした議論、訪問の記憶は忘れることはありません。すべての経験は私たちの生活の実生活に、生々しく、いきています。
今回の渡航に際し、小峯茂嗣教授をはじめ、早稲田大学平山郁夫ボランティアセンター、ルワンダ、日本両大使館、多くの方々からご声援いただきました。至らない私たちの主体性を尊重し、特に団体の方向性に迷う私たちを影ながら見守ってくださる大人が何人もいました。心から感謝いたします。
日本ルワンダ学生会議は、決して永遠のものではありません。1 年 1 年、困難を乗り越え、新たな世代にバトンタッチしていかねばなりません。Youth である期間は長いようで短いのです。しかしだからこそ、私たちはここに集い、相互理解のために奮闘していることはいうまでもありません。
私たちはルワンダで、「今、ともに変わるとき」、その時間を共有しました。私たちの議論が、私たちのアクションが、未来に繋がっていくことを願ってやみません。もちろん、団体の将来へ。そして、ひとりひとりの将来へ。
最後まで目を通していただき、本当にありがとうございました。これからも、日本ルワンダ学生会議をよろしくお願い申し上げます。

早稲田大学文化構想学部社会構築論系 2 年　久保　唯香

日本ルワンダ学生会議　第 6 回本会議活動報告書

2011 年 11 月 5 日　第 1 版発行

編集　　品川正之介

発行元　日本ルワンダ学生会議